

わくせい
PROJECT
in 土佐市

レ
ポ
ー
ト
2
0
2
3

土佐市地域おこし協力隊 2023年度報告書

ミッション | 国際交流

外国からの技能実習生と地域住民との交流づくり

2025年、土佐市に「わくせい」というスペースが誕生する(予定)。

そこには、さまざまな世代、国籍、性別の人々が

それぞれの目的で集まってくる(予定)。

ある人はインドネシアのスパイスを買いに、

ある人は言語やデザインを学びに、

ある人は月に一度売り出されるバインミーを求めにやってくる。

そうして集まったさまざまな背景をのせたまま、

この「わくせい」はぐるぐるとまわり続ける(予定)。

この報告書は、これらの(予定)を実現すべく奮闘する

ふたりのメンバーによる高知県土佐市からのレポートである。



わくせい「ごはんのかい」第1回

Chap. 5	これから計画	246
Chap. 4	ごはんとスポーツ	186
	4-1 「となりのキッチン」と「自炊の会」	201
	4-2 ごはんのかい	214
	コラム② 自宅にコンテナを建てたふたり	226
	4-3 スポーツ活動	232
	4-4 土佐市国際交流推進実行委員会	246
Chap. 3	実践者に学ぶ	132
	3-1 ライプツィヒの「ごはんのかい」—大谷悠さん—	156
	3-2 香川と高知にモスクができるまで—岡内大三さん—	132
Chap. 2	シンポジウム	64
	2-1 レクチャー① 岩佐和幸さん	88
	2-2 レクチャー② 阿部一郎さん	96
	2-3 パネルディスカッション	122
	コラム① L のこと	64
Chap. 1	調査	16
	1-1 土佐市と制度の現状	51
	1-2 多文化共生のまちづくり促進事業	42
	1-3 調査実施	26
	1-4 共有会	16
	イントロダクション	8

私たち（阿部航太と児玉美香）は、2021年の秋に地域おこし協力隊の制度を活用して、高知県土佐市に移住することを決めました。当時、阿部は東京でデザインの仕事を、児玉は名古屋でまちづくりの仕事をと、別々の場所にいましたが、結婚を機に、一緒に働き、暮らすことができる移住先を探していました。その際に土佐市が地域おこし協力隊のミッション（活動のテーマのようなもので、各自自治体がそれぞれの方針で提示している）として掲げていた「国際交流—外国からの技能実習生と地域住民との交流づくり」というフレーズを見つけました。当時、地域おこし協力隊のミッションとして「技能実習生」を取り上げたものは私たちの見る限りではほかにはなく、土佐市がいち自治体としてこの課題に取り組もうとしていることに興味をもちました。もともと阿部が、異なるルーツをもつ人たちとの協働を目指すアートプロジェクトを実施していたこと、そして児玉が、まちづくりの仕事をおおして感じていた、人と人が関わることで生まれる場（コミュニティ）のおも

しろさを、ほかの地域でも実践してみたいと考えていたことがここにつながり、このミッションであれば自分たちの技術と経験をいかせるかもしれないと考えました。

私たちは2022年3月に、それまで縁もゆかりもなかった土佐市に移住し、4月1日よりこの地で「わくせいPROJECT in 土佐市（以下、わくせいプロジェクト）」を始めました。これは、技能実習生をはじめとしたさまざまな背景をもつ人が集うスペース「わくせい」を市内に立ち上げることを目標とし、それまでのプロセスを発信していくプロジェクトです。1年の活動を経て、2023年度開始時の計画では、「わくせい」は以下の3つの要素で構成されています（図1）。

①「多国籍スパイスショップ」

土佐市には、多くの技能実習生たちが生活していますが、か

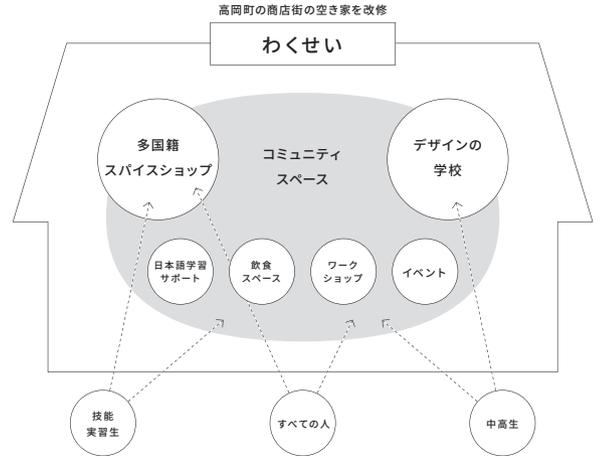


図 1

これらの文化圏で食される調味料、ハーブ、インスタント食品、お菓子などを取り扱うショップです。技能実習生たちにアドバイスをもらいながら商品をセレクトし、実習生たちが故郷の味を楽しめる機会と、地域の人たちが新しい食文化に触れる機会を同時につくります。

② 「デザインの学校」

地域の中高校生、大学生を対象としたデザインを学べる私塾を開きます。デザインの基本はコミュニケーション。自分で考え、調べ、発信するという一連のプロセスを、さまざまな背景をもつ人たちが集う場所で学びながら実践します。

③ 「コミュニティスペース」

「わくせい」はすべての人に開かれたコミュニティスペースで

もあります。定期的にイベントやワークショップを開催したり、日常的に立ち寄れるスペースがあったり、日常のなかでさまざまな出合いを生む場所を目指します。

この3つのうちのどの要素に惹かれるかは、おそらく技能実習生、地域の人、学生など、それぞれで異なるでしょう。しかし、各々の目的で「わくせい」を訪れたとき、かれらは意図せず顔を合わせることにになります。そこでいきなり「交流」が始まるわけではありませんが、まずは同じ空間で互いの存在を認識することから「外国からの技能実習生と地域住民との交流」を始めよう、というコンセプトです。

外国人口が急激に増えつつあるなかでも多文化共生事業が本格的に始まっていない「地方」において、多文化共生の専門的な知見をもたない私たちふたりが、どのように人々と関係を築き、課題と向き合い、スペースを立ち上げることができるのか……その過程での経験や気づき

は、近い課題を抱えているであろうさまざまな地域にとってのなにかしらのヒントになると考えています。また同時に「わくせい」がさまざまな人たちが集まる場所となれば、そこはまだどこにも生まれていない新しい文化の発信地となる可能性もあります。

この報告書は、「わくせいプロジェクト」の2年目の活動記録です。1年目は主に土佐市の現状を探るため、市内の技能実習生たちや、かれらの受け入れに関わる人たちへの聞き取りを行い、同時に県外において先進的な活動を展開する人たちへの取材を実施しました。また、専門家を招いての市職員を対象にした勉強会を開催し、制度における課題や、土佐市特有の状況について明らかにすることを試みました。

1年目の活動をおして見えてきた課題はさまざまですが、そのなかで最も重要なのは、技能実習生や特定技能外国人として土佐市に暮らす人たちが、どこで、どのような仕事をして、どのように生活をおくり、どのようなことを感じているのか、そのことを市も自分たちも全く把握

Chap.

1

調査

できていない、という課題です。このことに気づいた1年目は、わくせいプロジェクトの「0歩目」でした。そして「1歩目」をようやく踏み出したのが、この2年目です。今年度、「わくせいプロジェクト」の活動は市の多文化共生事業と連携して展開し、1歩目ながらも大きな前進があったと認識しています。2024年3月現在、技能実習制度の課題を解消することを目的とした新制度「育成就労」の設立が国会で審議されています。このように大きな変動の途上にあるいま、高知県土佐市といういち「地方」から、多文化共生のための新しいチャレンジについて伝えできればと考えています。

なお、ここで記すことはすべて地域おこし協力隊としての業務のなかで、土佐市と連携して実施されたことですが、その経験を経て記される見解や意見は、市の総意ではなく、あくまでも執筆者である阿部航太・児玉美香の個人的なものです。個人の視点をとおして、行政ができること、市民としての個人ができること、その両方を模索していきます。

土佐市と制度の現状

土佐市の現状

土佐市は高知県の県庁所在地である高知市の西隣に位置し、東側を仁淀川の河口に、南側を土佐湾に、北側を山々に囲まれたまちです。人口は2023年12月1日の時点で25013人(*1)、県内では6番目の多さであり、産業は基幹産業である農業を中心に、水産加工業や製紙業なども盛んです。市内の外国人に目を向けると、外国籍をもつ住民の人口は2023年12月末時点で413人(*2)であり、総人口に対する割合は1・5%にあたります。

高知県は全国の中なかでは外国人が少ない県であり、土佐市も数値的には外国人の数が極

端に多いとは言えません。ただし、実際に生活をしていると、外国人らしき人たちが自転車や集団をなして走る姿や、スーパーで買い物をしている姿を頻繁に見かけます。そして、注目すべき点は、土佐市がいまの状態に至ったのはおよそこの10年のあいだであるということです。その経緯を見るために、コロナ禍前後の2020年の数値と、10年遡って2010年の数値を比較してみると、総人口が減少している一方で、外国籍住民の人口は104から408と約4倍に増加しています(*3)。2020年直後はコロナ禍の入国制限の影響で一時減少しましたが、2023年からは再び増加に転じています。

この急激な増加の背景にあるのが、期間限定で滞在するアジア諸国からの外国人労働者の流入です。現在土佐市には、「技能実習」と「特定技能」という在留資格のもとで、ベトナム、インドネシア、カンボジア、ネパール、ミャンマーといった国々から来た20〜30歳前後の若者が、働き、暮らしています。外国籍住民413人のうち、技能実習は162人、特定技能は98人、計260人となり外国籍住民全体の62%を占めます。かれらは、日本と比べて平均賃金が低い国から、ほとんどの場合「出稼ぎ」として来日し、人手不足が顕著な産業を中心に起用されています。土佐市では農業、水産加工業、介護、電子部品製造、惣

制度について

そもそも「技能実習」、「特定技能」とはどんな在留資格なのでしょう。制度の変遷を追うと、その仕組みと意図が見えてきます。1960年後半ごろから海外の現地法人などの社員教育として行われていた「研修制度」を原型に、1993年に「技能実習制度」が制度化されました。この制度の目的・趣旨は「我が国で培われた技能、技術又は知識（以下「技能等」という。）の開発途上地域等への移転を図り、当該開発途上地域等の経済発展を担う『人づくり』に寄与するという、国際協力の推進」(*4)とあります。この制度をもとに来日する外国人は「就労」ではなく、国際貢献のための「実習」としてそれぞれの業務に従事するよう定められています。

技能実習のプロセスは図2にあるように、「送り出し国」と「日本国」の二つの国のあい

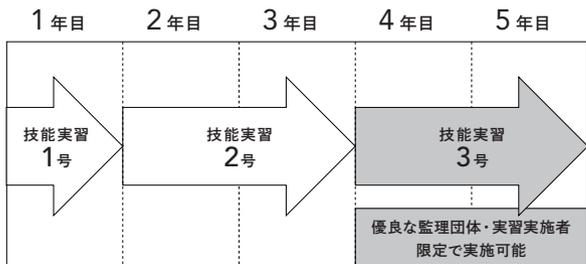
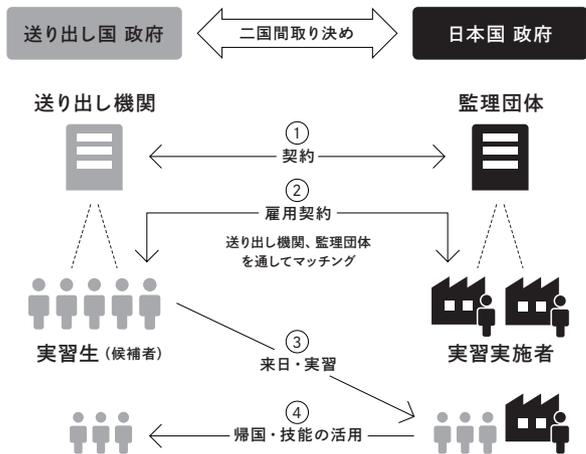


図2

業製造などの分野において、外国人技能実習生、特定技能外国人の起用が見られます。

だで締結した協定のもと、送り出し国内の「送り出し機関」と日本国内の「監理団体」による技能実習生候補者と実習実施者（雇い主）のマッチングから始まります。送り出し機関と監理団体の引き合わせにより、候補者と実施者の面談（かつては、送り出し国まで監理団体と実習実施者が渡航して技能実習生候補者の面談を行っていました）が、最近ではオンライン面談も増えてきているそうです）が実施され、条件に合意し、採用が決まると技能実習生として来日します。来日して最初の1ヶ月、実習生たちは監理団体のもとで1ヶ月間の研修を受け、日本語の学習や、日本における生活のルールなどを学びます。その後、技能実習生たちは監理団体を離れ、実習実施者のもとへ派遣されます。技能実習生たちは、その職場で通常3〜5年の定められた期間、「実習」という名目で働きます。なお、そのあいだの転職、転籍（同じ業種内での職場の変更）は、継続的な実習をとおして技能を獲得するという名目上、認められていません。

ここまで繰り返して技能実習生たちの働く名目が「実習」であると強調してきましたが、現実における当事者たちの意識はその名目とは乖離しています。実際には、来日する技能実習生も、受け入れる実習実施者も、就労であるか実習であるかは関係なく、一方では自国より賃金の高い国／職場で働いて稼ぐため、他方では人手不足を補う労働力確保のために技能実習制度を活用しているケースがほとんどです。このように国際貢献という建前と出稼ぎ／労働力確保という現実の乖離が発生し、技能実習制度の形骸化が指摘されるなか、2018年に新たな在留資格「特定技能」が定められることになりました。

「実習」が名目の技能実習と違い、特定技能ははじめから「就労」を目的とされました。「国内人材を確保することが困難な状況にある産業分野において、一定の専門性・技能を有する外国人を受け入れることを目的とする制度」（*5）という枠組みのなかで、労働力としての外国人の受け入れが2019年より始まりました。通常、特定技能の資格を得るには、従事する各特定産業分野の試験と日本語試験に合格する必要がありますが、技能実習2号を良好に修了した技能実習生は、同じ業種の仕事を継続する場合には試験が免除されます。そのため、3年間の技能実習（1号と2号で計3年の実習期間）を終えた人が、そのまま日本で働き続けるために特定技能に移行するというケースが多くみられます。また、いくつかの要件を満たす必要はありますが、特定技能では原則として転籍は認められており、分野別の技能試験に合格すれば他業種への転職も可能とされています。

当初、特定技能の受け入れ数は想定よりも伸び悩んでいましたが、現在では増加傾向にあり、土佐市でも私たちが活動を開始した2022年5月から2023年12月の約1年半の短いあいだでも、35人から98人へと3倍近く増えており、そのあいだに186人から162人へ減少した技能実習生の推移ともあわせて見ると、技能実習から特定技能への移行が進んでいることがわかります。

しかし、特定技能制定後も技能実習制度は外国人たちにとっては「出稼ぎ」として、人手不足の業界では「労働力の確保」として起用され続けました。試験の合格が条件にあるわけでもなく、日本語レベルがゼロからでも始められる技能実習は、外国人たちにとって格段にハードルが低く、多くの人がこの制度をキャリアのスタートとして選択します。また一方で、受け入れる実習実施者にとっては、実習の名目上定められた転籍不可という条件のもと、確実に数年間の労働力を確保できる制度として起用されているのも事実です。しかし、これらの条件の裏返しとして、言語の壁が原因でトラブルが発生したり、転籍できない技能実習生が「失踪」という選択をとったり、実習実施者と技能実習生のあいだの力関係の圧倒的な不均衡さが賃金未払いやハラスメントの温床になったりと、課題も多く指摘されてきました。また、近年では正規のルートを通さずに職場を紹介して法外な金額を受け取るブローカーの存在も問題となっています。

そして、課題の顕著化や世論の影響を受けたかたちで国が新たな方針を示します。2023年11月、「技能実習制度及び特定技能制度の在り方に関する有識者会議」が技能実習制度の廃止と新制度の創設を求める最終報告書案を公表しました。その後、「育成就労」という新制度が公表され、従来の技能移転による国際協力ではなく、3年で一定の専門性や技能をもつ水準にまで育成して特定技能へとつなげる制度として見直され、「実習」という文言が外れ、「就労」という文言が採用されました。新制度において就労を目的とした受け入れが前提となったとき、制度の内容について一番の論点になったのが転籍の可否についてです。労働者の当然の権利として転籍を自由に認めるべき、という意見と、賃金の高い産業や都市部への流出を懸念して一定の制限を課すべき、という意見がぶつかり、最終的には一つの職場で1年を超えて働き、一定の技能や日本語能力を条件として転籍を認めるかたちで2024年3月に政府により閣議決定した法案が国会に提出されています。

このような制度の変動を背景に、土佐市における人の流れも刻一刻と変化しています。先述した特定技能外国人の割合の増加に加え、国別ではもともと2番目に多かったインドネシア人が高い割合で増加しています。また、今年度から新たに東ティモールからの技能実習生の受け入れも始まっています。一方で、人数においては変わらず最多のベトナム人ですが、現場からはベトナムの生活水準が上がったことも影響し、出稼ぎ先として日本を選ばない人が少なくなっている、という声も聞こえてきています。

既に多くの産業において外国人に頼らざるを得ない状況にある土佐市は、この変動のなかで、今後どのようにかれらを受け入れていくことができるでしょうか。そもそもいつまで「受け入れる」という受身な姿勢でいられるかわかりませんが、もし、受け入れることができるとしたときには、どのような体制を整えておく必要があるのでしょうか。まずは、「働く場所」として、そして「生活する場所」として、その二つの軸で選んでもらうためにできることを考えることから土佐市の多文化共生事業は始まります。

- * 1 “月別推計人口（令和5年10月から令和6年6月まで）”. 高知県. 2024-06-20. <https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/t-suikei/>, (参照 2024-7-18).
- * 2 “土佐市住民基本台帳（2023年12月末）”. 土佐市. (参照 2024-03-15).
- * 3 “高知県市町村別外国人住民数推移【5年間】”. 高知県. https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/2020030600245/file_contents/84.pdf, (参照 2024-7-18).
- “高知県市町村別外国人住民数推移【5年間】”. 高知県. 2024-02-07. https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/2024020100227/file_contents/file_2024225985_1.pdf, (参照 2024-7-18).
- * 4 JITCO. “外国人技能実習制度とは”. (公財)国際人材協力機構. <https://www.jitco.or.jp/>, (参照 2024-03-15).
- * 5 JITCO. “在留資格「特定技能」とは”. (公財)国際人材協力機構. <https://www.jitco.or.jp/>, (参照 2024-03-15).

市の事業として

昨年度、「わくせいプロジェクト」は地域おこし協力隊である私たちふたりのプロジェクトであり、活動における費用一切を協力隊の活動費から支出していました。もともと、土佐市としては技能実習生や特定技能外国人の増加を受けて「多文化共生事業」が必要だとは考えていてもノウハウがなく進められない、という背景から「地域おこし協力隊」として私たちがいまいるポストを用意した、という経緯があります。また、私たちのほうでも、何ができるかもわからず手探りな状態での活動になったため、市とは連携できずに単独で動いた初年度となりました。

しかし、協力隊の任期は3年。その先のことを考えると、「協力隊の活動の一環として」ではなく「市として」多文化共生事業に取り組む体制を整える必要があります。そこで、今年度は市のいち事業として予算を取り、実施する方針で市と連携しながら進めていきました。

今年度、私たちが市と共同で実施した「多文化共生のまちづくり促進事業」は、土佐市として初めての本格的な多文化共生事業です。本事業は、以下の4つの企画を軸としています。

- ① 技能実習生・特定技能外国人への「生活と防災」聞き取り調査
- ② 多言語版ハザードマップの配布
- ③ 関係各所に調査の進捗を報告する「共有会」
- ④ 調査結果の公開と今後の方針を議論する「シンポジウム」

以上の4つの企画について順を追って解説します。

① 技能実習生・特定技能外国人への「生活と防災」聞き取り調査

市として多文化共生事業を始めようと動き出した当初、土佐市で暮らす技能実習生や特定技能外国人たちが何を望んでいるのかを想像しようとしても、どうにもうまく想像することができませんでした。それもそのはずで、実際にかれらが、どこに住んでいるのか、どんな仕事をしているのか、休みの日は何をしているのか、どんな要望や悩みがあるのか、私たちは何一つ把握できていなかったのです。通常、来日して監理団体で1ヶ月の研修を始めるときと、実習実施者のところに派遣され働き始めるときに、技能実習生たちは市役所の市民課にて住民登録を行います。個人情報や居住地はそこで住民基本台帳に登録されることとなりますが、それらの情報を市が本来の目的以外のために（今回は多文化共生事業の目的のために）閲覧することは原則的には認められておりません。また、閲覧できたとしてもそこには就労先の情報はありません。要するに、市では国別、在留資格別での居住人数は把握しても、実際に技能実習生や特定技能外国人たちの状況について情報を得る機会が発生しない仕組みになっています。国の制度ではあるものの、地方自治体はその制

度の經由地にはならず、ほとんどが民間のあいだで展開されていることがここから見えてきます。

そこで、まず市の多文化共生事業の第一歩として「聞き取り調査」を実施し、かれらの「生活実態」と「防災意識」について「知る」ことから始めようとなりました。そこで把握できたことをもとに今後の事業を展開させようという狙いです。

対象とするのは、外国籍をもつ住民全体ではなく、技能実習生、特定技能外国人に絞ることにしました。その理由に、技能実習生、特定技能外国人たちと地域社会との関係の希薄さがあります。永住者や、日本人の配偶者、留学生など、地域と関わるコミュニティに属していることが想定できる（あくまでも想定だけではありますが）人たちとは異なり、実習生たちは、仕事の多忙さも相まって、職場と同じ出身国の人たちが集まる寮をただ往復するだけの生活をしている傾向があり、地域社会との関わりがほとんどない状態にあります。増加傾向にあるかれらと地域との関係がこのままの状態で続くとすると、トラブルの発生や、災害などの有事の際に対応が難しくなるなど、さまざまな懸念が生じます。また、文化交流の面では、異国の文化や価値観をもつ人たちが隣人となったいま、それぞれ

Thành phố Tosa | Bản khảo sát thực trạng "Đời sống và Phòng chống thiên tai" dành cho Thực tập sinh kỹ năng và Kỹ năng đặc định người nước ngoài.

Bản khảo sát này nhằm mục đích tìm hiểu "Đời sống và Phòng chống thiên tai" của dân cư người nước ngoài làm việc tại thành phố Tosa theo định Thực tập sinh kỹ năng và Kỹ năng đặc định. Câu trả lời được dùng cho công cuộc phòng chống thiên tai và công cuộc chung sống địa văn hóa mà thành phố sẽ thực hiện sau này. Mong được sự hợp tác để người sinh sống tại Tosa được an toàn và đảm bảo. Hãy trả lời bằng cách viết tiếng Việt, hoặc đánh dấu ✓ vào ô tương ứng.

*Mọi phần câu trả lời được công bố dưới dạng báo cáo khảo sát, nhưng sẽ không công khai tên cá nhân, tên công ty hay tên nghiệp đoàn/tổ chức.

* Thông tin cá nhân được quản lý chặt và không tiết lộ cho bên thứ ba.

* Mọi liên hệ: Ủy ban thành phố Tosa - Đội hỗ trợ phát triển khu vực: Abe (Email: kyoryoku.tosa.info@gmail.com)

Nơi thực tập _____ Cơ quan quản lý / Nghiệp đoàn _____

Q1 Họ và tên của bạn _____		Tên bảng chữ Katakana _____	
Q2 Bạn tới thành phố Tosa khi nào? Năm _____ Tháng _____ Ngày _____		Q3 Bạn là người nước nào? Tên nước _____ Tỉnh _____	
Q4 Hiện tại bạn đang có tư cách cư trú visa gì? _____ Tư cách khác _____ () Thực tập sinh kỹ năng (năm thứ) () Thực tập sinh kỹ năng (đang học sau nhập cảnh) () Kỹ năng đặc định (năm thứ)			
Q5 Hiện tại bạn đang sống ở đâu? → (Nhà) Bạn làm ở đâu? → (Chỗ làm)			
Nha (Chỗ làm)	Nha (Chỗ làm)	Nha (Chỗ làm)	Nha (Chỗ làm)
Azai	Usachousa	Takaokachoko	Nagano
Ietashi	Usachofukushima	Takaokachotei	Nii
Izuma	Usachoryu	Takaokachotei	Nishikamoji
Ichinono	Kanbara	Takanosu	Hage
Iwado	Kitaji	Toramaru	Hasuike
Usachiohshiri	Shakuzeji	Tsukaji	Higashikamoji
Usachiohama	Takaokachootsu	Nakajima	Fukuda
			Ngôi thành phố Tosa
Q6 Mức độ tiếng Nhật của bạn như thế nào.			
Hiragana	() Không thể	() Một chút	() Có thể
Katakana	() Không thể	() Một chút	() Có thể
Hội thoại	() Không thể	() Một chút	() Có thể

Q7 Công việc của bạn? _____ () Nông nghiệp () Chế biến thức ăn () Chế biến gia công thủy sản () Ngư nghiệp () Nhà nghỉ, khách sạn () Ăn uống () Xây dựng hạ tầng () Liên quan máy móc kim loại (Linh kiện điện tử, v.v.) () Lâm giấy () Y tế, điều dưỡng () Công việc khác _____	
Q8 Giờ làm việc của bạn _____ : _____ đến : _____	Q9 Ngày nghỉ của bạn là thứ mấy? Tháng được nghỉ mấy buổi? () Thứ 2 () Thứ 3 () Thứ 4 () Thứ 5 () Thứ 6 () Thứ 7 () Chủ nhật () Không có định
Q10 Bạn đi làm bằng phương tiện gì? Mỗi bao nhiêu phút? _____ Một chiều mỗi: _____ phút () Đi bộ () Xe đạp () Xe buýt () Công ty đưa đón Phương tiện khác _____	
Q11 Tại cùng chỗ làm việc, ngoài bạn ra có thực tập sinh kỹ năng và kỹ năng đặc định không? () Không có () Có _____ người	
Q12 Bạn dự định làm gì sau khi hoàn thành thực tập kỹ năng/kỹ năng đặc định? _____	

翻訳後のアンケートシート一部 (ベトナム語) 図 4

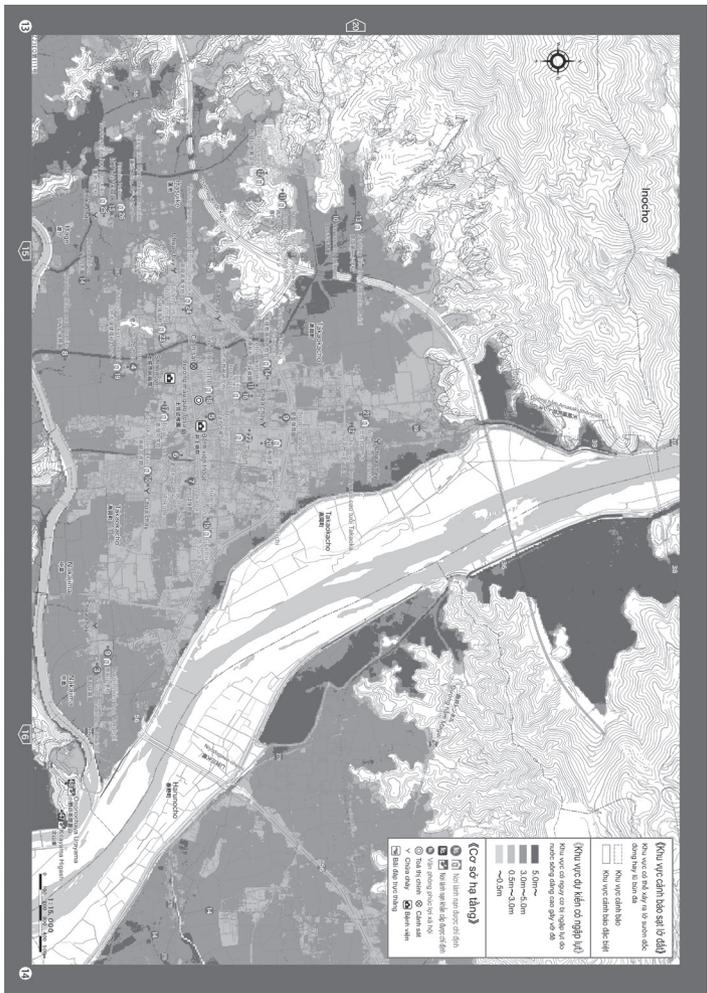
質問は、「基本情報」「仕事」「生活」「防災」と4つの章で構成されています。

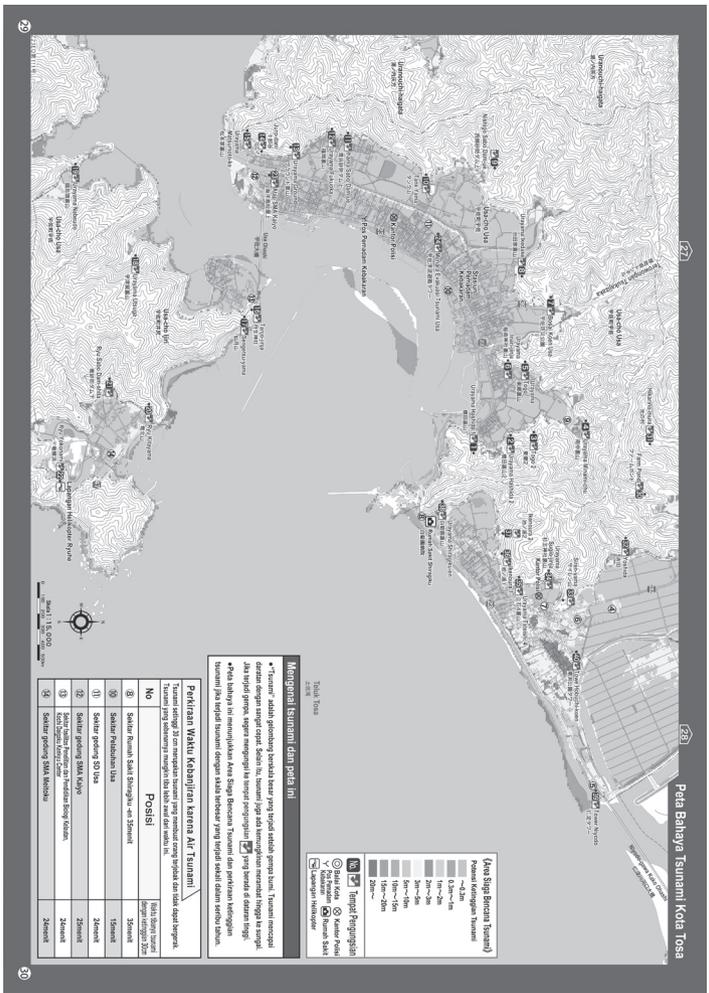
「基本情報」では、実習先(職場)、属している監理団体、出身地、来日した日、在留資格や、居住エリア、日本語レベルなどを聞いています。「仕事」では、業種、勤務時間や休日などのルーティーンを聞き、自由筆記にて技能実習/特定技能の終了後の予定について質問しています。「生活」では、買い物や、食事、休日の過ごし方など、オフの様子を聞いています。また、それぞれのコミュニティ内でのコミュニケーションや、地域の日本人との関係性などを聞き、個人と地域とのつながりを探りました。「防災」では、高知で発生が予想されている大地震の存在と、頻発する台風についての認識を確認し、それに対応するための防災意識について聞いています。そして最後に、困りごとや市への要望を自由筆記で答える欄を用意しました。

以上のように、かなり基本的な質問内容で構成されたアンケートシートとなりましたが、まずは、このレベルの情報を取得してかれらの生活について知ることを試みました。

② 多言語版ハザードマップの配布

調査方法を対面での聞き取りとしたことにより、調査自体を防災意識についての啓発の機会としていやすことができました。具体的には、洪水、土砂災害、津波の危険性を示す市内のハザードマップを、アンケートシートと同様に、ベトナム語、インドネシア語、やさしい日本語に翻訳し、それぞれの職場、居住エリアに該当するマップを配布しました(図5・6)。日本語版のように印刷・製本をするほどまとまった量が必要ではないため、調査に行く度にプリンターにて翻訳したハザードマップの一部をA3サイズで出力し、それを実習生たちの目の前で広げ、職場と寮に加えて、それらから一番近い緊急避難場所や避難所に印をつけて、とりあえずその場所だけでも把握してもらうよう努めました。また、防災食であるアルファ米を、非常食の体験として各自一袋ずつ配布し、防災グッズの存在の啓発も行いました。





インドネシア語版土佐市ハザードマップ一部 図6

③ 関係各所と調査内容を共有し、課題を議論する「共有会」

2022年度、市内の監理団体や実習実施者、市民のボランティア団体などに話を伺った際に、それぞれの立場で、実習生たちの受け入れにおいて試行錯誤されていることを伺いました。ただ現状では各々が単独で対応していたため、それぞれの立場でもっている意見や情報を交換し、それぞれの施策が連動するきっかけを生むような場ができれば、より広範囲で効果的な動きになるのではと考えました。

そこで、今回の調査について共有する場を設け、その場が関係各所のネットワークを築く機会になることを目指して「共有会」を設定しました。そこに集まったのは、市内外の監理団体、実習実施者、県内の国際交流協会などの関係団体、とさし日本語サロン、県庁の関連部署、そして市からは国際交流を担当する産業振興課（私たちの所属課）、防災対策課、市民課の職員です。開催したタイミングは、調査開始時に1回と、中間報告に1回の計2回。初回は、概要を説明しながら調査における協力を要請し、現時点で抱えている課題を共有。2回目は調査の途中経過を共有し、その上で今後の展開を皆で議論しました。

土佐市 公開シンポジウム

“ここ”からみえる“世界”

地方から生まれる新たな多文化共生とは？

全国的な傾向と同様に外国人住民の増加が続く土佐市では、今年度、多文化共生事業の一環として技能実習生・特定技能外国人への生活実態調査を実施しています。市としての新しい試みである本事業を実施するなかで見えてきたことを、専門家や現場で活動されている方々との対話をとおして、市内外の人たちと共有するシンポジウムを開催します。この場が地方だからこそできる多文化共生への新しい可能性を発見する機会となればと考えています。ぜひご参加ください。

日時 2024年3月3日(日) 13:15~16:00(開場12:45)
入場 無料
申し込み メール kyoryoku.tosa.info@gmail.com
電話 088-852-7679 (平日9~17時)
オンラインフォーム

会場 土佐市複合文化施設 つな一で フルホール 〒781-1102 高知県土佐市美郷町23451-1

第1部 土佐市のトライアルと、これから

技能実習生・特定技能外国人への生活実態調査報告/レクチャー

第2部 “地方”だからこそその多文化共生

レクチャー/パネルディスカッション/Q&A

詳細は、「わくせいPROJECT」のnoteにて随時発信します



阿部 一郎

高知市立国際交流協会事務局長を経て、(特選)多文化共生センター理事長、東京外国語大学多言語多文化教育研究センター研究員、全国各地の国際交流協会のアドバイザー等を歴任して現在に至る。大学で教鞭をとる傍ら、パンコクのスラムで暮らす子どもたちへの教育支援活動や国内の子育て支援のNPO活動に参加している。



岩佐和幸

高知大学人文社会科学部教授。専門は農業、食料経済論、アジア経済論、地域経済論。主な著作に「マレーシアにおける農業政策とアグリビジネス—輸出市場開拓の先と第一歩—」(華夏/法律文化社 2009年)、「アグリビジネスと現代社会」(共編著、実業家 2022年)がある。今年度の交流会による技能実習生への調査の調査員としてアドバイザーを務める。



キエル イエヘスキエル
ハイル ウマム

キエル(妻) 2019年に日本語留学先として来日し、現在は高知ファインディングワックスにてスポーツ傘とおしと国際交流事業に従事/ウマム(夫) 2020年に来日し、現在は高知市香野町にあるトット農園に勤務/ともに高知のインドネシア人コミュニティの一員として地域社会との共生を模索している。



阿部美香・阿部航太

2022年4月に土佐市に移住し、海外からの技能実習生と地域住民との交流/アグリビジネスに専攻したいという力強い活動を開始。土佐市において、実習生を食育する様々な人たちが集えるスペースの立ち上げを目指す「わくせいPROJECT」を推進し、市内外におけるリサーチや、ワークショップの開催、執筆や講演など活動を広げている。



国際お弁当フェア

12:00~13:00
数量限定! 無くなり次第終了
つな一で1フロアにて販売

ベトナム弁当

フォンバインミー

バイナム、生春巻きなどを予定

インドネシア弁当

ハラールハウス

ナシゴレン、カレーなどを予定

主催:土佐市 企画:土佐市地域おこし協力隊 阿部美香・阿部航太 お問い合わせ:土佐市産業振興課 088-852-7679

*本イベントは一般財団法人自治体国際化協会(クリア)のアドバイザー派遣事業を活用して実施しています

以上の4つの企画をもとに「多文化共生のまちづくり促進事業」は土佐市としての初めての多文化共生事業として展開されました。次の章からは、実際の調査での経験、共有会での議論の内容、調査結果とその考察、そしてシンポジウムでのパネルディスカッションの様子をレポートしていきます。

情報を届けることで、今後の多文化共生を担うプレイヤーを増やすことを試みました。

「令和5年度土佐市技能実習生・特定技能外国人への生活と防災」聞き取り調査」は4月6月の準備期間を経て（6月の補正予算のなかで承認）、7月に動き出しました。先述したように、市内の技能実習生・特定技能外国人の半数である「125人」を目標数と定め、それを2023年の年末までに達成するように計画を立てました。6ヶ月間で125人とすると、1週間で4、5人というハイペースで調査を進める必要があります。

出会うことの難しさ

この時点で、私たちが個人的に関わりがあって調査をお願いできそうな実習生たちは、10人未満。市内の二つの監理団体と、普段から市役所と付き合いのある実習実施者（雇い主。以下、実施者）からの協力を加えたとしても、50人程度が最初の見込みでした。はじめは、監理団体経由で実施者にアプローチをはかる計画でしたが、実際には、土佐市にある監理団体が市内の実施者へ実習生を派遣するケースは想定よりも少数で、多くは市外、県外へ派遣していることがわかりました。そうすると、土佐市にいる実習生たちの多くは、市外の監理団体を經由して来ていることになり、監理団体経由で実習生たちを紹介してもらうのにも限界があることがわかりました。結局、「あの人が外国人を雇っているって聞いたことがある」「あの辺りで見かけたことがある」という「噂」を頼りに、実施者に個別にあたっていくことで調査先のアポイントをとっていきました。

ここで、アンケート調査実施までの手順について触れておきます。

◎ 実施者に電話にて調査の趣旨を説明し、アポイントをとる

← ◎ 実施者のところに説明に伺い、協力の承諾を得る

← ◎ 実習生の予定に合わせて調査実施の日時を調整

← ◎ 対面での調査を実施

調査という特別な要請ということもありますが、実習生たちに直接会えるまでにはここまでのステップが必要でした。また、急な調査依頼に警戒されることもあり、自分たちが市役所に所属していることなどか信用してもらえている、という感触もありました。それでも、説明を受けて快く協力を了承してくれる実施者は多く、最終的に29の事業者、3つの監理団体が調査へ協力してくれました。

しかし、実施者に承諾をいただいてもすぐに調査を実施できるわけではありません。多

くの実習生たちは、農業、食品工場、機械工場など、労働時間が直接的に生産数につながる仕事に従事しています。そのため、事務系の仕事のなかで「打ち合わせ」を依頼するよ
うな感覚でアポイントを取ることは通用しません。実習生たちに時間をとってもらうこと
は、実施者にとってかなりシビアな要請となります。そのため、お昼休みや業務終了直前、
直後に30分ほど時間をとっていただき調査を実施するケースがほとんどでした。加えて、
農業の場合は対応可能な「季節」も限られています。収穫時期などの農繁期と時間がとり
やすいであろう農閑期を作物ごとに考慮しながら、アポイントを行いました。また、あると
きには農家さんから「雨が降っていて休みにしたから、今日だったらいいよ」と連絡をい
ただき、休日に実習生の寮やアパートに行つて実施することもありました。休みの日に時
間をとってもらうことを申し訳なく思いつつ、快く対応してくれた実習生たちに感謝して
聞き取りを実施しました。

日本語サロンで出会ったり、以前から付き合いのある実習生たちには直接連絡をとって
承諾を得た上で聞き取りを行いました。ほとんどの場合は、上記のように実施者に許可
をもらいつつも本人には当日いきなり説明する、という実習生たちにとっては唐突な手順

となつてしまいました。それでも、そこでなるべく丁寧に調査の趣旨を説明し、アンケートを記入する際にも一問ずつ実際に質問して聞き取りをしながら、答えを記入してもらうように努めました。母語で記入できるようにしていたため、こちらからのアシスタントは必要ないかと思いきや、所属している監理団体の名前や住んでいるエリア名など、日本語の固有名詞が出てくる部分は難しかったようで、同じ職場で働く実習生同士で互いの用紙を覗き合いながら記入する様子も頻繁に見られました。また、ほとんどの場合、実習生たちは選択式解答の質問にはスムーズに答えますが、自由解答の質問に対しては、考え込んでしまつてなかなか記入できない傾向がありました。特に「困りごと」や「市への要望」について、質問の意図をうまくつかめない人も多く（市に何を頼んだけいいの？という反応でした）、誘導しないように気をつけつつ、例をあげながら記入してもらうこともありましたが、都合によりどうしても対面で実施できない人には、郵送で回答をもらうこともありましたが、その場合は自由筆記の部分が空欄で提出されることがほとんどで、書面だけで調査を行うことの難しさを感じました。

出会ってみえてきたこと

実際に実習生たちと会い、言葉を交わすと、さまざまなことを発見します。日本語のこゝと、仕事に対する希望、買ひ物の仕方など、こちらが予想していなかった答えが返ってきます。実習生たちの質問への回答については次の章以降で見えていくことにして、ここでは実習生たちとのやりとりのなかで私たちが感じたことをいくつかあげてみます。

上記で「さまざまなことを発見する」と書きましたが、その発見の多くは自分たちが実習生に対して抱いていた先入観とのズレからくるものでした。正直に書くと、私たちのイメージのなかにあった実習生は「20代前半で独身。平均賃金の低い国出身であり、その生まれ故郷は『田舎』である。日本には出稼ぎとして来ており、余計な出費は避け、ほとんどを貯金と故郷の家族への送金にあてている」というものでした。しかし、実習生たちと話すといかにこれがステレオタイプのイメージであり、実際の実習生たちはこの像とは『それぞれに』異なっていることがわかりました。

まず、かれらは確かに20代前半の世代が中心ではありますが、そのなかには既に結婚し

ており、故郷に自身の家族（パートナーや子どもなど）を置いて来日している人たちが決して珍しくない数いることがわかりました。小さな幼子を故郷に残してひとり出稼ぎに帰るのはなかなか寂しいのではと思うのですが、かれらはスマートフォンで家族と毎日連絡をとりコミュニケーションを密にとっているようです。また、パートナーや親戚が同時期に来日し、技能実習・特定技能として働いているケースもあります。そのパートナーや親戚は、大抵は異なる地域に住んでおり、正月などの長期休みのタイミングを利用して、旅行がてら会いに行っているようです。

お金の使い方についてもイメージとは異なるところがありました。先述のように切り詰めた生活をしていると半ば決めつけていたため、ある実習生の住む部屋に大きなマッキントッシュのディスプレイが置かれていたことに驚いたことがありました。調査をするなかでは、アクセサリーや洋服を頻繁に購入するという話も聞きましたし、高知市へつながるバイパス沿いにある大型の古着店や、インターネット上のフリーマーケットサイトを利用して、生活必需品というよりも「ファッションを楽しむ」ために洋服を購入していることもわかりました。農業に従事するとあるベトナムからの実習生は、アンケート記入時（業

務終了直後）には作業着を身に付けていましたが、記入が終わって帰る頃にはストリート系のワークパンツ、オーバーサイズの白いジャケット、ファー素材のハットという、言うなれば「都会的」な様相に様変わりしており、背景のビニールハウスが並ぶ風景とのコントラストが印象的でした。ただ実際には、実習生たちのなかにはこの土佐市よりも「都会」のまちから来ている人たちも少なくなく、とあるインドネシアからの実習生に彼の故郷の写真を見せてもらうと、そこは店や建物が隙間なく並び、多くの人が行き交うまちで、経済活動の面からみればそこは土佐市よりも圧倒的に都会でした。出稼ぎというと「田舎から都会へ」という印象がありますが、国を跨いだ場合は、それが逆転することもあり得ることに気づきます。比較的余裕がみえる実習生たちの生活の背景には、出身国の経済力が高まったことや、制度が普及して幅広い層の人たちが来日していることなどがありますが、冷静に考えれば、かれらは技能実習生であるまに、それぞれに20代前半の若者たちであり、その世代が興味のあることに対してお金を使うことにはなんら不思議なことはありません。それなのに、それを「意外」と考えるほど、私たちの先入観には異様なバイアスがかかっています。

また、この調査では、以前には情報が少なくイメージすらできていなかった人たちとの関わりも生まれました。昨年からの活動のなかで、市内で人口の多いベトナム、インドネシア出身者たちとのやりとりはありましたが、今回の調査では、市内に住む上記2カ国以外のラオス、カンボジア、ネパールなどといった国からの出身者と初めて出会うことになりました。もちろん個人によって異なることは前提としつつも、カンボジア、ラオスの人たちは日本語の扱いに慣れていない人が比較的多くいるように感じました。なおかつアンケートは、カンボジアの公用語であるクメール語にも、ラオスの公用語のラオ語にも翻訳できていません。そのため調査時は質問の内容を伝えるのにも、その答えを確認するのにもかなり苦労しました。実施者たちは、かれらを受け入れるためにさまざまな工夫をされているようでしたが、かれらの日本語の習熟レベルからしても、職場以外での日本人とのつながりはほぼ無いことが予想できました。また、休日の過ごし方の話題のなかで、バスの乗り方がわからず高知市まで出るのに複数人で乗合してタクシーを使う、というエピソードも聞きました。人数が少ないためにコミュニティとしての広がり小さく、地域社会における情報が入手しづらい状況にあるのではないかと考えています。

Chap. 1-4

共有会

「調査と並行して、「共有会」を2回開催しました(p.37)。この会は監理団体、実習実施者、国際交流協会などの関係機関、県庁や市役所の担当課といった技能実習制度や多文化共生事業に関わる人たちのあいだで、今回の調査の趣旨と経過を共有すること、そして意見交換・情報共有をとおして互いのネットワークを構築することを目的としました。ここでは、各回での議論を振り返り、関係者たちの視点から実習生たちとの共生を考えていきます。

第1回調査報告共有会一抱えている課題の共有

開催日—2023年7月24日(月)

第1回共有会は、調査の開始とほぼ同時期に開催されました。調査における協力の要請とともに、調査のアドバイザーである高知大学人文社会科学部教授である岩佐和幸さんに「多文化共生のためのネットワークづくりに向けて」と題したレクチャーをお願いしました。内容の一部をここに列挙します。

◎外国人人口の増加

外国人人口が全国的に増加している。特に技能実習生や特定技能外国人といった外国人労働者は10年間で2・7倍(68万人→182万人)と大幅に増えており(*1)、高知県も2022年には雇用事業所数が対前年増加率11%と全国でトップ3(*2)に入っている

◎技能実習生・特定技能外国人の出身国

日本全体でベトナムが25%(*3)を占めているが、経済成長が進むなかで日本での技能実習希望者が減少しているため、代替としてインドネシア、ミャンマー、ネパール、カンボジア、東ティモールなどからも実習生の受け入れが進んでいる

◎技能実習制度の課題①「失踪」

実習生の失踪が多発している。背景にはさまざまな理由があるが、一つは実習生の55%(*4)が来日する際に送り出し機関等への支払いのために借金をしている。そのため、来日後に想定通りに稼げないと悟った際に、転籍(職)を認められていない実習生たちは失踪という選択をとるケースがある(失踪後には、同郷のブローカーなどを頼りインフォーマルな不正や、暴言・暴行などの人権侵害行為も発生しており、厳しい日常から逃げ出すかたちで失踪するケースもある)

◎技能実習制度の課題②「孤立化」

2020年に自宅で双子を死産し、遺棄したとして罪に問われた元技能実習生のベトナム女性は、「妊娠・出産がばれたらすぐに帰国になると思った。頭が真っ白になった」(*5)と話している。何かあったときに相談できる人・団体や、保護制度・体制などがあれば、実習生とともにトラブルを乗り越えることができたかもしれない

岩佐さんのレクチャーを受けて、後半はグループディスカッションを行いました。参加者は実習実施者、監理団体、国際交流関係団体、教育機関、行政など、異なる立場の方々です。日頃から感じている課題や、実施できる取り組みについて話し合いました。

Q1 実習生たちとの共生について、いま感じている課題は？

- ・ 外国人住民に対して地域の日本人が不安を感じている（治安の悪化など）
- ・ なぜ外国人が働きに来ているのかを地域住民が理解していない
- ・ 実習生と接点がなく、どうアクセスしたらいいかわからない

- ・ 実習生も地域住民も、互いにつながることにメリットを見いだせていない
- ・ 言語の壁がある。伝えたいことがあっても本人と直接話すことが難しい
- ・ 実習生の日本語学習の意欲が低下している
- ・ 行政はマップなどを多言語化し、それに対応済みとしてしまっているが、それらを伝えるところまでたどり着けていない

Q2 出あった課題に対し、連携して実施できる取り組み

- ・ 外国人を地域の一員として受け入れ、居場所づくり、コミュニケーションの場づくりを進める
- ・ 地域の人たちとお酒を酌み交わす場をつくる
- ・ 地域の行事（祭りやイベント）や活動（スポーツや趣味）に参加してもらう
- ・ 行政と民間の中間の場／組織をつくる。各機関がつながって運営
- ・ 避難訓練を交流の場として捉え、実習生に参加してもらう。

係をつくることで、イレギュラーな事態（救急、震災、ブローカーによる勧誘）が起った際に支え合える存在となる

- ・日本語サロンやイベント情報をチラシにして、監理団体から受け入れ事業者に配布してもらう

- ・土佐市の公式LINEなどのSNSをとおして、多言語化した情報を実習生に発信する。監理団体が行政からの情報をとりまとめて実習生に伝えることもできる

グループディスカッションでは、それぞれの立場から活発に意見交換が行われていました。自身が抱えている課題の背景について異なる分野に関わる人の話から解決のヒントが見えることがあったり、連携しながら取り組む企画のアイデアも出ていました。ネットワークを築く“きっかけ”をつくれたという手応えを感じた初回の共有会ですが、出てきたアイデアの実現や具体的な動きにつなげることが次のステップになります。

第2回調査報告共有会—調査の経過報告と今後の展開

開催日—2023年12月15日(金)

第2回共有会の開催時、調査実施状況としては目標数の8割ほどに達しており、その結果からおおまかな傾向をつかめる段階にありました。共有会ではその調査報告を経て実習生たちの生活実態を共有し、グループディスカッションをとおして多文化共生にむけて実施するアクションについて話し合いました。最終的には、出てきたアイデアを「短期・中期・長期プラン」に落としこみました。

「短期プラン 1〜2年」

◎地域の活動

- ・土佐市の大綱まつりや宇佐大鍋まつり（*6）に参加し、アジア料理（実習生の出身国を中心に）の店を出店する（事業者と地域とボランティアが連携）
- ・実習生たちの地域のスポーツ活動への参加

◎情報発信

- ・実習実施者のなかで、実習生の日常生活をサポートする立場の生活指導員と連携し、地域の情報を実習生たちに届ける
- ・SIMカードの提供補助を行う（多くの実習生が電話番号をもたず、Wi-Fiのみを利用している。実習実施者が自ら進んで実習生の人数等を申請してもらうことで、行政で継続的に状況を把握できるメリットがある）

◎防災

- ・1ヶ月間の入国後講習の期間中に、監理団体にて市役所職員による地震に関する授業を実施する
- ・実習生が地域の避難訓練に参加する／実習生の集まりに、防災訓練を加える

◎日本語学習

- ・近隣の大学の学生に、日本語サロンのボランティアへの参加を呼びかける

- ・県が開催している日本語ボランティアのためのスキルアップ研修など、日本語を教えるための研修を継続的に開催する

「中期プラン3～5年」

◎地域の活動

- ・実習生が所属するスポーツチームを設立して、大会に出場し、チームとして継続して活動する

◎情報発信

- ・土佐市の公式LINEを多言語化

◎居住

- ・空き家やアパートなど、実習生の住居に対する改修補助を出す。県や市に申請書を出す機会を活用して、事業者は行政と定期的に情報を共有する

- ・実習生をホームステイの形式で迎え入れ、地域コミュニティとつなげる
- ・実習生の居住用に空き家を活用した共同住宅、市営住宅をつくる

◎日本語学習

- ・日本語サロンをオンラインでも開催する。遠方の実習生たちにも日本語学習の機会を届けることができる

◎公共交通

- ・バスの本数、ルートを増やす（現状はルート、本数ともに足りないと感じている実習生が多い）
- ・土佐市を巡るバスツアーの実施

「長期プラン5年」

- ・土佐市が外国から来る人々に選ばれるまちになる

以上、現実的なものもあれば、実現までに高いハードルがあるものもありますが、まずは目の前にある課題に対して、現状あるリソースをうまく組み合わせて取り組んでいくことが重要となります。後日談になりますが、ディスカッションであった「1ヶ月間の入国後講習の期間中に、監理団体にて市役所職員による地震に関する授業を実施する」というアイデアは、共有会の約2ヶ月後に市内の監理団体と市の防災対策課とで実行に移され、講習中の実習生たちに向け、映像を交えた防災意識の啓発や、災害に備えるために準備すべきアイテムの解説などを含めた授業が行われました。このような連携のケースを少しでも増やしながら、今回の共有会をきっかけに生まれたネットワークを育てていくことが、市の多文化共生へ向けた層の厚く、なおかつ負担の少ない継続的な動きにつながると考えています。

Chap.

2

シン ポ ジ ウ ム

*1 “「外国人雇用状況」の届出状況まとめ”. 厚生労働省. 2022-10-31. <https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044543.pdf>, (参照 2024-05-29).

*2 “「外国人雇用状況」の届出状況【概要版】”. 厚生労働省. 2022-10-31. <https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044540.pdf>, (参照 2024-05-30).

*3 “「外国人雇用状況」の届出状況まとめ”. 厚生労働省. 2022-10-31. <https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044543.pdf>, (参照 2024-05-29).

*4 “技能実習生の支払い費用に関する実態調査について（結果の概要）”. 出入国在留管理庁. 2022-07-26. <https://www.moj.go.jp/isa/content/001377366.pdf>, (参照 2024-05-29).

*5 “核心 元技能実習生に逆転無罪 「妊娠ばれたら帰国」 孤立 支援団体「実習制度に本質的問題」”. 中日新聞. 2023-03-25, 朝刊.

*6 大綱まつり：全長80m、重さ約1t、胴回り最大で1.8mもある土佐和紙の大綱を、南北に分かれて引き合う豪快なまつり。市内に井筋（農業用水路）を建設する際、人夫たちの志気を高めるために行われたのが始まり。／宇佐大鍋まつり：宇佐地域でとれた魚を使ったつみれ汁を、四国最大級の直径2mの大鍋で豪快に炊きあげるまつり。

2024年3月3日(日)に、土佐市複合文化施設つなりのブルーホールにて開催した公開シンポジウム「ここから見える『世界』―地方から生まれる新たな多文化共生とは?」は、ここまで取り上げてきた「技能実習生・特定技能外国人への『生活と防災』聞き取り調査」の報告と、それに対する専門家ふたりによるレクチャー、県内で多文化共生の現場で活動する人たちとのパネルディスカッションをおして、多文化共生へ向けた市の今後の方向性を市民と共有するために開催されました(p.38)。

レクチャーは、昨年度の「わくせいプロジェクト」のレポートでも登場いただいたふたりに依頼をしました。ひとりには、高知大学人文社会科学部教授の岩佐和幸さん。専門は農業・食料経済論、アジア経済論、地域経済論で、ゼミの研究として高知県内の外国人労働

者の調査なども実施されています。本調査では、企画段階よりアドバイザーを務めていただきました。レクチャーでは、調査結果の分析とそれをもとにした土佐市における今後の展開について講義いただきました。もうひとりには、(一財)自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザーの阿部一郎さん。阿部さんは全国のさまざまな自治体と多文化共生事業に取り組むなかで「プラットホーム」という新しい考え方を提唱されており、レクチャーではその枠組みを用いた地方での多文化共生の可能性について講義いただきました。

まずは、岩佐さんによる分析とともに「技能実習生・特定技能外国人への『生活と防災』聞き取り調査」の結果を確認し、それらが意味するところを考察していきます。

レクチャー① 岩佐和幸さん

「土佐市のトライアルと、これから―生活実態調査の分析を踏まえて―」

岩佐さんは、技能実習生・特定技能外国人に焦点をあてたこと、そして対面での聞き取

〔土佐市での滞在期間〕

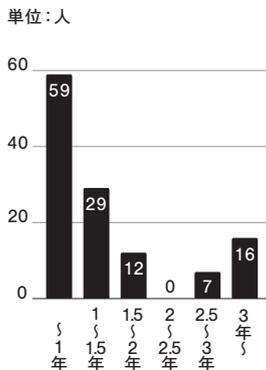


図 10

〔在留資格〕

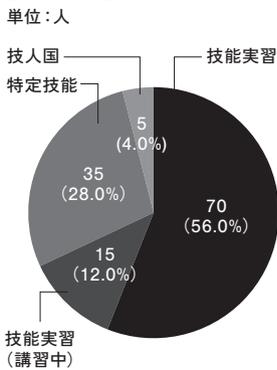


図 9

基本情報

◎ 在留資格（図9）— 技能実習から特定技能へ移行傾向があるが（P.22）、未だ技能実習が半数を超えている。

◎ 在留期間（図10）— 来日して1ヶ月間の入国後「講習中」の人たちを考慮しても、圧倒的に1年未満が多く、市外へ／からの移動が頻繁に発生していることがわかる。

◎ 出身国（図11・12）— 技能実習と特定技能の在留資格を有する市内人口としては、ベトナム142人、インドネシア67人、

〔技能実習生・特定技能外国人への「生活と防災」聞き取り調査〕

対象者— 技能実習または特定技能の在留資格で土佐市内に居住する人

調査期間— 2023年7月～2024年1月

調査実施— 125人

りを実施したことを本調査の特徴としてあげ、「非常に画期的な調査であり、これまで実態をよく掴めてなかった市内の外国人居住者の生活実態にアプローチし、関係者の印象で止まっていたところから、現状を客観的、構造的に把握することができると評しました。また、「土佐市の位置付けは、高知県の多文化共生社会の縮図でもあり、この取り組みは県内における今後の試金石となる」とし、本調査が市内の現状把握にとどまらない意味合いをもつことを指摘しました。

以下にて、岩佐さんによる解説とともに調査結果を一つずつ取り上げていきます。

◎生活圏(図14、17)―職場、居住地とも高岡町、宇佐町などの中心市街地に集中している。通勤はほとんどが自転車、徒歩で、通勤時間は10分以内が過半数を占めており、職場と居住地の近さが見えてくる。そのあいだの往復を生活圏ととらえると、関わりのある地域の範囲は極端に小さいことがわかる。

◎日本語(図13)―ひらがなについては、7割が「よくできる」「できる」と回答し、会話については半数弱が「すこしできる」と控えめな回答をしている。会話は仕事や生活に影響が出る部分であり、コミュニケーションに不安があると、その部分でトラブルが発生するおそれもある。

カンボジア26人と続くが(*1)、本調査実施者の割合ではベトナムとインドネシアだけで9割を占めている。本調査、ひいては市のネットワークでは人口の少ない国出身者へアプローチできていない。

[出身国：土佐市在住 技能実習生／特定技能外国人]

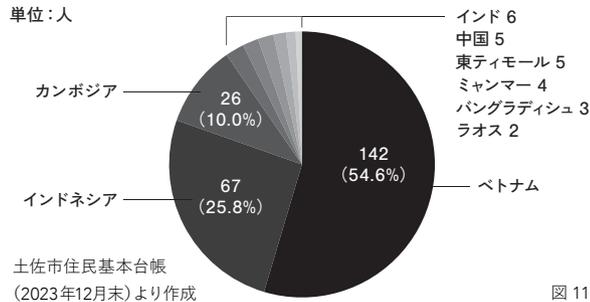


図11

[出身国：調査実施者]

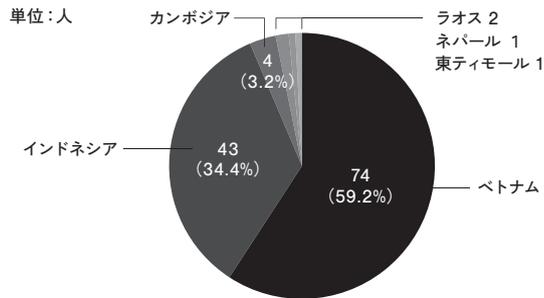


図12

[日本語レベル]

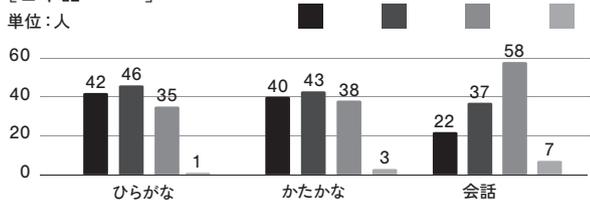


図13

【職場】 単位：人 ※複数箇所の回答者がいたため、実数に回答数を足して計算

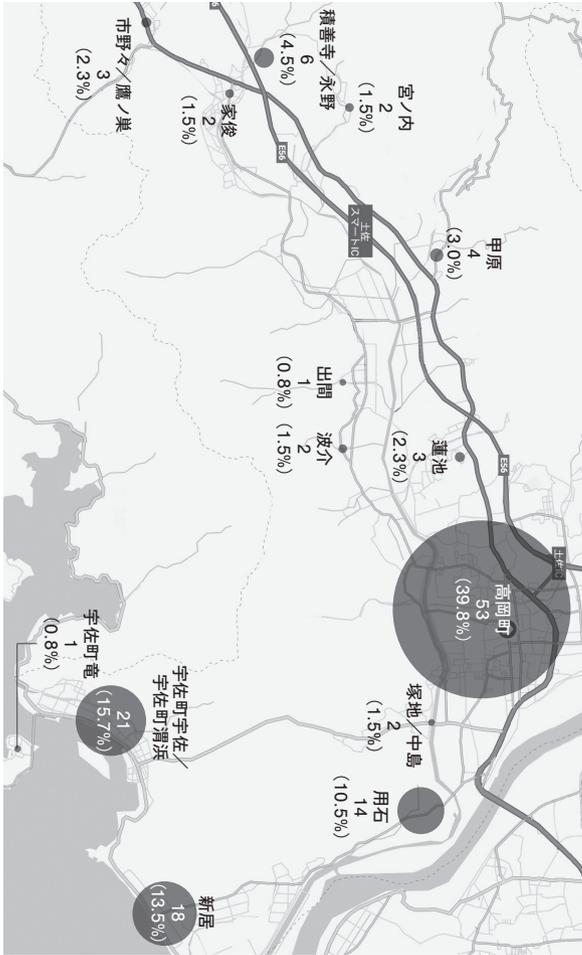


図 15

【居住地】 単位：人

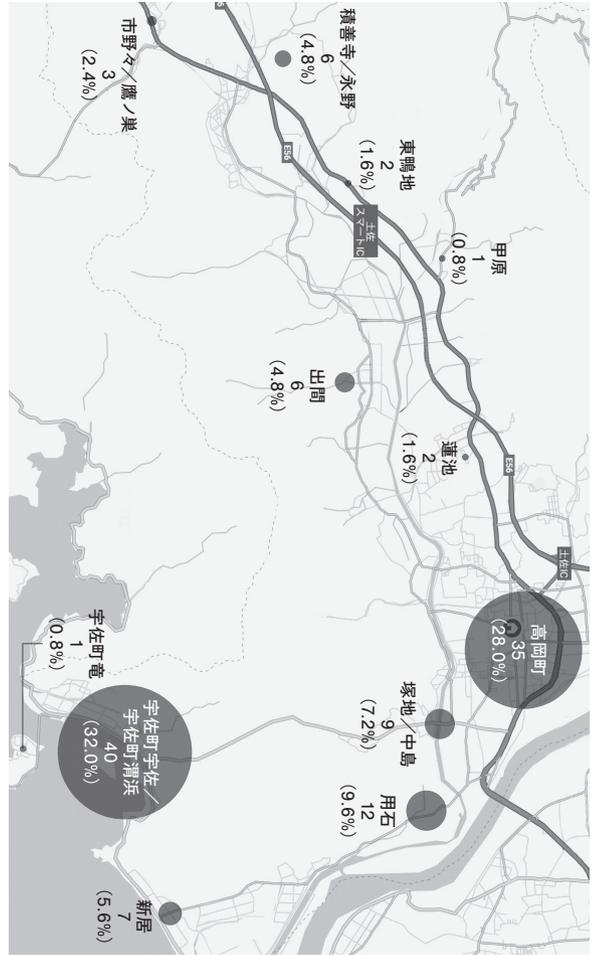


図 14

[業種]

単位：人

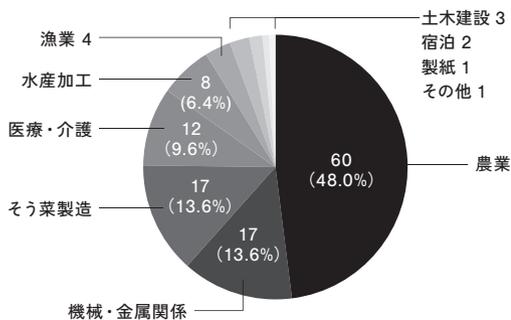


図 18

仕事

◎業種(図18)一農業が半数を占め、機械金属、スーパーのそう菜製造、医療・介護、鯉節などの水産加工と並び、少なくはあるが漁業、土木建築の従事者もいる。令和2年国勢調査による「土佐市における産業別就業者数」(*2)と本調査の結果を照らし合わせると、市全体で317人が農業・林業分野で働いており、今回の調査でカウントされた同分野で働く実習生たちの60人という数から、単純に比率をとると農業従事者の2割弱が外国人ということがわかる。

[通勤手段]

単位：人(複数回答あり)

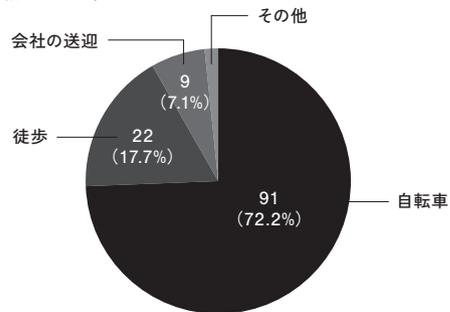


図 16

[通勤時間]

単位：人

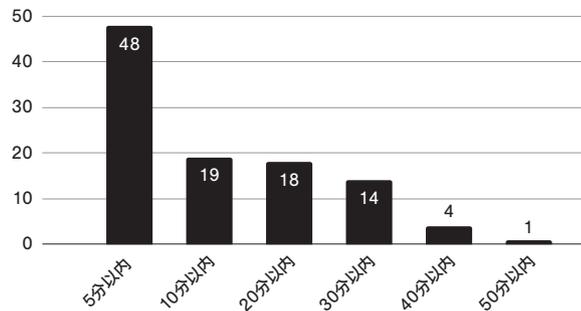


図 17

[勤務時間]

単位：人

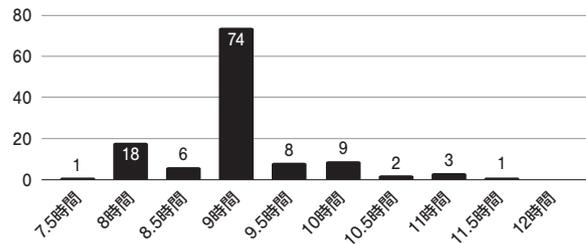


図 19

[勤務時間帯]

単位：人

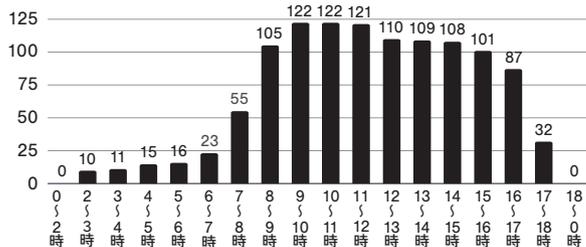


図 20

[休みの日]

単位：件（複数回答あり）

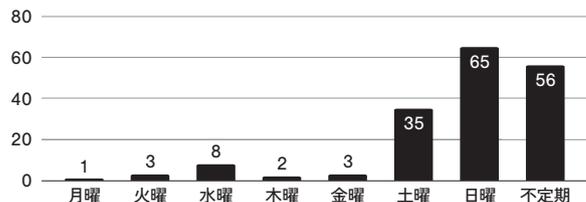


図 21

◎勤務時間（図19・20）— 8時間、または9時間というのが主な労働時間のよう。9時間以上働いているとの答えもあるので、残業が頻繁に発生している人もいる（お金を稼ぐためにできる限り残業をした実習生と、基準の労働時間を超えないように残業を抑えざるを得ない実習実施者の都合がマッチしないこともあるという）。朝から夕方までを勤務時間としている人が多いが、スーパーのそう菜製造や介護の夜勤など、早朝や深夜に働いている人たちも一定数いる。

◎休日（図21）— 土日休みが多いが、不定期という人も相当数いて、業種ごとの労働や生活リズムの違いが反映されている。例えば、工場勤務の人は休みが定期的である一方、農業は季節や天候に左右されて不定期となりやすい。また、介護はシフト制で休みが決定するため不定期となる。

◎職場の実習生や特定技能の人数（図22）— 1〜3人、または6人〜10人の二つに分かれる。小さな規模の農家では1〜3人のケースが多く、工場やスーパー、病院などは大人数の

[職場にいる技能実習生・特定技能外国人の人数]

単位：人

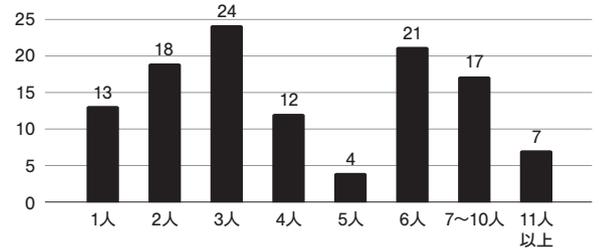


図 22

ところが多い。

◎技能実習・特定技能期間終了後のプラン
(自由回答)

出身国に帰る 49件

・出身国で起業する(インドネシア
人からの回答多数)

・出身国で、日本語を扱う仕事として
旅行ガイドや通訳をする

・日本での仕事の経験を活かして、
日本企業の現地法人で働く

・結婚する、家建てる、進学する

日本にとどまる 24件

・技能実習から特定技能に移行して、

同じ職場で働く

・特定技能に移行して、違う職場/地域へ移る

出身国へ帰り起業すると答えた人が明記していた業種は、生活必需品店、飲食店、会社、
牧畜、農業、食品加工工場など。多くの人が、日本での生活を期間限定の出稼ぎとして捉
えている。特定技能への移行を考える人も多いが、職種や地域などを具体的に決めてい
る人は少なかった。

生活

◎買い物(図23・24) 一内陸部の中心市街地にあるスーパーに利用が集中している一方で、
コンビニエンスストアの利用も多い。また7割が買い物にインターネットを利用してお
り、調味料や食材、服などを購入している。

[休みの日にやること]

単位：件（複数回答あり）

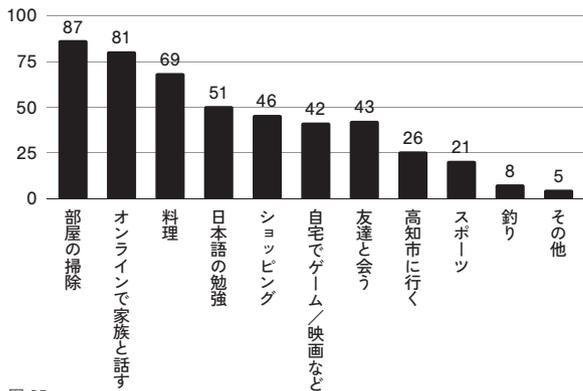
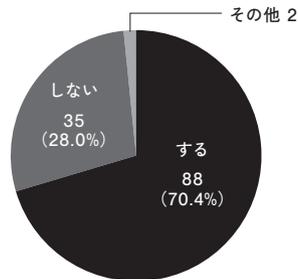


図 25

[インターネットを使用した買い物]

単位：人



[買い物する場所]

単位：件（複数回答あり）

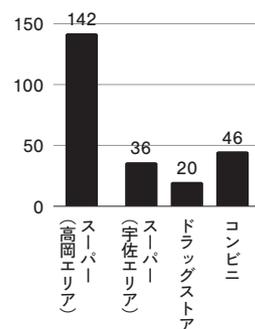


図 24

図 23

◎日本人との交友関係(図27・28)一過半数は日本人の友達は0人と回答。いたとしてもほとんどが少ない人数で、5人以上いるのは少数派。そのなかで、「交流イベントがあれば参加しますか?」という質問に「参加したい」と答えた人は6割にのぼる。この二つのデータから、これから取り組むべき糸口が見えてくる。他方で、1割弱は交流イベントに「参加したくない」という回答があったことも注

◎日本人との交友関係(図27・28)一過半数は日本人の友達は0人と回答。いたとしてもほとんどが少ない人数で、5人以上いるのは少数派。そのなかで、「交流イベントがあれば参加しますか?」という質問に「参加したい」と答えた人は6割にのぼる。この二つのデータから、これから取り組むべき糸口が見えてくる。他方で、1割弱は交流イベントに「参加したくない」という回答があったことも注

◎日本人との交友関係(図27・28)一過半数は日本人の友達は0人と回答。いたとしてもほとんどが少ない人数で、5人以上いるのは少数派。そのなかで、「交流イベントがあれば参加しますか?」という質問に「参加したい」と答えた人は6割にのぼる。この二つのデータから、これから取り組むべき糸口が見えてくる。他方で、1割弱は交流イベントに「参加したくない」という回答があったことも注

◎日本人との交友関係(図27・28)一過半数は日本人の友達は0人と回答。いたとしてもほとんどが少ない人数で、5人以上いるのは少数派。そのなかで、「交流イベントがあれば参加しますか?」という質問に「参加したい」と答えた人は6割にのぼる。この二つのデータから、これから取り組むべき糸口が見えてくる。他方で、1割弱は交流イベントに「参加したくない」という回答があったことも注

◎休みの日にやること(図25)一「部屋の掃除」「オンラインで家族と話す」「料理」などインドアの過ごし方が目立つ。休みが週に1回程度の人が多いことを考慮すると、休息をとることを優先する傾向や、交通の不便さから外出を控えるなどが背景にあると想定できる。他方で、「日本語の勉強」という回答も相当数あり、休みの日に自身のスキルを高めている人もいることがわかる。

◎連絡手段(図26)一SNSが多く、日本人が多用するLINEや電話はあまり使われていない。インドネシア人は

[土佐市でやってみたいこと]

単位：件（複数回答あり）

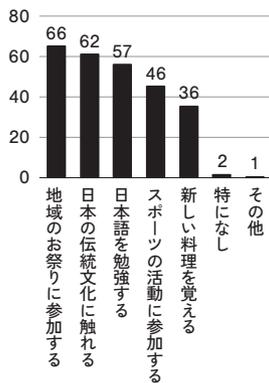


図 29

[日本人や他の外国人との交流イベントへの参加]

単位：人

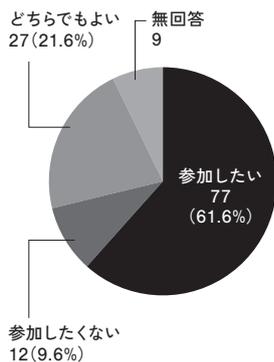


図 28

[友達との連絡手段]

単位：件（複数回答あり）

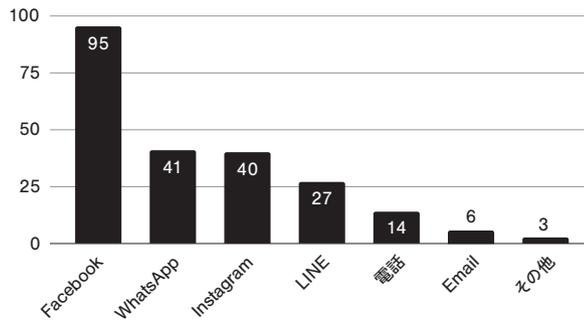


図 26

◎土佐市でやってみたいこと（図29）—「お祭り」「日本の伝統文化」「スポーツ」など、文化やレジャーがニーズとして高くなっている。一方で、「日本語の勉強」と答えた人も多い。単に出稼ぎに来ているだけでなく、日本のこと、あるいは土佐市のことをもっと知りたいというニーズがあることがわかる。

目する必要がある。仕事で忙しい、人と交流することが面倒、自分達のコミュニティで充足しているなどといった理由が想定される。

[日本人の友達の数]

単位：人

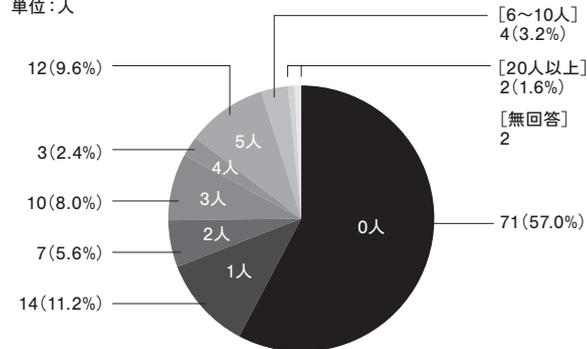


図 27

[職場の近くの避難場所
について知っているか]

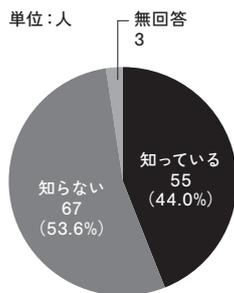


図 33

[家の近くの避難場所
について知っているか]

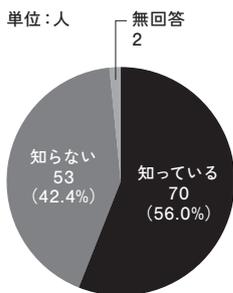


図 32

[高知県に台風が来ることを
知っているか]

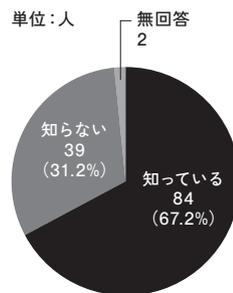


図 31

[高知県で大きな地震
が予測されていること
知っているか]

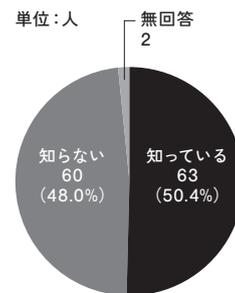


図 30

[避難へ向けた準備を
普段からしているか]

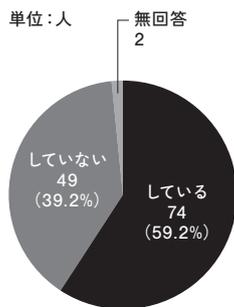


図 35

[土佐市での避難訓練
の経験があるか]

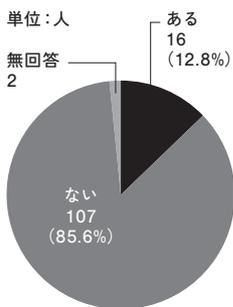


図 34

◎防災意識（図30～35）一地震や台風を認識しているかを聞く質問では、地震よりも台風が存在を知っている人が多かった。大きな地震が想定されていることを知らない人が半数近くいるというところ気になる。避難場所については、家の近くにある避難場所は半数が把握しており、職場の近くは4割が把握している。南海トラフ地震発生の可能性を考慮すると、防災に対する意識は低いと言わざるを得ない。避難訓練については、大半が経験が無い。避難準備をしている人は6割弱

防災

いるが、基本は自力での準備が中心となっており、十分な準備ができていないか不確かである。防災対策は目下の大きな課題となる。実習生たちを含めた組織的、公的な防災対策に取り組むべき。

◎困っていること／市への要望（自由解答欄）
公共交通網の改善

- ・高知市までのバス賃が高額
- ・バスの便が少ない。特に海側のまちへの本数は極端に少なく、夜間も早い時間で最終便となってしまう

食べ物

- ・買い物を選択肢が少ない
- ・イスラム教徒のためのハラール料理店、食材店がほしい

仕事

- ・給料を上げてほしい

[なにかあったときの連絡先]

単位：件（複数回答あり）

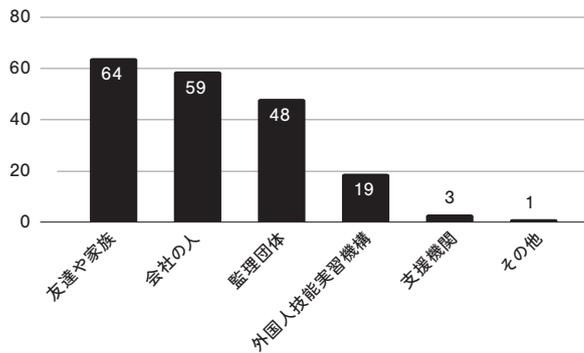


図 36

- ・生活コスト、税金が高い
- 日本語の学習機会
- ・日本語を向上させたい（特にインドネシア人が学習への意欲が高い）
 - ・標準語だけでなく、現場で使用される土佐弁を学びたい

情報発信

- ・多言語での防災情報の発信を希望
- ・行政サービスについて多言語での情報発信を希望

◎相談先（図 36） — 「友達や家族」「会社の人」「監理団体」の3ヶ所が主要な相談先となっている。

今後の課題

以上の調査結果を踏まえ、岩佐さんは多文化共生へむけた次のステップを「新しいネットワークの構築」とし、「行政」「企業・事業者」「支援組織」と3つの立場における課題を整理しました。

まず「行政の課題」では、本調査をもとにした実態把握を政策展開へとつなぐことが求められると指摘します。調査の結果から見えてきた課題には、公共交通や防災対策など、必ずしも外国人に特化したトピックではなく幅広い人たちに関わるものが多くあります。岩佐さんはそこから「外国人支援を起点に、誰もが暮らしやすい地域をつくる」というプロセスを提示します。

また、「企業・事業者の課題」としては、個人それぞれの「働き方、休みの過ごし方、防災意識」などを把握しながら、労働や生活の環境を改善していく重要性を説きました。「実習生」や「外国人」というカテゴリーを用いてその人たちを捉えるのではなく、各々のニーズや特性を理解することで、そのニーズに関わる地域の人やコミュニティと連携すること

もできます。

ボランティア組織や国際交流団体といった「支援組織の課題」については、日本語学習における支援と日本人との交流機会の創出をあげています。今後、制度の変更に応じて家族帯同が増えた場合、労働者以外の配偶者や子どもといった人たちとの関わりも重要になります。その人たちには、より一層言語や関係づくりの支援が必要になると岩佐さんは話します。

岩佐さんは、最後に改めて、既に高知県では多国籍化が進行中であり、土佐市は県内でも急速に進んでいる地域の一つであること、そして実際に産業の現場では外国人に依存する度合いが高くなってきていることを確認し、「ここで考える必要があるのは、果たして、働く外国人も、受け入れる人たちも、支える行政やボランティアの人たちも、当事者それぞれが本当に豊かになっているのだろうか？ ということ。各自が『当事者』であると認識し、現状の課題を自分ごととして捉え、他者への想像力をもつことで、それぞれが本当に豊かになる道が開ける」と、各自がこれからの向かうべき方向を示してレクチャーを締めました。

* 1 “土佐市住民基本台帳（2023年12月末）”. 土佐市. (参照 2024-03-15).

* 2 総務省統計局「令和2年国勢調査」

全国さまざまな地で多文化共生事業をリードしてきた阿部さんからは、防災への取り組みを起点とした多文化共生に向けた体制づくりについての事例に加え、昨今の地域コミュニティの変化に対応する「地域共生社会」と「プラットフォーム」という考え方について講義いただきました。

レクチャー② 阿部一郎さん

「技能実習・特定技能の外国人市民とともに創る地域コミュニティ」

能登半島地震から学ぶこと

2024年元旦に発生した能登半島地震について触れ、被災した技能実習生の状況の共有からレクチャーが始まりました。阿部さんは、石川を拠点に活動する「NPO法人多文化協働ネットワーク」に2010年の立ち上げ当初から関わっており、今回の震災では実際に被災者をサポートする活動に参加されているとのこと。阿部さんは、「被災したインドネシア人実習生から、当法人のインドネシア人理事へ、SNSをとおして『食べるものがない』というSOSが届いた」と現場の様子を話します。発災直後は、監理団体も、実習生たちが働いている職場も全く機能していなかったため、同NPOがハラルフードを含めた食料品を被災地に持ち込んだとのことでした。阿部さんは、この経験から災害対策として事前に行っておくべき二つのポイントを示します。

①災害時の相談窓口に関する情報は、災害発生前に知らせておく必要がある

石川県は、相談窓口である「石川県災害多言語支援センター」を地震発生の翌日1月2

日に立ち上げたが、支援センターの存在やその機能を十分に外国人住民に周知できていなかったのではないか。災害が起こってから「ここに相談してください」と情報を発信しても、混乱のなかで情報を受け取ることは難しい。

②母語支援の重要性

被災した実習生が、日頃から信頼関係ができていて、同じ国の出身者にSOSを送ったということからも、外国人被災者の支援に関しては、当事者それぞれが自身の母語で情報交換ができるような体制を支援側が整備しておく必要がある。発災当初の混乱した状況では、日本語が苦手な人、わからない人に向けた「やさしい日本語」も機能しないことがある。

今年度、土佐市で実施した調査からも、地震や台風を認識している実習生たちは、人数としては多くても、避難に向けた準備や訓練の経験が十分ではないことがわかってきます。また、能登地震の際には、インドネシア実習生たちが避難所に入れなかったという報道もあり（*1）、非日常の状況下で、実習生たちの孤立を避けるためにも、上記2点の取り組みは重要となります。

地域共生社会のためのプラットフォーム

続いて阿部さんは「いまの日本は『多文化社会』である」とし、そのなかで、さまざまなルーツをもつ人たちが、お互いの存在を認め合い、対等な関係を築き、文化的影響を受けながら生きていく社会を「多文化共生社会」と呼ぶことを説明します。そして、「多文化共生社会」を目指すには、以下の3つの社会状態に当てはまっているかを確認する必要があります。

①「分離・排斥」相手の文化の影響を受けず、相手の文化が存在することも認めない。相手の文化を不当なものとして扱い、排除しようとする状態。差別、ヘイトスピーチといっ

た行為として現われる。

②「同化」相手の文化の影響は受けるが、相手の文化が存在することを認めない。一部の文化的な特性（例料理／輸入商品など）を消費しつつも、文化や習慣そのものを理解しようとせず、相手に自身の文化に沿って生活することを強要する状態。

③「棲み分け」相手の文化の影響は受けないが、相手の文化が存在することは認める。相手の文化や存在を否定はしないものの、直接的に関わることを避ける状態。平和的な解決に見えて、二つの文化のあいだには溝が存在する。

現状の技能実習生たちと地域の状況は③に当てはまるといえます。労働力として職場や地域に貢献していることは認めても、かれらの「食」や「文化」を地域が受け入れていると言える状態にまでは至っていません。また、阿部さんは「共生というのは、社会の状態を指すというよりは、むしろその課題解決に向けてのプロセスの上に成り立っている」と

説明します。そこでは互いに許容する余裕や、協働するための工夫が必要になります。

阿部さんは、「多文化共生」を含んだより大きな枠組みとして、「地域共生社会」という考え方にも触れ、その社会には「多文化」があり、「多世代」もあり、「職業の違い」や「健常者・障がい者」といったさまざまな違いを内包しているとし、その多様さをもつ社会では、それぞれの「つなぎ役」が重要になると続けます。「かつて町内会や商店街組合、農協などが、こういった多様な人たちが暮らす地域の「つなぎ役」を担っていたが、構成する人たちの高齢化などからうまく機能しなくなってきた。そこで、新しい可能性をもつのが『プラットフォーム』である」と新たな考え方を提示します。「プラットフォーム」とは「複数の機能をもつ場」を意味し、例えば本プロジェクトでつくろうとしている「わくせい」もプラットフォームです。詳細は後述しますが（p.245）、「わくせい」には「東南アジアマーケット」「デザイン 학교」「コミュニティスペース」という3つの要素が入っており、必ずしも外国人技能実習生をサポートするだけの場ではありません。さまざまな属性、興味、目的をもつ人たちが集まり、そのあいだで連携することにより、実習生たちを含むさまざまな人たちが共生する場をつくる仕組みをつくろうと考えています。

阿部さんによると、地域共生社会のためのプラットフォームをつくるうえで、重要な素が3つあるといえます。

① 市域を超えたネットワークの構築

人口減少が進むなかで、地域が抱えている課題は共通していることも多いため、土佐市だけで完結するのではなく、市という枠を超えたネットワークを構築していくことが大切。その意味では、県がそのネットワークづくりに取り組んでいくことは重要なポイント。

② 情報やノウハウの共有

プラットフォームには、地域の情報や蓄積されたノウハウ、知識が集まってくるので、それらを共有して有効に使うことのできる仕組みをつくる。

③ 中間支援機能のリノベーション

かつては町内会や世話好きな個人が、人と人をつないで地域コミュニティを成り立たせ

ていたが、いまはそのつなぎ手がない状況。そうしかつての「中間支援機能」に代わり、地域には「コーディネーター」や「ソーシャルワーカー」という職種の人たちが必要になる。

阿部さんは最後に、地域共生社会に向けたプラットフォームを実現するためのキーワードとして、「越境」と「協働」をあげました。「越境」は、一人ひとりがもつ可能性を超えて新たな自分にチャレンジすること。そして「協働」は、それぞれができないことを補い合うことに加え、一緒に活動することで相乗効果が生まれることとであると説き、岩佐さんと同様に個人レベルで取り組むことの重要性を指摘してレクチャーを終えました。

* 1 “地震で被災の外国人 避難所入れず食料など確保できない人も”。
NHK. 2024-01-06. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240106/k10014311351000.html>, (参照 2024-05-30) .

公開シンポジウムの後半は、パネルディスカッションを行いました。登壇者は、シンポジウムでもレクチャーをくださった阿部一郎さんと岩佐和幸さん、そしてインドネシア出身のキエル イェヘスキエルさんとハイルウママさんの4人、そして地域おこし協力隊の阿部航太がモデレーターとして参加しました。

キエルさんは、2019年に日本語留学生として来高し、現在はプロ野球球団の高知ファイトイングドッグスにてスポーツを通じた国際交流事業に関わっています。将来はインドネシアに日本語学校をつくり、日本語だけでなく、文化や習慣も伝えて、日本とインドネシアの架け橋になりたいと話します。ウママさんは、インドネシアの大学で農業を学んだ後、2020年に来高し、現在はトマト農家で働いています。2024年度からは高知大

学の大学院に進学し、農業について学ぶ予定だそうです。キエルさん、ウママさんともに高知で暮らすインドネシア人と日本人がつながる機会として、スポーツ活動や料理教室、花見や釣りといったイベントを企画するなど、インドネシア人コミュニティの一員として地域社会との共生を模索しています。

なお、ディスカッションは、当日に来場者から集めた質問を軸に進行しました。

パネルディスカッション

「地方だからこそその多文化共生とは」

岩佐氏×阿部氏×キエル氏×ウママ氏×阿部航太(モデレーター)

阿部航太(以下、阿部こ) それではパネルディスカッションを始めます。まず一つめは、「技能実習や特定技能で働く人が、土佐市で日本語も上手になり、仕事もできるようになったときに、もっと給料がいいほかの地域へ行ってしまうのではないか？」という質問です。

実際にインドネシアから来て日本で働いてるキエルさんとウマムさんに聞いてみたいと思います。高知でスキルアップした後にはほかの地域に行くことについてどう思いますか？

キエル 私は、もし先の募金活動(*1)がなかったら東京に行ったと思います。もともと高知県が生活費は安い。あと給料も安いから、そこらへんを考えると、仕事は稼ぐお金を考えると都会がいいと思うんですけど、2年暮らして僕は都会に行きたくない。高知県で長く暮らしたいと思う。給料が低いんですけど、生活しやすい。あとは日本人も都会の人は違う。私は、幸せはお金だけではなく、人とのつながりが一番だと思う。この土佐市でも、わくせいプロジェクトとか、もつと(つながりが)良くなると外国の方はほかのところにいきたくなくなると思う、私みたいに。

阿部こ ありがとうございます。ウマムさんはトマト農家の仕事をやめて、今年から高知大学の大学院に進学されるんですね。この機会にはかの県に行くこともできたと思うのですが、どうして高知に決めたのですか？

ウマム 自分はずっと高知に住みたいです、農業が好きですから。高知は農業のことがいっぱいですから、私、ずっとこっちに住みたいです。

阿部こ すごく希望が湧くふたりの答えではあるんですけど、実際には東京とか大阪などの都会に行く人はたくさんいると思うんですね。そのへんの状況について、阿部さんにお聞きしてもいいですか。

阿部 いま、政府の有識者会議で、技能実習制度から育成就労制度という新たな制度に変える協議が進められています。そこで最後の最後まで揉めたのが、実習生の転籍についてです。つまり、転職を来日後何年で可能にするかという点でした。これは、国際世論から転籍ができない技能実習制度に対して非常に厳しい意見が寄せられたことを受けて、検討されています。ただし、賃金の低い地方や業界からの人材の流出への懸念を背景に、転職の制限を主張する声もあります。

また、日本全体でみると、やっぱり長く日本で暮らして、働いていただくことが日本の国

力にも経済にもプラスになることだと思えますし、高齢化社会を支えていただくっていう意味でも、やっぱり日本に長くいていただきたい。では日本のどこに長くいていただくかというと、それは給料だけの問題じゃないんですよ。東京に行っても、給料は高いけれど、家賃も高いし、物も高い。幸福の基準みたいなものを、やっぱりどこかで議論していく必要があるんじゃないかなと。もっと言えば、外国人労働者の方が高知県に居続けたいと思えるような職場、コミュニティをいかに作るかっていう意味では、その国の文化について、日本人の理解も含めて共生社会を目指していく必要がある。そうなれば高知でも頑張ろう、とキエルさん、ウナムさんみたいになるわけですよ。

阿部 この問題について、私たちは岩佐さんとよく話をするんですが、賃金の低さというの、実は外国人だけの問題ではないですよ。日本人においても、例えば一次産業や、地方においての賃金の低さということは問題になっていると思うんです。そのあたり、岩佐さん、ご意見をいただけますか。

岩佐 これは外国人だけの問題じゃなくて、日本社会全体の問題であると言えます。いまですね、日本は先進国のなかでも実質賃金が唯一下がっていて、それがむしろ経済成長を止めているのではないかと問題になってきている。そんななかで、あらためて産業をどうするか、経済をどうするかというところから考えていくことは、大事だと思います。高知は最低賃金が全国のなかでも最も低い数値ですが、今回の調査では、給与が最低賃金レベルの実習生から、もう少し上げてほしいという意見がありましたし、生活についても、都市のスーパーが離れていて買い物が不便というネガティブな意見もありました。その一方で、ある企業で働いている方では、引き続き同じ職場で働きたいというポジティブな意見もあって、これはおそらく、働いている技能実習生や特定技能の方に対して敬意をもって、かれらが人間らしい働き方ができる職場をつくっているということだと思えますね。そういう状況があれば、外国の方も、ただ賃金が低いからというだけでほかに行くことにはならないのではないかと思います。高知で働き続けてもらうためには、やはりその職場の環境や地域とのつながりなど、金銭面以外のことを含めて整えていくことが大事になってくるのが、調査からも見えてきたと思います。

阿部こ いまの話が次の話題にも関わってくるかと思いますが。「地域で多文化共生に取り組むことはとても大切だと思うのですが、お年寄りの方は、違う文化をもっている外国の人を受け入れたり、一緒に何かをするのは難しいのではないか」という意見がきました。キエルさん、ウマムさんはどうですか？ お年寄りの方とコミュニケーションをとるときに、難しいとか、なかなか受け入れてもらえないと感じることはありますか。

キエル 高齢者の方は、逆に若者より話しやすいですね（会場で笑いが起きる）。私も学生的时候は、交差点で知らないおじいさんと「どこに行くの？」と言って、「いまからバイトします」「頑張ってください」と（会話した）。若者は、たぶんしない、そういう話ばかりだから、高知で高齢者の方が多いという事は、一つの魅力かな。高知は土佐弁（がある）、土佐弁に慣れるにはおじいさん、おばあさんと一緒にイベントとか、土佐市でも、高齢者と一緒に料理とか（をつくる）、そういう機会をつくれれば問題ないと思います。

阿部こ 逆に、ウマムさんは同い年ぐらいの友達が多いイメージがありますがどうですか？

ウマム 若い人たちだけじゃなくて、もう若くない（人たちもたくさん）。初めて仕事するとき、ぜんぜん友達がいないですから、職場で居酒屋行くと、みんなはおじいさんとおばさん。初めての友達はおじいさんとおばさん。

阿部こ 先ほど「居酒屋」っていう言葉が出てきたと思うんですけど。インドネシアの多くの人はイスラム教徒で飲酒が禁じられていると思うので、お酒の席に誘っていいんだらうか？ と思ってる日本人もいると思うんですね。そういった場に誘うことは失礼にならないですか？

ウマム ないです。（誘っても）大丈夫。

阿部 僕は金沢にインドネシア人の友人がいるんですけど、一緒に居酒屋に行きます。アルコールを飲む飲まないは、もちろんそれぞれで、インドネシア人にも飲む人はいますけど、一番いけないのは、日本人が飲むことを前提に外国の人にアルコールを勧めること。

それは注意しなければならぬですが、居酒屋自体は問題ないと思います。

阿部こ そうしたら、とりあえず誘ってみたいですね、お酒を飲むか飲まないかはおいしいといて。

ではそのまま阿部さんに先ほどの質問にあった「受け入れる」という姿勢について聞いてみます。先のレクチャーで話されていた「棲み分け」(p.92)は、「受け入れてはいるけど影響は受けない」というポーズ、つまり境界線を引いて踏み込まない、という姿勢ですよ。そういった表面的に受け入れることは多くの人がしているとは思いますが、そこから一歩踏み込んで互いに影響を認め合うにはどのようなことが必要でしょうか。

阿部 高齢者の方と異文化理解というのはすごくフレッシュなテーマだとあらためて思うんですけど、まず高齢者の方に実習生たちのことを知っていただく必要があると思います。土佐市の経済を支えている若者たちがインドネシアなどから来ているという、その事実を知ってもらおう。そして、実際に会っていただくことが大事だと思うんですね。まずは

知るところからスタートして、そして聞き上手になるといふか、その方の人生のお話などを聞きながらコミュニケーションを図っていくということが大事かなと思います。

阿部こ それでは、岩佐さんにもお聞きしたいんですけど、個人間のつき合いをつくっていく機会や場所ってそう簡単にアクセスできるものでもないような気がするんですよ。そのなかで、いわゆる外国人に興味があって関わりたいんだけど、どうしたらいいかわかんないっていう人は、どういふところから始めればいいんでしょうか。

岩佐 同じくまずは知るといふところが大事ですよ。今回の調査でも、外国人の方の半数ぐらいが「日本人と関わりがない」と答えていましたが、それは日本人も同じだと思うんですよ。相手を知らないから、不安に思ってしまう。そういう点で見ると、まずは知るといふ機会をどうつくるかということだと思います。そういったときに「場所」は重要で、大きなイベントだけじゃなくて、小さくてもいいのでいくつか仕掛けをつくっていくことが大事だと思います。例えば、高知には高知市の日曜市をはじめとした、さまざまな「市」

が昔からありますね。土佐市でも日曜市がありますが、そういったところなどをうまく活用して、つまり既存のものを入り口として始めていくというのがいいかと思えます。一から始めるというよりも、できることから始めて、少しずつ広げていくというのがいいのではないかと思います。

阿部こ その点、ウママさんとキエルさんは、既にいろんな活動をされていますね。スポーツや料理、オンラインのゲームをやる会もあると伺いました。同じ言葉話す人同士のコミュニティで活動する楽しさもあると思うんですが、例えばそこに日本人が加わることにについてはどう考えていますか？

キエル 日本人にも来てほしい。その機会が大事。技能実習生とか、職場でコミュニケーションの違いがあったり、仕事は厳しいとか、そういう感じがあるんですけど、スポーツや料理をつくるとかは、楽しい話もできるかなと。日本の人たちにたくさん来てほしい。いまでもインスタとか友達日本人で紹介して（いるけれど）、まだまだ少ないです。

阿部こ 例えばこの会場のなかでふたりの活動に参加したいなって人がいて、キエルさんとウママさんと知り合いじゃなくても、SNSなどを見てそこに行けば参加できますか？

キエル ぜひぜひ。もっと来てほしい。交流したい。

阿部こ 予約もいらない、行けばいいだけ。ぜひ皆さんご検討ください。

次は、「少子高齢化が進むなかで、自治会などまちの集まりが成り立たなくなってきたりします。そこで、外国の方々との共生というのはその課題の解決へ向けた一つのヒントになるのではないか」という意見をいただきました。この件については、ぜひ阿部さんに聞いてみたいですね。

阿部 おっしゃるように、少子高齢化や人口減少、男女共同参画などで、地域でいろんな役割を担ってきた人たちが、どんどんいなくなってきたりしている。そういう意味で、地域コミュニティのつくり直しが必要となる時期なのかなと思います。もっと言えば、かつては縦割

りのコミュニティができていたと思うんです。例えば、自治会でしたら、まず行政があって、自治会連合会があって、その下に各自治会や自治会の役員会というものがあって、最後に自治会員にまで届く。しかしこれからは、もっと水平な関係をどのように地域でつくっていくのかという意味で、先ほど説明したプラットフォーム（P.93）がいくつもあつたらいいと思うんですね。キエルさんやウラムさんがやっていることも、「わくせい」でやるうとしていることも、ある意味プラットフォームですね。そういういろんな切り口のプラットフォームが地域にできると、そこに住む人たちがより参加しやすくなってくる。そこでの人と人との関係性は対等なので、高齢者から若者まで、フラットな感じでコミュニケーションできる。そして、それをつくるために、コーディネーターという役割の人が必要になってきます。このコーディネーターとは、異なる価値観をもつ人たち、異なる世代の人たちをつなげて、それを地域社会に活動として返していく役割です。インドネシア人コミュニティでいうとキエルさんやウラムさん、わくせいプロジェクトでいうと美香さんや航太さんがコーディネーターです。その人たちが人々をつないで、水平なネットワークが活性化し、地域の人もどんどん参加していくような流れができる。それを行政などが後押し

しをしていくことが大事だと思います。

阿部こ より間口が広い、新しい地域コミュニティのあり方ですね。ちなみに、キエルさん、ウラムさんは、いま住んでいる地域の自治会や町内会の存在を知っていますか。そのなかで行う、地域の掃除やお祭りに参加したことはありませんか。

キエル 私がいま、会社の寮に住んでいるので。その周りにはわかりませんね。

ウラム 私、帯屋町に住んでいるから、イベントかなんかで、ゴミ拾いしました。

阿部こ そのイベントについてどうやって知りましたか？誰かに教えてもらったんですか？

ウラム 中央公園でありましたね。そのスタッフは私も知り合いですから、私とインドネシアの友達で参加しました。



右から岩佐さん、阿部さん、キエルさん、ウママさん、阿部航太
撮影：有賀隆造 有賀楓花

阿部こ 私たちは2年前に土佐市に引っ越してきて、初めて町内会に参加することになりました。もちろんその仕組みは理解していたので、ある程度受け入れることができましたが、例えば技能実習生たちは町内会に入る意味もわからないだろうと思うので、先ほど話していたコーディネートや行政の支援があいだに入ること、町内会の一員としてうまく迎えられるような仕組みが今後検討されてもいいかもしれないですね。

続いては企業や会社の話をしたいと思います。「多文化共生について、企業はどうやって仲間をつくっていきけるのか？そのコツがありますか？」という質問です。阿部さん、いいですか。

阿部 僕は企業で研修会をすることもありますが、いまどきの企業は外国人の採用に非常に前向き、というか外国人を採用しなければならぬというところまで来ています。外国人を採用したときに、国によって習慣なども違ってきますので、社内でそういった多様性をどう受け入れていけばいいのか、ということと異文化コミュニケーションの研修をすることがあります。一つ目のメッセージとして、多様な文化を包摂（インクルージョン）

する企業文化をつくっていただきたいということがあります。もう一つは、特に今回は技能実習、特定技能というお話で、（会場に）監理団体もしくはかれらを雇っている企業の方もおられると思うんですが、ぜひ会社や企業を地域にひらいていただきたいですね。清掃活動や防災活動など、いろんな活動が地域にあると思うんですが、そこに実習生たちを無理やり行かせるのではなくて、スポーツとかアートとか、いろんなものを組み合わせながら地域の人たちと触れ合う機会をつくっていただきたい。それは結果として、かれらがこの土佐市に定着することにつながります。つながりが網のようになればなるほど地域やそこに住む人たちへの愛着が生まれてきます。

阿部こ 企業における「ひらく」という行為についてご説明いただきました。一方で土佐市には、家族で農業をやりながら、実習生をひとりやふたりといった少人数で雇っている小さい規模の企業がたくさんあります。そうした小規模の企業における「ひらく」ことについて、岩佐さんにぜひ聞いてみたいです。

岩佐 農家はひとりでやるというイメージもありますが、地域のなかでは、その方ひとりというわけではなくて、地元の方とか農業組織とか、いろんな人たちでつながりがあるわけです。だからこそ、困っていることなどを自分で抱え込むのではなく、共有していくことが大事だと思います。ひとりではひらくのではなくて、もう少し地域でも共有できるつながりをつくる。また、共有する相手として、実習生たちの受け入れ母体の監理団体や行政という存在があると思います。行政サービスを行う際には、どういった方がどうかたちで地域に住んでいるのかを知っておく必要があります。いまは監理団体任せになっている面もあるけれども、それとは別に集まれる場所をつくっていくことだってできると思います。

阿部 僕はやっぱり行政の役割が大きいと思うんですね。今日、市長さんに来ていただいているので、ぜひお話ししたいんですが、例えば、子育て支援に力を入れて人口が実際に増えているまちって結構あるんですね。同様に、土佐市も「外国人に優しいまち」ということで力を入れて、外国の方に、「土佐市に行けば安心して暮らせるんだ」、「労働環境が守ら

れるんだ」と知られるようになれば、そこは外国人市民だけでなく、日本人も含めて暮らしやすいまちになるわけですから、これから人口が増えていくまちになるんじゃないかと思えます。

阿部 ありがとうございます。次の質問です。「地元の若い人、特に小学校、中学校、高校生とかが授業や課外活動などをとおして外国の方と交流する機会があればいいな」というコメントをいただいているんですけど、どういった取り組みができると思いますか。特にキエルさんは子どもたちといろんなプロジェクトをやっていると思うんですが、うまくいった例とか、これからやってみたいことなどあれば教えてください。

キエル 私は龍馬学園（高知県内で外国人留学生を多く受け入れている専門学校）の留学生たちの活動に関わっているのですが、そこで小学校、中学校、高校で交流事業をすることがあります。そういう機会をつくったら、土佐市も高知大学や龍馬学園の留学生とのつながりができる。私は遊びのイベントを、高知県のいろいろな場所ですしていますが、もし

市町村ごとに遊びのイベントをやったら、もつと子どもと交流できる。学校とも連携できたら、留学生とつながりができる。いま小学校とかALITもいるんですけど少ないから、短期で来ている留学生と交流する、そういう機会をつくったらいいなと思ってます。

阿部こ 私はかつて、外国人とは「英語」を喋る人のことだと思っていたこともありましたが、必ずしもそうじゃないじゃないですよ。だから、インドネシアの人とか、ベトナムの人とかいろんな国出身の外国人が小学生たちと会える機会があったら、すごくいいと思いますね。

関連して、岩佐さんには教育の視点から、地域の多文化共生のあり方について意見をもらえたらうれしいです。

岩佐 今日はインドネシアのおふたりが来られています。日本とインドネシアのつながりについていろいろと思うんです。例えば「もの」のつながりとか。インドネシアから日本にやってきている代表的なものにはパーム油があって、この油はフライドポテトやポテトチップス、あるいは石鹸などの原料になっています。これをもとに、例えば学校の課題研究で、インドネシアとのつながりについて調査研究することもできると思うんですよ。そこに今日来てくださったようなふたりにも参加いただいて、インドネシアではこういった暮らしをしているんだということを聞いていくと、教育現場においても異文化交流ができ、もう少し深いのある研究や話ができると思います。

阿部こ 最後に一言ずつ、ゲストのみなさんからいただきましたと思います。今日のテーマである「地方」だからこそできる多文化共生について、順番にお願いします。

ウラム それでは大切にしている言葉を最後にひとこと。英語でもいいですか。

“DO WHAT YOU LOVE, LOVE WHAT YOU DO”「あなたがやりたいことをしっかりやって、あなたがやりたいことを愛して」という言葉をおくりたいと思います。

キエル 私は、田舎だから、人間関係が大事。そこから共生社会が広がるともつといい。

都会と田舎で比べない。都会は別の問題があると思います。田舎は人口が少ないとか、いろんなことがあるんですけど、人と人とのつながりをもっと続けば、田舎だから幸せなことがあると思っています。

阿部 地方だからその多文化共生というのは、地方によって多様なので一概には言えないかもしれないんですが、やっぱり土佐市に関して言えば後発のメリットがあると思うんですね。異文化に疲れていない。私は、滋賀県のとあるまちで多文化共生事業に関わっているのですが、そこは日系人がたくさん住んでいるまちで、1990年に入管法が改正されて、いままで外国人が0だったまちがその次の年には1000人になり、その次の年が5000人になるといったかたちで急激に増えていったんです。このときは、全然準備ができてないまま外国人を受け入れていったので、どうやって交流すればいいのかわからなかった。しかし土佐市は、今回の調査データに基づいて課題を解決していける。しかもまだまだ人数は少ないので、やることの効果がすぐ見えてくるし、異文化を魅力的に思える環境もつくれると思います。もう一つお願いしたいのは、こどもの国際理解教育です。こ

ども時代に外国人とコミュニケーションをとった経験は、将来的に世界に目が向くきっかけになります。年に1度、2度でも構わないので、ぜひ学校で外国人の方を招いて、その文化を学ぶようなことをやってもらいたい。そういったことは、大体の地域では国際交流協会と呼ばれる団体がやっているので、新たなプラットフォームとして「わくせいプロジェクト」みたいなことができれば、教育委員会が委託をして国際理解教育を進めていくこともできると思います。

岩佐 地方の対概念は大都市ですよね。大都市という人口が非常に多いとか、あるいは匿名性であるとか、あるいは自然が限られている。逆に、地方とか農村というところ、地方都市も含めて人がそんなに多くなく、顔が見える関係、特有性があるわけです。それからもう一つは、自然との関係。例えば私自身、高知に住んで20年以上になりますが、やっぱりごはんがおいしい。米、野菜、果物。そういった自然の豊かさや、そこから生まれる食べ物のおいしさ、そういう視点からの「豊かさ」を築いていけるのが、地方じゃないかと思っています。そういったところにいろんな人が集まり、新しいかたちで地域づくりをしていく

ことはすごく可能性があると思いますので、ぜひ土佐市も頑張ってもらいたいと思っています。

阿部 ありがとうございます。これでディスカッションは終えたいと思いますが、最後に市長から一言いただけたらと思います。

市長 今日は皆さんありがとうございます。実はコミュニティの再構築について質問したのは私なんです。地域コミュニティを維持継続していくことが難しくなってきたのですが、その部分でヒントをいただきました。特にうれしかったのはですね、キエルさんの「高齢者は魅力や」という話です。私も高齢者のひとりとして大変心強いというか、初めて聞いたことでありましたので、大変感銘を受けました。高知県をはじめ全市町村は、他者を認め合うというなかで共生社会をつくっていかうという機運が高まってきておりますので、土佐市も一緒に取り組んでいきたいと思っています。高齢者についての質問でもありましたけど、共生社会をつくることによってアイデンティティというか、地域のもの

が失われるんじゃないかという感覚をもたれる方もいるかもしれませんが、私は逆にこういった共生社会をつくっていくことによって、土佐市の新しいアイデンティティができるんじゃないか、そんなワクワクを感じました。ほんとうにありがとうございます。

阿部 ありがとうございます。長丁場ではありましたが、これにて公開シンポジウム「ここ」から見える「世界」を閉会したいと思います。ご登壇いただきましたゲストの皆さん、本日お越しくございました来場者の皆さん、ありがとうございます。

* 1 高知市内にある専門学校に在学中、悪性腫瘍を患ったネパール人留学生の治療費のために募金活動を行った。

地域おこし協力隊として活動を始めた2022年の夏ごろ、インドネシアからの技能実習生たちが集まって暮らす寮を訪ねたときに、初めてLと会った。先に仲良くなったインドネシアの男の子たちの横で物静かに座っていた彼女に「名前はなんていうの?」「仕事は何してるの?」と質問をしてみたが、言葉少なげに返事があっただけで、その日のメモには「Lさんインドネシア出身ユリ農家」とだけ記した。その後、Lに会う機会は何度かあったが、少し言葉を交わすだけというのが続いていた。その年の暮れに、生まれて3ヶ月になる娘を連れて再び実習生たちの寮に行くと、みんながその幼な子を温かく迎えてくれたのだが、特に喜んでくれたのはLだった。娘を抱っこしてあやしたり、写真を撮ったりと、いつもの物静かなイメージとはまた違う表情を見せていた。

それから半年ほどたったころ、Lと同じ寮に住むUから、「今日のゆうがた、家にいてもいいですか?」とSNSのメッセージが届いた。インドネシアの友人たちと我が家に来るという。「いいよ」と返信しながら、今日はいったい何が起こるのだろうか、とそわそわした。17時ごろ、自転車で乗った4人が家に到着。その4人のなかにLもいた。居間に案内すると、みんなは慣れたように畳に座り、わいわいとおしゃべりが始まった。そしておもむろに紙袋を手わたされた。なかをのぞいて見ると、かわいらしいレースがついた乳児用の服や靴、電車のおもちゃが入っていた。どうやら、娘の誕生日を届けに来てくれたようだ。プレゼントしてくれた服に着替えた娘を抱っこして写真を撮ったり、おもちゃで遊んでみたりと、突然、誕生日が始まった。楽しい時間ではあったものの、その日の会話はほとんどがインドネシア語だったことに加え、娘は終始Lが抱きかかえており、私はその輪になかなか入ることができなかった。

しばらくして、Lから突然メールがあった。「今暇ですか。JLPTを受けたいのですがJLPTの試験を教えてくださいませんか」。JLPTとは日本語能力試験のことで、N1

N5までの5つのレベルがあり、N1にいくほど難しい内容となっている。その名の通り、パスしたレベルによって技能実習生をはじめとした外国人の「日本語能力」を示すものであり、技能実習から特定技能へ移行したり、異業種に転職する際に必要になることがある。Lの話を知っていると必ずしも試験をパスする必要はなさそうだったが、今後の進路を考えてN4を受けておきたいようだった。技能実習生に必要とされている目安はN4だといわれているが、問題集をみてみると漢字の読み書きもある程度必要となるレベルで、結構難しい内容だと感じた（N4は小学校2〜3年生程度の日本語能力に相当する）。その日から、約1ヶ月後のJLPTに向けた試験勉強が始まった。

勉強は週に1、2回、土佐市内の複合文化施設の交流スペースに集まり、事例集の問題を解き、一緒に答えを確認するという方法で行った。Lとは一緒に勉強を始めるまできちんと話したことがほとんどなかったもので、日本語の文法をどのくらい理解し、文章を読むことができるのかわからなかったが、想像以上にすらすらと問題を解いていくことに驚いた。職場で日本人とのやりとりが日常的にあるからか、リスニングは特によくできていた。一

方で、漢字や文法はつまずくところもあり、間違えたところはその理由を一つずつ一緒に確認していくのだが、自分の第一言語とはいえ私がそれをLに説明することは意外と難しく、Lからの質問にはつきりと答えられないことも多々あった。日本語を教えることの専門性について痛感した私は、彼女の都合がつくときは日本語サロンに連れていき、そこにボランティアとして参加している日本語教師の資格をもつ人に難しいところを説明してもらったり、新しいテキストをもらったりもした。自分との勉強会がLにとってほんとうに役に立っているのか……と悩むこともあったが、一方では回を重ねるごとにLとの距離がだんだんと縮まるのを感じていた。勉強の合間や終わった後に、「京都の嵐山にある竹林の小道（外国人のあいだでとても人気のある観光地らしい）に行ってみたい」とか「インドネシアのお菓子をつくりたいけど、この材料はどこに売ってる？」といったなんでもない会話から、いままで見えてこなかったLの個性と呼べそうな部分をだんだんと知っていった。12月の初め、試験を無事に終えたLは、その手応えを「まあまあできた」と教えてくれた。

年が明けた2024年1月1日、Lと初詣にかけた。勉強会のときにLが「着物を着てみたい」と話したことをきっかけに、私の母のお古（柄が梅と紅葉で、だいぶ年季が入っている）を貸して一緒に神社にいく約束をしていたのだ。元旦の朝に我が家に集合し、着付け方法の動画をスマートフォンで検索しつつ、私とLは苦労しながらなんとか着物を着て、高知市内の鏡川沿いにある神社へと向かった。Lは長い髪をきれいにまとめ、私よりも上手に着物を着こなしているように見えた。イスラム教徒である彼女は、神社で参拝はしなかったが、参道に並ぶ人たちや屋台を興味深そうに眺めつつ、やはり一緒に連れて行った私の娘に夢中の様子だった。

その後もLからは「髪を切りたいのですが、どこで髪を切るのがいいですか?」「歯医者はどこにいくといいですか?」といったメッセージが来るようになった。2年前に土佐市に移住した私たちにとっても、新しい土地で美容院や病院を探すのは一苦労だ。ましてや外国から来ている実習生たちにとっては、その難しさに加え、言葉の壁や日本人からの偏見のようなものも付き纏ってくる。そんなとき、気軽に聞ける「誰か」がいることは、そのままそこでの生活のしやすさにつながるのかもしれない。

それから少しして、「お久しぶり。JLPTのN4の試験は合格です」と連絡があった。続いて「また勉強しませんか」とのお誘いも。技能実習期間が終わった後のことも視野に入れ、次は技能試験（業種別の技術試験で、特定技能ではその試験に合格した業種の仕事に従事できる）にむけて勉強しようと考えているらしい。

その後、しばらくして、Lは「やっぱりインドネシアに帰ることにした」と話してくれた。技能実習期間が終わった後の新しい仕事先を探したそうだが、さまざまな条件を検討した結果、帰る決断をしたようだ。一度帰国して、その後のことはまた考えようという。期間限定で日本で働く実習生たちとは、数年で別れがくることは承知しているが、実際にいなくなるとなると、やっぱり寂しい。「また日本に戻っておいでよ」と言いつつ、Lが納得できる選択をできるといいなと思う。「Lが帰る前に、みんなパーティーしよう」と言うのと、Lは「楽しみにしています」と笑顔で答えた。



Chap.

3

実践者に学ぶ

ライプツィヒの「ごはんのかい」―大谷悠さん

2023年10月1日(日)に、広島県尾道市へ、まちづくり活動家・研究者の大谷悠さんを訪ねました。現在は尾道にて、もとは空き家だった自宅を改修するプロジェクトを展開しつつ、大学でもまちづくりを専門として教鞭をとられている大谷さんですが、2019年に帰国するまでは、ドイツのライプツィヒを活動拠点とされていました。2011年、大谷さんはその地で衰退する商店街の一角にあった空き家を仲間とセルフフリノベーションし、コミュニティスペース「日本の家」を立ち上げます。そして、そのスペースにて「ごはんのかい」という一緒に料理をして食事をする週2回の定期的なイベントを始めたところ、毎週100人以上の人々が集まり、その地域の風景を変える運動へと発展していきました。もともとから移民や難民が多いという地域の特性を背景に、「ごはんのかい」

には9ヶ国を超えるさまざまな出自の人々が集まり、「料理・食事」という共同作業を経て、文化や言語の差異をこえたコミュニティが生まれています。また、定額の参加費を徴収せずに、それぞれの経済状況に応じて支払額を決定できる「寄付」というかたちで参加者からお金を集めて運営する方式をとっており、経済的に困窮した人たちにとってのセーフティネットとしても機能しています。現在は、大谷さんをはじめとした立ち上げメンバーは活動から離れ、現地の人々が引き継ぎ運営を続けています。

私たちは、大谷さんの著書『都市の〈隙間〉からまちをつくらう―ドイツ・ライプツィヒに学ぶ空き家と空き地のつかいかた』(学芸出版社、2020)と、「日本の家」運営メンバーによるドキュメンタリー映画『40m²Freiraum / 40m²のフリースペース―日本の家』(2015〜2017)をとおしてその活動に触れました。そこで読んだ／観た風景は、多様な出で立ちの人々が並んで大量の野菜を刻んでいたりと、大きな鍋を囲んでいたりと、路上にすわりこんで談笑しながら食事をしたり、一人のギターに合わせて大合唱が始まったりと……ポジティブなエネルギーに満ちたその風景に、私たちは「わくせい」として目指している風景を見た気がしました。今回の訪問では、「わくせい」について私たちが考えて

いること、悩んでいることについて、大谷さんに問いを投げかけ、「日本の家」および「ごはんのかい」での経験をふまえて話を伺いました。

——「ごはんのかい」はどのように始まったのでしょうか？

大谷 ただ自分たちが日本食を食べたいっていうのが始まりだったんです。ごはんを食べる場所がほとんどなかったんで、その当時は。ケバブ屋さんしかなかったんですよ。いまは開発が進んで、ほぼ空き家はないぐらいになっていきますけど。私たちが最初に来た2012年ぐらいは、ほんとうに空き家が多くて、2キロぐらいの商店街を歩いても、ひらいているお店が何軒あるかな、ぐらゐの感じ。それで、当時、すごく暇な日本人が何人か集まって、料理でもつくろうよ、ちょっと、豚カツとか食いたいし、みたいな話になり。そんな感じで始まったんです。

——自分たちが食べるために始まったと。

大谷 そうです、最初はね。でもそのうち友達を呼ぶようになったら、おもしろいじゃん、おいしいじゃんって反応があって。別に大しておいしくなかったんですけど、「日本の料理」というだけで外国の人たちはテンションが上がる。じゃあ定期的にやろうという話になりました。

それと並行するのですが、「Volkstische（フォルクスキューヘ）」っていうコンセプト自体は昔からドイツにはあったんですよ。「volks（フォルクス）」は、国民とか、市民という意味です。この言葉には国家主義的な部分もあるので、その言葉をそのまま使いたくないからと、わざとスペルを間違え



日本の家「ごはんのかい」 (c) Das Japanische Haus e.V.

たかたちで「folk (フォルクス)」と書きます。「kitchen (キューヘ)」はキッチンという意味です。これは、60年代の左翼運動から出てきた活動で、要するに「0円食堂」で、お腹空いていたら誰でも来て、料理と食事ができる場所です。すべてが寄付金で運営されます。それを実際にやっている人たちと友達になって、「ごはんのかい」が始まる前に「日本の家」でフォルクスキューヘをやったんです。ただ、コンセプト自体はすごくおもしろいと感じただけで、そこに来たのは左翼系のおじさんばかりだったんです。政治的な議論や活動も、それはそれで大事なだけけど、なんだか偏った感じになってしまっ……それより、もうちょっと誰でも来れる感じにしたいなと思っていたところ、他方から日本食を食べたいという話が出て、じゃあ、その二つを組み合わせたらいいじゃん、となったわけです。その流れで、レストランじゃなくて寄付金でやろう。そこで、自分たちが食べたいものを出そう。そして、「誰でも来ていいよ」っていうかたちにしよう、と決まった。それでやりだしたら、瞬く間に人が集まってきたんです。「日本の家」がある通りって、ほとんど食べるところがないから、「土曜にあそこ行くと飯が食えるみたい」「日本人がなんかやって、すげえ！」みたいな噂がすぐに広まったんです。

でも、徐々に「バレテ」くるんですよ。というのは、僕らは別に料理のプロでもなく素人だから、大してうまいものは出せない。しかもすげえ失敗する。そうすると、「いや、これだったら俺が自分の国の料理をつくるよ」と、いろんな人が入ってくるようになって。そうやって最初は日本人のものだったのが、だんだんとよくわからない感じになっていったんです。

——最初は、どういう人たちが来ていたんですか？

大谷 最初は自分たちの友達です。「ごはんのかい」は自分を含めて日本人3人で始めたんですけど、あとのふたりはね……なんて言えばいいんだろう、ちょっと寅さん(映画『男はつらいよ』の主人公)みたいなところがあって。働いてるわけでもないし、勉強してるわけでもないし、なんかよくわかんないけど「いる」人。どうやって食ってたかこいつら、みたいな。その当時は僕も含めてでしたけど。

そんな感じで時間だけはあるので、皆まちでずっと遊んでるんですよ。そうすると友達が

できるわけじゃないですか。3人のうちのひとりには音楽をやっていたから、ミュージシャンやアーティストの友達ができたり。まちでふらふらしていると、ふらふらしている人と出会うんですね。それで、ふらふらしている人同士ってすぐ仲良くなる。なかには、アルコールやドラッグの依存症の人もいたりするんですけど、そういう人たちもだんだん来るようになって。もうね、ただで飯食えるっていうので。それで、そのうちなんか食べてるだけじゃおもしろくないっていう人が、自分で料理をし始めたりして。だからキーとなるのは、「ふらふらしている人たち」なんですよね。

——本では「暇人」とも書かれていましたね。ただ、そのような人たちがいるのは都市の特性でもあって、地方ではそういった人をなかなか見かけないんですね。

大谷 わかります。僕は、いま住んでいるこの家でも「ごはんのかい」をやりたいんですけど、ここに来てからなかなか暇人になれていないので……

「日本の家」をやっているときに、立ち上げメンバー3人のうちのひとりであるKさんから悠は「冷たいんよ」って言われたことがあるんですよ。その3人のなかでは、僕は割と合理的にちゃんとやりたかったんです。お金のこともちゃんとしたいし、空間も掃除したりしてきれいにしたい。むしろ僕はそういう担当だと思ってやっていたんですけど、その態度についてKさんに「冷たいよね。結局人のことをあんまり考えてないでしょ」って言われたことがあって。「ごはんのかい」を始めて1年目ぐらいだったかな。最初はKさんの言っている意味がわからなくて「は？ふざけんよ。俺にそう言いながら、Kさんだっでできてねえだろ」と思ったんだけど……その後に考え直して「なるほど」と思うようになって。簡単に言語化できないけど、人をつなぐとか、人のために時間を使うとか、自分の利益のためじゃなくて、人のためにちゃんと時間を使ってるか、というようなことです。そういうことを指摘されたんだな、と思うようになったんだけど。Kさんはドイツ語も英語も全くできないんですよ。料理も全然上手じゃないし、そのくせなんか偉そうなんですよ。「これやったらええやん」って。そういう謎のおっさんで、何やってんだかよくわからない人のほうが、人のことをちゃんと見れていたりするんですね。Kさんの存在はすごく重要だった。

——「人のためにやれるか」ということと、でも「起点は自分たち」だという二つがあって、私たちもその間で自分たちの立ち位置を見失いそうになることが結構ありまして。私たちの活動は、傍から見てかなり社会善とした活動だと思うのですが、元々のきっかけは、私たちの興味関心にあつて。例えば、東南アジアのごはんが好きだし、外国の人としゃべるのは楽しいし、均一化されないコミュニティの可能性を探ってみたい。そうした自分本位の部分から始まって、進めていくと、「どうやったら社会が良くなるんだろう」とって、主語が大きくなって、これはこれで危険だなと思いつながら、そこでのバランスをとるのが難しくな

大谷 難しいですよ。ちなみに、「日本の家」に最初に難民の人たちが来るようになって、たとき、やっぱりちゃんとお世話しなきゃと思つていたところがあつたんです。「すごい大変な思いをしてきたんだから」って。でもだんだんとわかつてきたのは、かれらは若いし、吸収力ものすごくあるので、割とほつといて大丈夫かもしれない、ということでした。とにかく場をつくるだけで、こつちから特別サービスタリ気を遣うよりは、「別に来てもいいし、来なくてもいいよ」というくらいの方がちょうどいいんだな、と途中で

気づきました。

——「ごはんのかい」というのはその意味でもとてもちょうどよい仕組みだったんですね。ごはんをサーブすることだけが「やること」というか。

大谷 そう、だから自分でみんなを引っ張つてやってみたって人は、それをやるチャンスがある。ずっとそこでただらだらしていたい人はそれでもいい。ただ、繰り返しますが、そういう場所って、そこに時間をちゃんと使える人がいないと成立しないんですよ。例えば、お金を稼ぐことに時間を取られる人だけだと、そういう場所がつかれない。Kさんみたいに、人に時間を使える人がいないとできないんですよ。

——ライプツィヒのようなヨーロッパの都市部においてさまざまな人たちが集まれる場をつくることの一例が「日本の家」や「ごはんのかい」だと思つてますが、日本の地方でそういう場所をつくらうと思つと、何が変わつてくるんだろう、とは考えていて……

大谷 ドイツとかだと、どんなコミュニティスペースでも人がふらっと来たりするんです。「何やってんの？」って。日本ではそこがなかなか難しい。だから「お店」がいいと思っています。お店のふりをしていれば、お客さんと店主というかたちで一応関係がつけられるじゃないですか。それから、「物を売ってるだけじゃないんですよ」っていうようにつなげる。

——本では、「客」や「店主」という役割をなくすことが、さまざまな人が関わる場所をつくるうえで重要だと書かれていたけれど、日本では逆にそれらの役割が最初のきっかけとして必要ということですか？

大谷 そう思いますね。もう一つ、これはドイツでも同じですが、その人のネットワークをとにかく広げていくことです。さきほどの「暇人」もそうですが、友達の友達の友達でもいいんですけど、とにかく内側の人を増やすことも重要だと思います。

——「日本の家」に来る人たちの幅広さは、本では出身地のデータが掲載されていました。が、ものすごいバラエティがあつて。あれには驚きました。コミュニティスペースをつくる際に、自分たちのコントロールが効く範囲でつくって活動を続ける方法だと思ふんですけれど、「日本の家」はそうなつてはいなかった。

大谷 都市的なコンテキストでいうと、当時ちょうど難民の影響などでライブツイヒの人口が増え出した時期だったので、そういったまちの動きと呼応しているところはあると思ふんです。僕らが何か特別なことをやっていたわけではない気がします。

——ただ、そういう新たに来はじめた人たちに対して扉を閉じなかった、という姿勢はあつたわけですよ。

大谷 そうですね。まあ、しんどかったですけどね。内紛があつたりとかね。変なおっさんたちがいっぱいきたりして。



「ごはんのかい」で路上に溢れ出す人 (c) Das Japanische Haus e.V.

——そういうときは、どんな対応をしていたのですか？例えば、いろんな人が来て、その人たちの言動で場の雰囲気が悪くなるようなこともあると思うのですが、そのときは少し話をして帰ってもらおうようなことは……

大谷 うん、ありました。でもそういうことがあっても、居着く人もいたし……でも、なんだろうな……ときどき、すごいオシャレなイベントをやっているのに、そういうおっさんたちが溜まっているみたいな状況のほうがおもしろいじゃん、と僕は思っていたので。だけど、運営者のなかには、そういうのが嫌だと主張する人もいましたね。だから、そうしたタイミングで「この場ってどういう意味があったっけ？どう使えばいいんだっけ？」ということ、ちゃんと話すきっかけになっていましたね。

——「ごほんのかい」には、その日ごとにリーダーのような人がいるんですか？「今回は私が仕切る」みたいな人は。

大谷 いたり、いなかったりです。どのフェイズでも、中心にいる人たちが基本的には「今日はあの人につくってもらおうか」と決めたり、誰もつくる人がいなかったら「今日は自分でつくろう」とかなんとなく決めていくんですけど、そういう人たちが抜けたらすると、その「穴」にいままで手伝いに来ていた人たちが「じゃあ私がやる」って入ってきたりするんです。

——運営側が常に手綱を引いているわけではなく。

大谷 要するに、誰が「運営側」なのかよくわかんなくなるんですよ。

——それはすごいなあ……ただすごいけど、あれだけ大量のものをつくるのは、お金も手間もかかるし、結構なリスクがあるじゃないですか。それは、全員でリスクを分け合う前提の上でやっているということですか？

大谷 一応経験が多い人が「長老的」に初めてつくる人の様子を見てあげたりはしてまし

た。ただ、その長老もいなくなったりするので。途中でどこか遊びに行っちゃったりするし。でも、見るとそんなに難しくはないんですね。やること自体は。

ただ、ごはんが出てくるのが2、3時間遅れることとかは全然ありました。「まあまあ、別にいいか」みたいな。お客さんも別にそれに文句を言う人はそんなにいなかったですね。逆に、いっぱいつくったのにお客さんが全然来ないときもあるし。「今日は土曜だし、すごい人が来るだろう」って思ったら全然来ない。予想がなかなか立たなくて。

——「日本の家」を捉えるときに「素人」というのが一つのキーワードとなりますよね。プロのように「できないこと」が、外の人にとってのアクセスポイントになる。そこが従来の福祉的なアプローチであるケアする／されるの関係とは異なるところですが、私たちはその考えを知ってすごい勇気ももらったんです。というのも、私たちふたりとも、飲食店をやるほど食に対して技術も熱量も足りないと感じていました。とりわけ得意でも好きでもない。それに「スパイスや調味料を売ります」と説明すると、日本人たちはみなすごくプロフェッショナルでマニアックなものを期待されるんです。

大谷 日本だと特にそうかもしれないですね。

——でも、これからは「私たちが専門家になるのではなく、みんな（実習生や詳しい人）に教えてもらいながらお店を運営したい」と説明していこうと思います。「ごはんのかい」というアイデアを知る前、私たちは実習生たちがどうやってたらこの場に参加してくれるかを考えていました。例えば、商品を仕入れるときの会議に出てアドバイスをもらって、そのお札に



さまざまなバックグラウンドの人が集まる
(c) Das Japanische Haus e.V.

500円分の割引チケットをあげたりとか、そんなことを考えていたんです。ただそれだと何段階かのプロセスが必要になってしまって、もっと手軽に参加できるやり方があったほうがいいと思っていました。そのときに「ごはんのかい」を知って、これをやってみたいと思っただんです。もうとりあえず「来ればいい」というハードルが低いところがいいなと思って。

大谷 そうですね。

——それと、確か映像では「一緒に料理をする行為」を表すときに「作業」という言葉を使っていましたよね。プログラムでも仕事でもなく「作業」だと。

大谷 一緒に手を動かす、という意味合いで使っていたんだと思います。

——例えば、「ごはんのかい」は「プログラム」にもできるじゃないですか。「参加したい人は何時にここ集合で、定員何人まで」みたいな。

大谷 まあ、集合といってもたぶん誰も来ないし(笑)。

——実習生たちもそうかもしれない……。「ごはんのかい」に参加する人たちは、まず最初はみんな食べに来ることから始めるんですかね？

大谷 そうですね。だから、「お店」と「ごはんのかい」両方をやることはすごく大事な気がします。僕も、ここでそれをやりたいと思ってるんですけど。やっぱり、ごはんが必要ない人はいないじゃないですか。買い物をしたくない人もいないんです。そのスーパーにある食材を使ったら、つくれるじゃないですか。あとは中心になってくれそうな、いい感じのキャラクターを引っ張ってこれるか。ただ、仕事してるとなかなか大変だからなあ……

——でも実習生たちは、ネットワークがすごいんですね。みんな、仲がいいから、情報が行きわたるのも早いし。

一つお聞きしたいのが、「日本の家」の「ごはんのかい」では、イスラム教徒にとっての豚肉など、それぞれが食べられない食材についてはどのように扱っていたのですか？本では、最初はお肉を出していたけど、途中から出さなくなったと書いてあったと思いますが。

大谷 そうなんです。言葉を選ばずにいうと、〃面倒臭い〃んですよね。いきなりこう、政治や宗教の話になっちゃうし。それはそれで大切だし、楽しいんですけど。でも、ここではとにかくみんなで食べれる場にしたいから、最終的にそうなっていったんです。じゃあ、ベジタリアンに、ヴィーガンにすればいいじゃん、と。

——じゃあ「私の国の料理をつくるよ」というときも、基本的にはベジタリアンでお願いね、と伝える。

大谷 そうですね。でも意外と、いや意外ではないのかもしれないんだけど、アラブ料理とかはベジでも十分おいしい。インドとかアラブ系だとスパイスを使うんですが、それ

がすごくおいしい。スパイスだけで。日本人は「出汁とらなきゃ」って思うけど、スパイスとオイルだけでこんなに深い味になるんだということを発見しました。だから「ヴィーガンの料理を出す」というのは数少ないルールのうちの一つです。

——新しい味を発見したんですね。日本でも「多文化共生」という言葉を頻繁に聞くようになったけど、それは社会的使命としてだけで伝わっている部分もある気がしています。ただ、先ほどの話のように、そこには使命だけではない、文化やコミュニケーションの上での可能性があって、まだまだそこをうまく言語化できず、行政や興味のない人たちにそれを広げることにはまいち手応えを感じることができていない状況にあるのですが……。

ドイツは、かなり前から移民を受け入れてきたし、ライプツィヒもそういうまちだったと思うんですけど、そのまちでさまざまな人が集う場所というのはどのような存在になるのでしょうか？というより、それはドイツの人たちにとって当たり前の状況になっているのでしょうか？いまの世代のこどもたちは、物心ついたときからいろんな人が周りにいる環境にいたのでしょうか。

大谷 特にあの通りに住んでる人たちはそうですね。

——それでも、軋轢とか衝突は発生するのでしょうか？

大谷 うん、軋轢はありますね。やっぱり、平和的なだけの共生って無理だと思う。いまは、底が抜けちゃうギリギリのところ、軋轢はありつつも一緒に生きているという感じかな。だから、そのなかでいろんな世界の人が、ずっと一緒にはいないかもしれないけど、部分的にも関われる場所をつくることはすごく重要だと思います。例えば一緒にごはんを食べる場所が、社会の底が抜けないようにするための場所ってことになるんじゃないかと。あとは、やってみせるしかないと思います。ドイツ語でも多文化共生と近い意味で「社会的な包摂」という言葉があります。でも、「包摂」って、包摂する側とされる側と、この言葉を使う時点で切り分けてしまう。そういうことで救える人たちもいると思うんですけど、市民の側というか、そのまちに生きている私たちがやれることって、別にそんな難しいことではなく、一緒に飯を食べるとか、そういうことでいいような気がするんです。最

初に言葉があって、そのために何をしなきゃいけないか、ではなくて。とりあえず、「同じまちに住んでいるわけだし、まあ飯でも食おうよ」って。



右から大谷さん、パートナーのリリーさん、友人のへまさん



ドキュメンタリー映画

『40㎡ Freiraum / 40㎡のフリースペース—日本の家』

<https://youtu.be/9HpsFheSzM?si=QVno7yeqV9iRirSv>

香川と高知にモスクができるまで ―岡内大三さん

2023年11月23日(木・祝)に、高知県高岡郡四万十町の古着と喫茶の店「太陽の眼」にて、『香川にモスクができるまで ―在日ムスリム奮闘記』(晶文社、2023)の刊行記念イベントが開催され、私たち二人は本書の著者である岡内大三さんとのトークイベントに登壇しました。トークの前半では、本で描かれている2022年香川県坂出市にインドネシア人たちが立ち上げた「香川モスク」とその建立計画に関わった経験をふまえて、異なる文化背景、信仰をもつ人たちとの共生について岡内さんの話をお聞きし、後半では私たち登壇者だけでなく、イベントに集まった人たち、そのなかでも多くのインドネシア人たちがトークに加わり話が展開されました。ここでは、当日会場で交わされた対話の一部をお伝えします。

――岡内さんが香川のモスク建立のプロジェクトに関わることになった経緯はどんな感じだったのでしょうか？

岡内 もとから海外の文化に興味があって、イギリスやニュージーランドに住んだり、バックパックでいろんなところへ旅するなかで、いたるところでイスラム教徒の方々と会ったんですけど、日本人の感覚とは違うと感じるところや不思議に思うことがいくつもあって、いつかイスラム教徒について取材したいなと思っていました。そのなかで、香川の友人で、イスラム教徒に改宗している日本人がいるのですが、その人から香川でモスクをつくらうとしているプロジェクトがあると聞いたんです。そこからフィカルさん(*1)につながって。

まずはフィカルさんの家に訪れるところから始まりました。「家でモスクの打ち合わせがあるから来てください」って誘われて。初めはすごく真面目な話し合いというか、大人たちが静かに会議をしている風景を想像していたんですけど、それが全く違いました。まず、みんな若いことにびっくりして、日本に長く住んでいるお金に余裕のある人たちが中

心でやっているのかなと思っていたんですが、そういうわけではなかった。こどももたくさんいて、そこらへんで寝ていたり、後ろでアイドルのテレビ番組を観ながら踊っている子たちもいて。

当日は僕はカメラマンと二人で行っていたんですが、そこでは変に気を遣われることもなく、でも接待はちゃんとしてくれて。特別視されないような空気があったんです。それがすごく独特で居心地がいいなと思って。

これは礼拝のときの様子ですね(下)。ここでもこどもがすごく自由にしてるっていうことにすごく感動して。僕はそこで、い



フィカルさんの家で行われていた礼拝 撮影：宮脇慎太郎

スラム教についてもっと知りたいと思ったんです。日本人がもつイメージとして、やっぱりお祈りのときはちゃんとしなきゃいけないっていうイメージがあったんだけど……もちろんモスクとか、場所によっても違うんですけど、人の家でお祈りするこの感じはすごくいいなと思って。

——はじめから、モスクのプロジェクトについて文章を書いて発表するつもりで、そのために話を聞かせてほしいと頼んだんですね？ それに関しては、どのような反応でしたか？

岡内 すごい喜んでくれていたと思います。日本人がそういうふうに興味をもってくれることはなかなかなかったらしくて。

——逆に、岡内さんはコミュニティのなかに、外部から足を踏み入れていく立場ですよね。そこに関して、恐怖とは言わないまでも、戸惑いみたいなものはなかったんですか？

岡内 例えば、ニュージーランドに住んでいたときにマオリ族のコミュニティに入ったことがあって、そのときは文化の違いに少し戸惑いがありましたけど、ここに関しては、この家に足を踏み入れた瞬間からなんか「懐かしいな」と思ったんです。昔の日本もこんな感じだったのかなって。なんというか、すごく自然に、自分をそのなかの一部として受け入れてくれたっていう感じがしました。

—— 私たちも近い経験がありまして……今日も来ていただいているファニーさんがやっているお弁当屋さん「ハラルハウス」(p.214)に初めて行ったとき、「明日(インドネシア人イスラム教徒の)集まりがあるから来る？」って誘ってくれたんです。それで実際に参加してみたなら、知らないインドネシアの方がたくさんいるなかで、向こうからすごく喋りかけてくれたり、こどもの面倒を見てくれたり、その日初めて会ったのにすごく気に掛けてくれて。ちょうど財布を忘れて、駐車代を貸していただいたりもしました……。

岡内 インドネシアでは、そういうことが日常的に行われているってことですよね。知らない人を自分たちの集まりに呼んで、どんどん友達になっていくみたいな感じは。

参加者A(インドネシア人一以下*) そうですね。大体そんな感じですよ。「お客さん」とは呼ばないんですけど、相手の方が優しかったら、私たちが優しくするっていう。

岡内 なるほど。そういうことに、すごい慣れている感じがしました。

—— このように関わりが始まったんですね。その後、本では「モスクがなぜ必要なのか」ということを岡内さんが少しずつ考えていく過程が記されていて、読者としてもそれに伴走するかたちで進むわけですが、そもそも岡内さんはモスクという存在をどのように捉えていますか？

岡内 やっぱアイデンティティの一部なのかな、とは思っていました。無いと寂しいもの。その程度の認識でした。一方でインドネシアの方に聞くと、「神様のため」、「みんな



トークイベントに集まった人たち

で一緒にお祈りすると神様からのご褒美が何倍にもなる」、「モスクを立てることで天国に行けるとか」という話を聞きました。それらはもちろん重要な理由の一つなのですが、日本人に説明をするときには、ちょっとわかりづらいのかなとも思ったんですよね。いま、日本の国内にはモスクが130ぐらいあるのですが、今後移民とともにモスクも増えていくことが考えられます。そのなかで、なぜモスクが必要かということ日本人でもちゃんとわかるように説明をしないと、問題が起きかねないと思うんです。

——「モスク」という言葉自体に「人が集まる場所」という意味があると聞いたことがあります。その点で言うと、この本では、まずフィカルさんの家が「人が集まる場所」として出てきますが、その次に出てくるのが、ショッピングモールのフードコートだったんです。こういうところに集まるんだな、と読んでいておもしろかった。そんなことから、インドネシアの人たちは「集まること」がすごい上手なのかなと思いました。

岡内 集まることの重要性というのが体にも染みついてる感じですよ。だから、かれら

はコロナ禍のときでも集まることにすごくこだわっていました。あの時期は、日本人は集まらないことに意識を向けていて、その反面、集まることの重要性を対比として理解したと思うんですけど。場を共有するっていうのは、やっぱり交換できる情報量も全然違うと思うんですよ。そこには体温も、匂いもある。

——モスクについて、もう一つ個人的に興味をもったのが、技能実習生の存在です。技能実習生がひとつのまちに住む期間は3年から長くても5年で、帰国したり、違う場所へ移るケースが多いんです。だから、モスクの計画があったとしても、その人たちがいるあいだに完成するかはわからないし、できたとしても恩恵を受ける時間はとても短い。それでも、その人たちが寄付に協力するというエピソードが本にあって。「いいことをする」とが自分に返ってくる」からと、理由が書かれてはいたんですが、どういう感覚なのかを「理解」することは難しくして。

岡内 僕たちにはそういう感覚がないから理解できないだけで。でも、そういう文化とい

うか、信仰とともに育ってきているかれらとしては、すごく普通のことなのかなとは思いますが。だから、モスク建立に協力する人たちは、在留資格に関わらず信仰心によってつながっているんですね。まあ、インドネシアには2億7千万人の人口がいますから、信仰に對して、その、ゆるいというか、ヒジャブをつけなかったり、お酒飲む人もいます。だから、もちろんモスクに来る人、来ない人もいます。

—— インドネシアの実習生の友人から「神様はいるんだよ」と言われたことがあるんです。「君たちは信じていないけど、いるんだよ」と、かなりさらっと言われたことがすごく印象に残っていて。友達になるってことは、その人のことを「理解しなきゃ」という気持ちになりがちだけど、そうすると、信仰心のありなしの違いが障壁になっちゃう。日本人のなかでも、宗教を信仰している人たちに対して勝手に線を引いて距離をとっているケースってあるんじゃないかなと思うんです。

岡内 僕は、理解するよりも、尊重することが大切だと思います。相手の文化をリスペク

トすればいいし、そうすれば向こうも僕に信仰がないことをわかってくれる。特にインドネシアには本当にいろんな宗教を信仰している人がいるし、そういうことに慣れていると思うんです。日本人よりは全然慣れていないね。宗教って特別なものではあると思いますが、宗教以外にも人間性をつくる環境とか、いろんな要素があるわけで。付き合いえば付き合い合うほど、そう思うようになったから。逆に、いまはイスラム教徒という枠がそんなに僕のなかでは重要ではなくなってきました。僕のなかでは、境界線、枠み



ゲストの岡内さん（左）

たいなものは溶けているって感じですね。

——無理に「理解」するのではなく、尊重、リスペクトする。そのような態度をとるときに、具体的なアクションはどんなかたちになりますか？

岡内 否定しないことじゃないかな。それだけで十分だと思いますね。それはお互いですよね。宗教だけじゃなくても、いろんなものを信じている人がいるわけですから、まず否定しなければ、向こうも否定してこないでしょう。

——コミュニケーションの上で大切なことです。それではここから、今日のイベントにご参加いただいているインドネシアの方にも話を聞いてみたいのですが、普段日本人と付き合ううえで感じていることはありますか？

参加者A（*） やっぱり信仰のことを説明するのはちょっと難しいなと感じます。それぞ

れにこういう意味があるよって説明はするんですが……。例えば、職場の人にお祈りをする理由を聞かれたときに「神様に感謝しますよ」と説明したら、「あー……」みたいな。それに、実際には同じ職場のインドネシア人のあいだでもお祈りをする人と全然しない人との差もあるから、職場の上司からは「なんでAさんだけ？」と言われます。でも、人間のなかにもやっぱり真面目な人と、真面目じゃない人がいますよね。それは、インドネシア人だけじゃないと思うので、「そうやな」ってしか答えられない……うん、まあ大体そんな感じかな。

岡内 なるほど。でも、まあ、その説明で十分わかる気もしますけどね。

——そういった「わからなさ」を理由に関わりを避けるようになってしまうと難しいですね。もう一つお伺いしたいのですが、高知でもモスクをつくる計画があるということをお聞きしています。その計画について教えていただけますか？

参加者B（*） 今年（2023年）の4月にコミュニテイ（高知ムスリムファミリーイン

ドネシア会)を立ち上げてから、モスクをつくりたいという話があった。それから、空き家とかいろんな建物を探して。でもやっぱりお金がいる。まずは、お金を貯めてから。もうこれが、一番簡単な方法かなと思って。

あと、いまはインドネシア人だけでモスクをつくる計画です。この前、大阪のモスクについて相談したのですが、とりあえずはインドネシア人が全部集まってやるのが一番早い、と。考え方もいろいろありますし。

岡内 そうなんですよ。やっぱり地域によって考え方が違うから。だから、どの国の人が管理するかっていうのはつきりさせておいたほうがよさそうですね。

参加者B(*) とりあえずインドネシア人で場所をつくって。そしたらほかの人ともいろいろできるから。いまは、高知市の中心の帯屋町のあたりで探しています。一番行きやすいところ。インドネシアの人は電車(路面電車)とか汽車(県内の鉄道)とかで行くじゃないですか。(中心部から)離れるんやったら多分行きにくい。

岡内 そうですね。場所選びは大変ですよ。物件をまわるなかで不動産屋は親切にしてくれますか？

参加者B(*) 不動産屋さんには親切です。ちょうどその方が、前にミャンマーの人と一緒に働いていたことがあるみたいで。そこが一番話しやすいかなと思って(選びました)。いまのところは特別サポートしてくれる日本人がいるわけではないんですが、自分たちでできる範囲で進めています。なんか、フィカルさんの意見からも、いろんなことを悩むよりは、とりあえず踏み出そう、ということ。

岡内 そうやね笑

—— お会いしたことはないですが、フィカルさんならそう言いそうですね。もし、モスクができたなら、どんなことをしようと考えていますか？

参加者A（＊） みんなが集まりやすい場。みんなが交流しやすい場所にした。

参加者B（＊） いままで月1回の集まりがありました。いろいろなところ（公共施設の貸しスペースなど）で頑張っているんです。例えば、今月は空いているからここでやろう、となって、「来月もここでできますか？」と聞くと「もう空いてないよ」と言われる。それでまた別の場所。まあ、それが一番大変です。

岡内 大変ですよ。そういったことからマスクの計画しているんな地域で計画されているんだけど、ただ実現するところまでなかなか行かないんですよ。途中で諦めてしまったところもあるし。お金もそうですけど、なにより不動産の方で理解を得られないのが大変。あとはその周辺の人の理解も必要ですしね。

参加者C あの、私はコロナ前にインドネシアのスマトラ島に住んでいたことがあるんですけど、モスクからアザーン（礼拝時間の呼びかけとして、定まった文句が詠唱される）

が毎日聞こえてきたんですね。それは日本のモスクでも流れているんですか？

岡内 流しているところはないんじゃないかな。香川モスクでは、近所に迷惑をかけないように流していないです。

参加者A（＊） 大阪で流しているところがあるらしいんですが、それも周囲の人たちにも説明して許可もとっているようです。まあ、そんなにでっかい音じゃないんですけど。

岡内 なるほど。そのあたりのいい塩梅っていうか、日本人も嫌にならないで、イスラムの人もやりたいことができるっていう、いいラインを見つけていたらいいかないかなと思います。イスラムの人たちのことを自分たちのやりたいことを頑なにやる人たちだと思っ、不安に感じている日本人もいます。だから、そういう人たちとうまくやっていけるように、理解をどんどん広めていきたいですよ。

参加者D すみません、ちょっと教えていただけますか。あの、地域との交流という観点で考えた場合に、高知県のような田舎には各地に神社があつていろんなお祭りがあるんですが、そういうところにイスラムの方が行くことは大丈夫ですか？

参加者A(＊) お祈りはだめだけど、お祭りやったら大丈夫。もし、そのお祭りのときにお手伝いするようなことがあつたら、呼んでもらつても全然大丈夫。

参加者E(＊) やつたこともありますよ。やっぱり地元の方との交流は必要だから、日本人が私たちのところに来てくれるなら、自分からもしないと。お互いに。

—— いま、私たちは技能実習生にアンケートを取っているんですが、日本でやりたいことは何かという質問に対して「祭りに参加したい」が1番多い回答だったんです。

参加者A(＊) インドネシアで見ていた日本の漫画とかに載っている祭りのシーンがすご

く印象的なんですすよね。逆にこちらは、どんなことをしたら日本人が来てくれるのかな、と悩んでいます。この前みたいな文化交流やつたら、来てくれるんだなとは思いました(イスラム教のことを学ぼう、というテーマの会で、イスラム教についてのレクチャーや、インドネシアのお弁当を食べたり、伝統衣装での写真撮影会などの催しがあり、阿部航太・美香はその会に参加していました)。すごくいい反応でしたので、またやろうかなと。日本人も何人かいましたね。ほんとうにありがたいです。

岡内 やっぱり食が一番近いですよね。でも見ていると、モスクでご飯食べてもその後の会話が難しいようです。何を話したらいいのかと思う日本人が多いみたいで、何か共通の話題とかがあればいいんですけど。

参加者B(＊) インドネシア人のあいだだったら、大体は仕事の話になるんですよね。あとはどこ出身とか、同じ地元やつたら仲良くなりますね。

参加者A(*) この前の交流会のときには、いろんなところに招待状を送ったんですよ。テレビとか新聞とかにも。あと、前にムスリムのお客さんに対してどんな料理を出したらいいかと問い合わせがあったホテルにも招待状を送ったんですけど返事がなかったんですね。まあ、日程があわなかったのかもしれないんですが。だから次やるときはもう一回送ってみます。

あと、実習生とかインドネシア人を雇っている日本人の上司を呼びたいんです。これは私のお話なんですけど、職場にお祈りの場所がなくて、上司がどういう設備をつくったらいいいのか、結構迷っているところもあって。あと、日本のお正月みたいに、お祈りのお祭り（ラマダンの終わりを祝う）があるんですが、その日にインドネシアの人たちが有給を取ることについて、日本語で説明するのが難しい。もし上司たちが、そういうことを理解してもらえたら、「じゃあ、あんた休んでいいよ」っていうふうに協力してもらえるかもしれない。前に私の職場でも6人ぐらいのインドネシア人を雇っていたんですが、皆いっぺんにその日に休みたいってなって。「困りますよ」って言われたので「いや、でも、私たちにとっではこの日が大事な日なので、この日に休みたいんです」と。でもそこは理解されなかつ

た。結局、次の年はふたりだけ休みにして、次は別の人たちっていうふうにローテーションみたいにして。次はあなたたちと。まあ、仕方ない。シフト制なので。

岡内 しかも、その日が月の満ち欠けで変わるから毎年ちよつとずつずれていって、前日までいつになるかわからないんですよ。僕はそれがめっちゃ好きですけどね。だから毎年ラマダン明けの時期は月をよく見えています。

—— いやあ……それは日本のシステムとは合わないかもしれないですね。雇い主の大変さもわかります。でも知っておいてもらえるかどうかで対応も変わりますよね。要望の言いやすさも変わりますし。

参加者A(*) 逆に新しい実習生たちが仕事の心得みたいなことをあまり理解してないこともあります。だから、かれらは「絶対にこの日に休みをもらいたい」って主張するけど、でもね、会社的にはこれはちよつと簡単にはできないよって。そういう摩擦もある。

参加者 F お正月みたいってことだったのですが、家族と一緒に来ていない人でもその日は休みをとりたいと思うのですか？

参加者 A（＊） 家族が集まるただけじゃなくて、友達が集まる日でもあります。それに、家族がいない人たちにとっては、かわりに私たちが家族になります。集まったらもうみんな家族なんです。

—— あっという間でしたが終了の時間となりました。最後に岡内さんから一言
お願いできたらと思います。

岡内 この本で本当に言いたかったことは、イスラム教のことを理解することが日本人のためにもなる、ということなんです。これから移民がどんどん増えていくなかで、お互いのことを知らないままだったら、問題が起きるかもしれせん。おそらく今後制度もいろいろ変わっていくって、2世、3世が増えていくと、日本の社会とも学校や仕事をとおして

関わりが増えてくる。それにイスラム教からも、インドネシア人の考え方からも、日本人が学べるところってすごくいっぱいあって。そういうところに注目して付き合っていくと関係がよくなると思うんですね。どちらかが上とかじゃなくて、対等に付き合えるようになっていけば、お互い国としても、個人としても成長できるんじゃないのかなって。それはほかの国からの移民についても同じことが言えるんじゃないかと思っています。

（後記1）

イベントから約2ヶ月半後、2024年2月に高知モスクが高知市の中心地のビルの2階にオープンしたとの新聞記事が掲載されました。記事には「人々のスマートフォンから、礼拝を呼び掛ける言葉『アザーン』が1日に5回響く。その声を頼りに、順番に手足や顔を水で清めていく。持参したじゅうたんを並べ、ひざまずいて額を床につけ、立ち上がった



イベント終了後、会場の外では自然と交流が生まれていた

*1『香川にモスクができるまで』の主人公的存在。香川モスク建立プロジェクトのリーダーであり、彼の熱い気持ちと行動力が困難なプロジェクトを力強く牽引していく。

*2 高知新聞. “高知市に県内初のモスク イスラム教徒が集い祈る インドネシア人夫妻らが開設”. 高知新聞PLUS. 2024-02-07. <https://www.kochinews.co.jp/article/detail/719688>, (参照 2024-05-13).

胸の前で腕を組み、熱心に祈りをささげた。」(*2)と書かれていました。話を聞いていた状況から立ち上げまでのスピード感には驚きましたが、簡単な道のりではなかったはず。また話を伺いたいと思っています。

(後記2)

2月下旬に私たちは岡内さんの案内で香川モスクにてフィカルさんにお会いしました。フィカルさんにモスクの現状を伺うと、オープンから2年たったいまでも地域住民へのあいさつまわりを欠かさず行っていたり、異なる国の出身者のあいだにおける考え方のズレに気を揉んだり、常に気を配りながら運営されているようでした。当日は礼拝で人が集まる金曜日。多くの人が、車、自転車、徒歩で集まり、2階の部屋を(1階が内装工事中のため)いっぱいにして礼拝が行われていました。幼児を抱える私たちを多くの人が気に掛けてくれて、これが岡内さんが語っていた「受け入れてくれた」という感覚なのだろうと感じました。



Chap.

4

ごはん
と
ス
ポ
ー
ツ

「となりのキッチン」と「自炊の会」

地域おこし協力隊の活動を始めた当初から、料理ワークショップを開催したいと考えていました。お店をやっているプロの料理人が先生になるだけではなく、地元素材に詳しい年配の人や、外国から来ている人たちがお互いに先生、参加者になり、自分の自慢の料理を教え合うような機会をつくりたい、そんなイメージがありました。

料理ワークショップには、さまざまな人たちに関わってもらいたいと考えていましたが、そのなかで実習生たちの関わり方について悩むことになりました。休みが不定期である実習生たちが多いため、かれらが確実にイベントに参加できるかどうかは直前にならないとわからず、実習生たちに料理の先生としての役を依頼することはなかなか難しい現状がありました。また、先生ではなく一般参加者として来てもらうことを考えた場合でも、お金

を稼ぐために日本で働くかれらが、料理ワークショップにお金を払って参加するかはわからず、実習生たちとこの企画の接点をどのようにすればよいのか、なかなかいいアイデアを出せずにいました。プロの方に頼んで、多くの実習生たちの出身地であるインドネシアやベトナムの料理を日本人が学びにくる、という内容でも十分に成立するとは思ったのですが、せっかくならば実習生たちと日本人、双方に学びや発見がある企画にしたいと思いました。

そこで、①参加者を公募して開催するイベントと、②実習生と一緒に母国の料理をつくる会と二つに分けて、それぞれでやってみることにしました。①は、ベトナムやインドネシアなど実習生の出身国の料理をつくることをとおして参加者とともにその国の料理や文化、暮らしなどを学ぶワークショップとして企画を立てました。先生は、日本でお店を開いている在住外国人の方などを想定しました。②は一般参加者は募集せず、実習生と関係者のみが集まり、実習生の母国の料理を一緒につくる会としました。身内のみのプライベートの会にはなりません。今後どのようなかたちであれば実習生に参加してもらえるかを探る機会として、そしてなにより私たちが実習生たちと関係を築く機会として実施することにしました。

① 料理ワークショップ「となりのキッチン」

移住者や外国人住民、地元の人など、自分たちのすぐ近くに住むさまざまなルーツをもつ人たちの暮らしについて、料理をとおして学ぶワークショップにしたいと考え、イベント名は「となりのキッチン」としました。

1回目のテーマはインドネシア料理とし、先生は高知市内にあるハラルの弁当屋さん「ハラルハウス」店主のファニーさん^(P.214)にお願いするにしました。ファニーさんにワークショップでつくるメニューを相談すると、「ソトアヤムは？野菜がたくさんはあった鶏のスープ(ソトリスープ、アヤム＝鶏肉)」と提案してくれました。ファニーさんと相談の末、ワークショップではソトアヤムとともに、ピーナッツをソースに用いたミックサラダである「ガドガドサラダ」をつくること、加えてファニーさんによるミニ・インドネシア講座も行うことが決まりました。

イベントには15人の参加があり、大学の先生や学生、そして地元の小学生とお母さんも参加してくれました。参加者の多くは高知市から来ており、土佐市からももう少し参加し

てくれたら……とは思いましたが、地元の小学生に参加の理由を聞くと、「インドネシアについて知らないから」と率直に答えてくれました。ワークショップの途中から、土佐市で介護の分野で働くインドネシア出身の実習生たちが遊びに来てくれました。彼女たちは、3週間ほど前にアンケート調査で仕事先の病院に伺ったときに出会ったうちのふたりで、休みがあれば遊びに来てほしい、と声をかけていました(行きたいけど仕事が入っていて行けない、という彼女たちの同僚も何人かいました)。ボランティアとして参加してくれたふたりは、インドネシアの料理や、土佐市での仕事や生活について日本人参加者と話しながら(ハラルフードが売っているところがなくて不便、といった話も聞きました)、手が空いたときにはささっと洗い物をしたり、掃除をしたりと、手際よくワークショップをサポートしてくれました。

ファニーさんは、キャンドルナッツや赤玉ねぎなどをミキサーにかけ、それをフライパンで炒めながら、レモンガラスやこぶみかんの葉を加えて、スープ用のペーストをつくっていきます。ソトアヤムは家庭料理だと聞いていたので、比較的簡単にできる料理かと思いきや、ものすごく大変な料理なんだとだんだんとわかってきました。鶏丸ごと1羽を大



ファニーさん（左）と参加者

きな鍋で茹でてから、さらにそれを油で揚げているのを見たときは、思わず「茹でてから、わざわざ揚げる必要があるの？」とファニーさんに聞いてしまいました。それに対して、「おいしいくなるから。皮がパリッとして、揚げたほうがいい」と、さも当たり前のように答えました。

完成した料理をみんなで食べているあいだ、ファニーさんが用意してくれたインドネシアについてのスライドや映像を視聴しました。インドネシアは17000以上の島からなり、そこにはいくつもの民族が住んでいて、それぞれ独自の伝統衣装、異なる文化があるそうです。スライドのなかでは、参加していたふたりの実習生が生まれ育った島も紹介されていました。

参加者からは、インドネシア料理を初めて食べて、意外とさっぱりでおいしかったという感想とともに、実習生と初めて話すことができたという声もありました。ポランティアとして参加してくれた実習生たちにとっては、普段の仕事で担っているものとは異なる役割をとおして、地域との新しい関わりをもつ機会になったのではないかと思えます。

また、後日談になりますが、その日仲良くなった日本人の参加者と実習生たちがワーク

ショップ後も連絡を取り合い、一緒に大学祭にでかけることになったと連絡をもらいました。同じ国の出身者同士、もしくは職場のコミュニティという限られた人間関係のなかで暮らしている実習生たちが多いため、こうしたワークショップをとおして新しい関わりができたということは、私たちにとっては一番うれしい出来事でした。

②「自炊の会」

「自炊の会」は「となりのキッチン」のような公開ワークショップではなく、その名のとおりクローズドな集まりとして企画されました。自宅や職場という人の出入りが限定された場所、そして友人同士という近い関係性のなかで、実習生たちとどのように関われるかを、料理という共同作業をとおして試します。

実施日 2023年11月26日(日)

参加者 一農業の分野で働く技能実習生4人、阿部(航・美)

メニュー ミー・アヤム(鶏肉のつけ麺)、ブル・アヤム(鶏のおかゆ)、テンペ(大豆の発酵食品)の天ぷら

場所 阿部家

11月に実施した初回の「自炊の会」は、12月で実習期間を終えて帰国する予定の実習生の「お別れ会」も兼ねて実施されました。一般参加者を募集せず、知っている間柄の人だけが参加するイベントのため、「となりのキッチン」のような料理ワークショップよりもゆるく企画できるのはよかったです。実習生たちに「その日につくるメニュー」と「必要な素材と道具」をメッセージのやりとりで確認するのにもすごく苦労しました。実習生たちにとっては料理に関する事柄を日本語で伝えることが難しく、私たち二人にとってもインドネシア料理の知識がほとんどなく、実習生たちが意図していることを掴みきれないところがありました。しかし、当日になって一緒に買い物に行き、話しながら必要なも

のをカゴに入れていく過程で、いろいろなことが一気にクリアになりました。このときに限らず、実習生たちとの関係において、結局は直接会うことがさまざまなことを解決してくれます。

買い物から家に戻り、みんなで料理を始めると、すぐに実習生のひとりが音楽をかけようと提案しました。自宅のスピーカーにパソコンをつなげて彼に操作を預けたところ、「インドネシア人が日本語で歌うポップソング」をかけてくれました。一瞬、日本人アーティストの楽曲かと思うほど流暢な日本語ですが、イントネーションに独特のニュアンスがあり、それがなんとも味



阿部家のキッチンで料理をするインドネシア人実習生たち

わい深い印象を与えます。その後も、いくつかのインドネシア人アーティストによる日本語の曲を紹介され、それを口ずさむ彼をみて、インドネシアでは「日本語の曲」というジャンルがあることを知りました。

調理のなかで印象的だったのは、「サンバル」という辛味調味料をつくる工程です。唐辛子やニンニク、たまねぎなどを、小ぶりの石臼の上ですりつぶしながら混ぜ合わせていきます。床に石臼を置き、ゴトゴトと臼を揺らしながら力一杯つぶす様子から、現地の生活が見えるようで、異文化の迫力のようなものを感じました。

その日、実習生たちはミー・アヤムという麺料理とともに、ブルル・アヤムというインドネシアのおかゆをつくってくれました。私たちも一緒につくろうと思っていましたものの、実習生たちが自分たちでどんどんと料理を進めていき、結局私たちは横でそれを眺めながら質問する、という構図になっていました。かれらの様子を見て、「つくり慣れた料理をサーブしてくれているんだな」と思っていました。ブルル・アヤムについては完成した後に「初めてつくった」と打ち明けられ、この会が自身の故郷の料理を初めてつくる場としても機能していたことをおもしろく感じました。

「2回目 ベトナム料理」

実施日—2023年12月16日(土)

参加者—電子機器をつくる会社で働く技能実習生たち6人、日本人社員3人、阿部(航・美)メニニューフォー・ガー(鶏肉スープと米粉麺)、バインセオ(ベトナム風お好み焼き)、ココナッツ風味のゼリー

場所—会社の交流施設

12月に開催した2回目の自炊の会は、地元企業で働くベトナムからの実習生たちと実施しました。当時、ベトナム出身の実習生たちは日本語サロンにあまり参加していませんでしたが、なかなか出会う機会がなかったのですが、今回は企業の方に協力をお願いいただき、ベトナム人実習生たちのコミュニティに参加させてもらいました。ここでも、ほとんどは実習生たちが手を動かして私たちは出る幕がなかったのですが、「一緒に料理をして(その様子を眺めて)、一緒に食べる」という工程を経ると、味だけでなく、その国の生活までもが見えてくるような感覚がありました。

その日につくったのはバインセオという料理でした。ベトナム風お好み焼きのようなものだと聞いていたので、日本のお好み焼きみたいにソースをかけてそのまま食べるのかと想像したのですが、それを生春巻き用のライスペーパーに包んで食べることには驚きました。乾燥したライスペーパーを水にサツとおしてふやかし、そこにバインセオとレタスやきゅうりなどの生野菜と一緒にに入れて包み、お手製のスイートチリソース（ニンニク、ナンプラー、唐辛子、砂糖などが入っている）につけて食べます。その手軽さや、自分の好きな具材を入れていく点が日本の手巻き寿司に似てい



大量のニンニクの皮をむくベトナム人実習生たち

ました。以前、フォンバインミーのフォンさん（P.219）から、ベトナム人はハーブをよく食べるという話を聞いていましたが、ドクダミなどのハーブを生春巻きに入れて食べたりもするそうです。ひとりの実習生が、「ベトナムで家族が店をやっている」と写真を見せてくれました。そこには、道端の地面にフライパンがいくつも並べられ、それぞれのの上にはバインセオらしきものが焼かれている様子が写っていました。おそらく屋台の一角だと思うのですが、バインセオが生活に身近なストリートフードなのだとということが一目でわかりました。

その日、私たちは1歳になる娘を連れて参加していました。人見知りで泣きそうになる娘を、実習生たちは入れ替わり立ち替わりあやして機嫌をとろうとします。料理がひと段落し、ふと作業の手が空いたとき、ひとりの実習生が「私のこどもはもう少し大きい」と写真を見せてくれました。そこには、彼女と小学生くらいに見えるこどもたちが映っていました。話を聞くと、今回参加してくれた実習生のなかには、ほかにも結婚して、故郷にこどもを残して来日している人が数人いるとのことでした。

「一緒に料理をして、一緒に食べる」という作業をともにすることで、実習生たちの日々の暮らしや考え方、それぞれの個性というものが少しずつ見えてきました。こんなにも個

性豊かで明るい人たちが土佐市で暮らしていることを、地域の人たちにも知ってほしい。そしてなにより、楽しくて、おいしい。この経験を、ほかの実習生たちや地域の人たちへとより広く共有するにはどうしたらよいだろうか。二つの異なる試みを経て、より継続的で広がりのある活動を目指して「ごほんのかい」へと展開していきます。

Chap. 4-2

ごほんのかい

初めてライブツイヒの「日本の家」での「ごほんのかい」(p.132)を知ったとき、「わくせい」の目指すべき姿として憧れに似た想いを抱きましたが、地域の特性の違いや、実習生たちの生活習慣から、同じような方法で実施するのは難しいだろうと感じました。しかし、その後、「自炊の会」を自分たちで実施し、その楽しさやおいしさを実感するなかで、彼らが行われている「ごほんのかい」の要素を取り入れながら、このまちで「わくせい版ごほんのかい」をやることはできないかと考えるようになりました。

年が明けた2024年2月から、将来的に「わくせい」として運営するための物件の賃貸が始まりました。市の中心部にある古い平屋の民家で、今後改修をしながら「店」として機能するように場を整えていく予定ですが、状態としてはすぐに人を招くことができる

くらいに整っています。そのようにして、せっかく自分たちの拠点ができたのだからと、実験的にでも「ごはんのかい」をやってみることにになりました。初回の開催に向けてまとめた概要と検討事項は以下のようなものでした。

「ごはんのかい」概要

- ・月に一度、夕方から夜にかけて実施
- ・料金は寄付制。ひとり当たり、300円程度を募金箱に入れてもらう。集まったお金は、基本的に材料費に充てる
- ・初回はインドネシア料理をテーマとして、親交のある実習生たちに協力をあおぐ
- ・今後は広く誰でも参加できるようにしたいが、会場の狭さを考慮して、人数を調整しながら個人的に参加者を募る

検討事項

- ・ハラルに配慮はするが、完全なハラルフードをつくることは難しい（醤油やみりんなどの日本食でよく使う調味料にもハラルで禁止されるアルコールが含まれる）。そこにイスラム教徒の人は参加してくれるだろうか？

・メニューをどう決めるか。初回はインドネシア料理をつくるため、料理が得意な実習生に声をかけ、メニューを考えてもらうようお願いした

1回目の「ごはんのかい」は、2月24日(土)の17時ごろから始めることにしました。実習生たちの不定期な休みにあわせて開催日を設定するのではなく、仕事の日だとしても終業後に参加できるように17時以降の夕飯をつくる会として設定しました。この日は、インドネシア出身の技能実習生・特定技能外国人、ALT、私たちの友人である地域に住む日本人(小学生を含む)、計18人の参加があり、メニューは、インドネシアのチキンスープであるソトアヤムとテンペの天ぷら、そして手軽にできる料理として、韓国料理のチヂミをつくりました。18時過ぎに、仕事を終えた実習生たちが集まりだし、一斉に調理を始めたため、調理器具が全然足りなくなってしまい、切るのも焼くのも順番待ちが発生する事態となりました。結局、料理が完成して食べ始めることができたのは20時過ぎでした。



わくせい「ごはんのかい」第1回

とはいえ、初めての「ごはんのかい」はとてもよい空間をつくりだしていたと思います。調理している実習生たちがめずらしい調味料や野菜を使っているのを見た日本人参加者が思わず質問をして、そこから会話が始まったり、実習生が小学生にセロリの切り方を教えたり（インドネシアでは主に葉の部分を食べる）、「自炊の会」でも出てきたサンバル（P.196）を実習生が「食べてみて」と日本人に勧め、「辛すぎるよ!」と笑いが起こったりと、私たちが仕切らなくても、自然とそこで交流が始まっていました。結局、ハラルフードについては、使っている食材を伝えた上で、その人の判断で食べる食べないを決めてもらう、という方針をとりました。その日は、イスラム教徒以外にも、宗教以外の理由で肉全般を食べない人もいて、さまざまなケースに対応できるように準備する必要性を感じました。

会は21時半に終わり、すでに帰りのバスが無くなった遠方に住む実習生たちを、日本人参加者が協力しあって車で送り、近くに住む実習生たちは残って皿洗いなどの片付けを手伝ってくれました。その片付けも22時には終わり、帰り間に実習生たちから「次、何ってくる?」と声をかけられました。成功の手応えを感じた瞬間でした。

上記の課題と成果を踏まえて、3月20日（水・祝）に第2回を開催しました。その日は、早稲田大学で建築を学ぶ学生たちが拠点に滞在しており、一緒におでんとミリアヤム（インドネシアのチキンヌードル）をつくることになりました。前回の1・5倍ほどの人が集まり、そのなかには前日にお誘いの声かけをした、拠点の向かいに住むKさんとお隣に住むBさんもしました。前回の反省からできる限り調理器具を追加していたものの、すぐに鍋が足りなくなり、急遽向かいに住むKさんに鍋を借りることになるなど、相変わらず慌ただしい現場となりました。この日は、1回目の「ごはんのかい」に参加していたインドネシアの実習生たちが友達を誘ってきてくれたことで、最終的に30人近くの参加がありました。これ以上人が増えると身動きが取りづらくなるという新たな課題を抱えることになり、4月以降の開催方法についても考えていく必要があります。

「わくせい版ごはんのかい」は、料金が発生する料理ワークショップ「となりのキッチン」と、プライベートな空間で実施する「自炊の会」のあいだを探った企画です。メニューを決め、料理の作業をリードするのを複数の人が担当し、たとえ特定の人が欠席したとしてもその穴を周りの人がカバーします。また、友達づたいで人は集まるものの、そこは完全に閉じた場ではなく、さまざまな出自の人が関わることができるセミパブリックな場とし

て運営されます。そこでは、出自や年齢の差異をこえて、とても親密なたちで会話が交わされます。定番の話題である食や文化の違いのことから、仕事のこと、プライベートな恋人や家族のことまで、さまざまなトピックの会話が聞こえてきます。

——市民体育館でのバドミントン、最近やってる？（市内のインドネシア人実習生たちが、独自で体育館を借りて、バドミントンを行っている）

R やってる、やってる。また来る？

——行きたいなあ。バドミントンはさ、ラケットもいるじゃん？あとシャトルも必要でしょ？あれってどうしたの？

R 買った。あそこのお店（市内にあるスポーツショップ）。みんなで1000円集める。

それで、シャトルはお店。ラケットだけはメルカリで買った。

——メルカリ？Rがメルカリで買ったの？

R 友達がやっていて、それで買った。

——そうなんだ、すごいね。体育館の予約は？

R 私行って、直接予約する。私、電話番号ない。だから直接行く。インドネシア人はWhatsAppのグループがあるから、それで連絡する。

——なるほどね。最近はどう？忙しい？

R いまは仕事いっぱい。忙しい。毎日残業。1時間ぐらい残業。

——大変だけど、お金はいっぱい貯まるね。あ、大丈夫？（Rが友人に話しかけられる）

R 大丈夫。友達、お祈りの時間。

—— そうですね高知市のモスク（p.179）には行った？

R まだ行ってない！行きたい！もう行った？

—— まだ行けてない！

R 行くの大変。いま、休みもない。いま、みんな（同じ職場のインドネシア人たち）の休み別々。私、水曜日。友達、火曜日……オクラ採るは、毎日採る。一緒に休みはできない。

—— Rは技能実習があと1年でしょ？

R 私、考えた。もう1年、ここで働く。特定技能でやる。その後はたぶん帰る。インドネシアでメロンつくりたい（Rの働く農家はメロンが主要作物）。ハウス建てたい。

—— そうなんだ！

R インドネシアのメロンは安い。味は、日本のがおいしい。もっと甘い。インドネシアで日本のメロンつくる。インドネシアでもスーパーとか、モールで売ってるメロンは高いよ。それをつくる。

—— そうかあ。この場所を今からお店にするんだけど、まだもうちょっと時間がかかるから。でもRがあと2年いるなら、それまでにはオープンできるよ。

R そうですねか（笑）。



わくせい「ごはんのかい」第2回

ファニーさんのこと

県内の多文化共生関係の事例を調べていたなかで、2022年1月のとある記事を見つけました。そこには、ヒジャブをかぶって調理場に立つ女性が掲載されており、「ハラル」対応のインドネシア弁当を販売するお店「ハラルハウス」が高知市にオープンしたと書かれていた。記事によると、自宅前にコンテナを建てて、そこで調理をしているという。ハラルハウスは「予約制」であり、電話かSNS（主にインスタグラム）で注文を受けているようだったので、とりあえずインスタグラムにあがっているメニューを頼りにDMで2日後の受け取りで注文してみる。2時間ほど待った後に返信があって受け付けてくれた。返信の

文面が正しい日本語で、漢字も使われていることにも少し驚いた。

当日、記事にあった住所をたよりに進むと、高知市内の新興住宅地のなかにある一軒家に着いた。特に看板も出ておらず「ほんとうにここであっているのだろうか」と不安になったが、新聞の記事にも書いてあったコンテナが庭に設置されているのでおそらくここだろう。インターホンを押すと母家から店主らしき人が出てきて、流暢な土佐弁であいさつをしてくれた。それがファニーさんとのファーストコンタクトだった。代金を支払い、お弁当を受け取りながら「（ハラルハウスのことを）何見て知った？」というファニーさんの質問をきっかけに、自分たちのプロジェクトのことを説明すると、それに返答するようにファニーさんも自身のこと、お店のことをどんどん話し始めた。私たちは、家の前で手わたされた弁当箱を抱えたままその話に聞き入ってしまった。

ファニーさんは、インドネシア出身で来日して20年以上になるといいます。もともとは出稼ぎ目的で来日し、高知市内のスーパーマーケットで16年ほど働いた。その最中、インターネッ

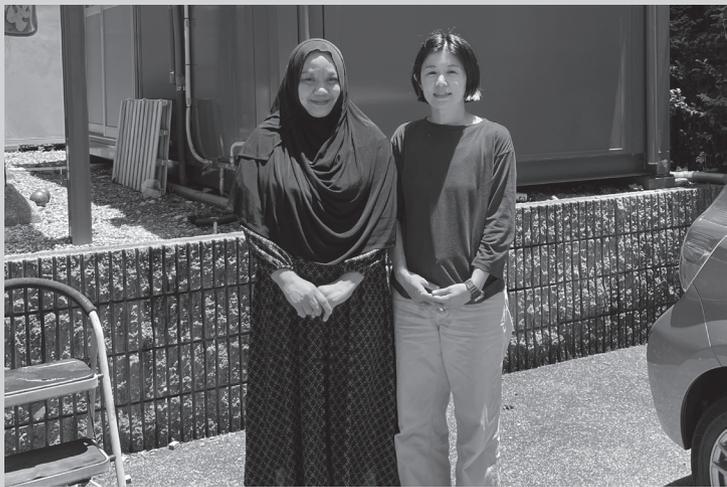
ト經由でいまのパートナーであるインドネシア人の男性と知り合い、結婚。当時シンガポールに駐在していたパートナーを呼び寄せて、日本で一緒に暮らすことになった。

もともと料理は得意だったが、弁当店を開こうと思ったきっかけは、インドネシアから高知に来たイスラム教徒の人たちの「高知にはハラルに配慮したところがなく、食べるものがほとんどない。食べられるのはコンビニのパンくらいしかない」という話からだ。確かに、高知県内にはハラルに対応した飲食店はほとんどなく、食材についても一部のお店が限定された商品を取り扱っている程度である。飲食店を開いて欲しいとのリクエストもあったが、酒類の販売に抵抗があり、最終的に弁当店のスタイルを選んだ。

そうした背景もあり、届ける先のイメージはあくまで高知に住む（来る）イスラム教徒のインドネシア人たちだ。味付けについても「特に日本風にはしてない。ただ、辛いのが苦手だったらそれは調整する」とのこと。実際に常連客の割合は日本人が多いというが、なかにはインドネシア人の技能実習生を受け入れている事業者の日本人が、実習生たちの分をまとめ

て購入していくこともあるという。

また、ファニーさんは高知の素材を積極的に取り入れることも意識していると話してくれた。この日のお弁当についても「ピーナッツのタレには高知産ゆずを使う。春巻きの中のものにんじんも高知産のものを使いました」とのこと。特殊な調味料や食材はインターネットを頼ったり、知人のインドネシア人から卸してもらったりするらしいけれど、できるかぎり高知で手に入るもので工夫しているという。私たちは、そんなファニーさんから後にテンペが市内の業務用スーパーで売



ファニーさん（左）と店の前で

られていることや、とあるタイのグリーンカレーのレトルト商品がハラル認証されていることなどを教えてもらうことになる。

ファニーさんの心意気や、インドネシア食材にまつわる情報などにいちいち驚く私たちをおもしろく感じたのか、「ちょっと待ってて」と言ってお家のなかから「昨日これつくった。食べてみて」と新しい料理を差し出す。なんだか世話好きな近所のおばさんと話している気分になってくる。はじめは、今日はお弁当を購入してあいさつをすませて、後日にインタビューのアポイントをとれたらと思っていたのだけれど、気がつけば1時間以上も立ち話をしてしまった。とりあえず、これを機に今後もインドネシアの食や文化のことを教えてください、と会話を締めようとする、ファニーさんから「今週末に集まりあるで。くる？」と唐突に招待を受けた。「集まり」とは？と詳しく聞いてみると、高知県に住むインドネシア人ムスリムたちのコミュニティの会があり、そこで高知にモスクをつくる最初の話し合いを行うとのことだった。加えて、そこではファニーさんの弁当も振る舞われるという。イスラム教を信仰していない自分達が行ってもいいものかと、とまどっていると

「全然大丈夫」とものすごく軽い返答がファニーさんから発せられる。

その集まりには美香と0歳児の娘がふたりで参加し、前述の通り、ムスリムコミュニティの人たちから温かく迎え入れてもらった(p.160)。そして、その会をきっかけに、高知のインドネシア人コミュニティとのつながりが生まれ、その後もファニーさんを中心に多くのインドネシアの人たちとさまざまな場面で関わっていくことになる。その関わりの中は、この日のファニーさんの「くる？」というなんとも軽やかな声があったことをとても印象深く感じている。

フォンさんのこと

「バインミー」と書かれた旗を立てたその出店を見つけたのは、高知市内のマーケットイベントをぶらつきついているときだった。「わくせい」では、技能実習生たちの出身国の食べ

物を軽食メニューとして提供することを考えているが、その候補としていまのところ一番有力なのがバインミーだ。ベトナムのサンドイッチとも言えるバインミーは、具材のバリエーションが豊かで、野菜もたくさん用いたさっぱりしたもので、外国料理に慣れない人であっても抵抗なく受け入れてもらえるのではないかと、という理由からだ。

後日、イベントで購入したバインミーについてももう少し詳しく知りたいと思った私たちは、「フォン・バインミー」というSNSアカウントにたどり着く。☑️テイクアウトのみ。1点からは予約できます。私は一人なので、あまり長く待たなくても済むように、皆さんも事前に予約していただければと思います」と掲載されている指示通りにアプリ内のメッセージからバインミー・春巻き・フォアのセット（¥800）を二つ予約して、昼休みのタイミングを見計らって車で土佐市の隣まち、佐川町まで向かった。

フォン・バインミーは佐川町の観光スポットが集まるエリアに位置し、店舗は戸建住宅の駐車場部分に建てられたコンテナだった。それはインドネシア料理の弁当屋「ハラルハウス」のフアンニーさんと同じスタイルだったので、びっくりしながらもどこか親近感を覚える。お店のなかを覗き込むも誰もおらず、奥の母家のほうから店主と思しき女性が「いらっしゃいませ〜」と言いながら出てくる。これもハラルハウスと同じだ。自分たちが予約したものであると伝えると「ごめんね、ちょっと待ってね〜」と店のなかに入り、5分も待たないうちに、頼んでいたセットが二つ、テイクアウト用の容器に入れて手わたされた。ほかに待っている客もいないようだったので、自己紹介をしつつ、少しだけ話をして、後日の取材をとりつけた。

1週間後、お店の休憩時間に合わせて3時ごろに何うと、フォンさんは片手に真っ赤な液体の入ったボウルを抱えて作業をしていた。液体のことを尋ねると「これ、ドラゴンフルーツ。赤いバインミーにするの」とのこと。その週末に予定しているベトナム交流会（高知市で開催されるベトナムの文化交流を目的としたイベント）にそなえて、スペシャルなバインミーを仕込んでいる最中のようなだった。週末のそのイベントや、私たちがフォン・バインミーのことを知ったイベントのように、フォンさんは佐川町でテイクアウト専門のお

店を営業しながら、さまざまなイベントに頻繁に出店しているようだった。SNSでもあがっている営業日のカレンダーを見ると、毎週末なにかしらのイベント名が記載されている。

来日した経緯を伺うと、フォンさんは「10年前ね」と答える。当時、フォンさんはベトナムはハノイの日本食レストランで働いており、そこでいまのパートナーでもある日本人男性と知り合った。結婚を機に10年前に来日し、パートナーの出身地である高知に居を構え、こどもを出産。来日して数年間は子育てをしながら、そのあいまにスーパーでお惣菜製造などのアルバイトをする生活を送っていたらしい。その後、2022年にオープンした南国市のベトナム料理店の立ち上げに参加したのち、すぐに個人の店舗であるフォン・バインミーを高知市の中心部であるはりまや橋商店街の一角にオープンすることになる。しかし、高額な家賃や光熱費に納得できなくなり、今年2023年の夏に商店街の店舗を閉め、佐川町の自宅前にコンテナをかまえ、そこでテイクアウトをやりつつイベントに積極的に出店するスタイルをとるようになったことを話してくれた。

イトインができる実店舗を失ったことについて、「もともとバインミーはストリートフードだから」とフォンさんはポジティブに話す。そういえば、最初にフォンさんからバインミーを買ったとき、フォンさんから「どこで食べるの？」と聞かれ、曖昧な返事していると「あそこの道を行くと公園があつて、そこで食べるのいいよ」と勧めてくれたことがあった。いま思えば、それは外で食べることの楽しさを知っている声がかげだった。

フォンさんのバインミーは、具材はもちろんパンも自身で焼いているオリジナルのものだという。南北へ縦に長いベトナムは、北部、中部、南部とそれぞれに独自の食文化があり、バインミーについては具材・味付けと同様に、パンの食感も変わるとのことだが、フォンさんのバインミーは、南部のパリッとした食感のパンに、優しい味づけの北部の具、そして日本人で苦手な人が多いハーブを控えめにしたスタイルを採用しているとのことだった。話を聞いていて、ハーブを抑えずに使ったバージョンも食べてみたい、と話すと、フォンさんは「ハーブあるよ」と私たちを家の裏庭に案内してくれた。裏庭はコンパクトながら一面が畑になっていて、ミントやレモングラスなどバインミーやそれ以外の料理でも使

用されるハーブを植えている。私たちがベトナムでは、生のドクダミを食す文化があると聞いたことがある、と聞くと、フォンさんは畑から2種のドクダミをちぎって私たちに食べるように促した。一つはベトナムの品種でもう一つは日本の品種。ベトナムのドクダミのほうが明らかに香りが強く、酸味が抑えめでおいしく感じた。驚く私たちをみて、フォンさんが笑いながら「ベトナムはたくさんハーブ食べるよ!」と言う。

その日、フォンさんに「わくせい」の計画の話をする、とても興味をもって

れた。フォンさん自身も土佐市にお店を出そうか検討したこともあったという。フォンさんのバインミーを「わくせい」のメニューの一つとして扱うのか、イベントなどでの期間限定の商品として売り出すのか、まだまだ未定の部分は残っているが、なにかしらのかたちで「わくせい」からフォンさんのバインミーを届ける仕組みを考えていきたい。



フォンさん（右）と店の前で

土佐市の「多文化共生のまちづくり促進事業」の一環として実施した技能実習生や特定技能外国人への聞き取り調査（p.28）のなかで、「土佐市でやってみたいことは？」という質問に「スポーツの活動に参加する」と回答する実習生たちが一定数いました（*1）。実際にやりたいスポーツの種目を聞いてみると、フットサル、バトミントン、野球などの答えが返ってきます。日々の生活のなかで、実習生たちが職場以外の日本人と接する機会がほとんどないということが課題となっている状況で、それを解決する一つの手として「地域の人と一緒にスポーツをする」機会をつくれたら、とその可能性を探ってみることにしました。

昨年度の活動から、実習生たちの休みが不定期であり、単発的なイベントを開催しても

参加できない（しない）ということが予想できたため、本企画では定期的な活動として実施することで、実習生たちがそれぞれのタイミングで参加し、継続的に関わりをもつことができるようにしようと考えました。とはいえ、自分たちで部活動のようなものを新しく立ち上げて定期的に活動しようとしても、人手が足りず、長続きしないことは目に見えています。あくまでも、新規の活動ではなく、既に定期的な活動をしている団体の練習に実習生たちが参加する、というかたちが理想的だと考えました。

そこで、定期的にソフトバレーの練習をしている土佐市青年団（*2）の森岡千晴さんに相談してみると、「青年団も土佐市に暮らす外国人の皆さんと交流していきたいと話していたところですよ」との返答がありました。話し合いの末、まずは一度、実験的に開催してみることになり、初回は2023年9月22日（金）の19時から、場所は土佐市民体育館と決まりました。平日の夜の開催となったので、仕事が終わった実習生たちが参加してくれるのではないかと期待しました。

当日、19時の時点では土佐市のALTであるAさんと土佐市内の監理団体B組合の日本人スタッフ、それから青年団のメンバーが数人集まっていますが、実習生たちの姿は

まだ見えません。実習生たちが参加できるかどうかはその日のそれぞれの仕事次第なので、飛び入りで来るかもしれないし、一人も来ないかもしれない。とりあえず、集まった人で練習を始めようと準備をしていると、β組合で研修を受けているという実習生たち7、8人がやってきました。場は一気に賑やかになり、ベトナム語、インドネシア語、英語、日本語が飛び交うなか、ソフトバレーの練習がはじまりました。

2人ひと組に分かれてストレッチをしていると、新たに実習生らしき人たちが体育館に続々と入って来ました。話を聞くと、かれらは高知市周辺に暮らす実習生や留学生たちで、みんなで車に乗り合わせて土佐市まで来てくれたようでした。そして続いて土佐市に住むインドネシア人の実習生たちも入ってきました。小雨が降るなか、カッパを着て自転車で駆けつけてくれたようでした。

結果として、技能実習、特定技能、A L Tを含む、ベトナム、インドネシア、アメリカ、日本から、計24人の参加がありました。想像以上にたくさんの人たちの参加があり、どこで情報を知ったのだろうと不思議に思いましたが、後で聞いてみると、同じ国同士のネットワークから情報が広がっていったことがわかりました。この日は国別対抗のリーグ戦や

多国籍チームの対抗戦などを行い、結構な盛り上がりを見せていました。

スポーツの活動に手応えを感じた青年団メンバーと私たちは、この活動を定期的に開催していくことに決めました。とはいえ、定期的な開催は容易なことではありません。現状としては、青年団の皆さんが中心となって日程決めや場所の確保などの運営を担っていただいております、私たちはそこに参加しつつ、広報などを可能な範囲でサポートしながら、継続的な開催を維持しています。また、遠方に住む実習生たちが、交通手段がないことから活動に参加できないという課題も見えてきました。いまは日



アメリカ・日本・インドネシア・ベトナムの混合チーム

本人の参加者が可能な範囲で送り迎えをしていますが、今後、人数が増えていったときには、どのように対応するかを考えていく必要があります。

一方で、青年団の森岡さんは「以前から青年団のメンバーで定期的にソフトバレーの練習をしていましたが、参加者が集まらないときも多かったんです。そこに実習生をはじめとした外国人の方が参加してくれるようになって、おもしろそうだから参加したい、外国の人と交流したいという参加者が増えてきています」と話してくれました。協力隊のミッションでもある「海外からの技能実習生と地域住民との交流づくり」に取り組もうとするとき、地域との関わりが希薄である「実習生たちを「サポートしよう」と考えがちですが、新しいつながりが生まれてうれしいと感じるのは、実習生たちだけではなく、日本人も同じなのだとあらためて感じました。

2024年3月の時点では、月に3回、土佐市民体育館と市内の小学校の体育館でソフトバレーを行っています。定期的に開催することで、参加者も定着し、顔見知り程度だった関係から友人と呼べるほど仲良くなった人たちが増えてきました。特に小学校の体育館でのバレー練習では、近くに住む実習生・特定技能の人たちが毎回参加してくれるように

なり、とてもいい雰囲気です実施することができています。

また、ここでの活動をとおして出会ったキエルさんに、後にシンポジウムに登壇してもらうことになったり、青年団が主催するイベントにゲスト出演する特定技能の人が出てきたりと、まだまだ新しい展開が起こりそうな気配を感じています。

* 1 いくつかの答えのなかから選択式で回答を選んでもらう形式で行った。

自由記述欄も設けた

* 2 土佐市を盛り上げるため、若者が中心となり活動している社会教育団体

土佐市国際交流推進実行委員会

2024年12月、土佐市内の会社経営者や高知リハビリテーション専門職大学、地域おこし協力隊の阿部が中心となり、「土佐市国際交流推進実行委員会」という市民団体を立ち上げました。当団体は、土佐市に暮らす外国人住民と地域住民とが交流活動を通じてネットワークをつくり、地域の新しい魅力を生み出すことを目標とし、最終的には、土佐市で開催される祭りでのアジア料理店の出店を目指しています。

立ち上げのきっかけは、2023年度に開催された「土佐市商店街等振興協議会（*1）ワーキンググループ（以下、ワーキンググループ）」のワークショップでした。ワーキンググループとは、土佐市商店街等振興協議会の事務局である土佐市商工会が主体となっており、さまざまな分野の市民が「グループ」を組み、商店街活性化のための事業を立ち上げるま

でを、ワークショップ方式で議論してつくりあげる仕組みになっています。人口減少と少子高齢化が進む土佐市における市内の商店街を中心とした地域活性化への取組みを検討するために、市の現状把握や参加者同士の意見交換、アイデア出しなど、全5回のワークショップが行われ、市内の事業者や学校関係者、地域おこし協力隊のような移住者など、さまざまなバックグラウンドをもつ人たちが参加しました。私たちは、このワーキンググループという枠組みのなかで、「外国からの技能実習生と地域住民との交流づくり」のための新しい企画を、「地域の人たちと手を組んで」実施できる機会になるのではと考え、ワークショップに参加することにしました。

ワークショップのなかで、特に印象的だったのは、そこに参加していたほかのメンバーとのやりとりでした。

その日は、自分が主体的に取り組んでみたいプランについてそれぞれのアイデアを出し合う回でした。そこで私たちは、「学校などで行っている定期的な部活動に実習生が参加する」「土佐×アジアパーベキューフェスを開催する」という二つのアイデアを提案してみました。一つ目の「定期的な部活動に実習生が参加する」という案は、市内で技能実習・

特定技能の人たちが増加している一方で、かれらと地域の関わりが希薄だという課題に対するプランです。高校生や大学生の部活動は、実習生たちにとっては自身の年齢と近い人たちとの交流となり、市民サークルなど主体者がいて定期的に行われている活動はもとから継続性が備わっているため、実習生たちが不定期に参加しても受け入れることのできる体制があると考えました。二つ目の「土佐×アジアバーベキューフェスを開催する」は、地域の人たちが実習生たちのことを知るきっかけとしてのイベントで、そこでかれらの母国料理を食することで、その国や文化について学ぶ機会になるだろうと考えました。加えて、「フェス」というイベントをひらくこと自体が、地域の活性化に直接つながるだろうというアイデアでした。しかしながら、それらの提案に対するグループ内のほかのメンバーたちの反応は「おもしろそうだけど、実現するにはハードルがある」というものでした。外国人住民が増加しているとはいえ、生活のなかで外国人と直に接する機会がある人はそれほど多くはありません。それを思えば、具体的に接点を増やしていくとするアイデアに躊躇するのは当然の反応だと思えます。また、学校の部活動に参加するには、受け入れる学校や生徒とも関係を築いていく必要がありますし、ベトナムやインドネシアなどの料

理を食べたことがない人たちも多いなかで、それらの料理を扱ったイベントを開催するにはハードルもあるでしょう。とはいえ、異なる意見や課題を揉んでいくのがこのワーキンググループという場です。こういった内容・方法なら可能性があるのかを引き続き、話していくことになりました。

その後の話し合いでも、ネックになるのは、「技能実習生たちとの接点もまだないのに、唐突にイベントだけを開催しても人が集まらないのではないか」という点でした。その解決策として考案されたのが、「土佐市国際交流推進実行委員会」の基本となる考え方でした。

①技能実習生・特定技能外国人たちを知る機会をつくる

- ・「スポーツ」と「食」を軸に、定期的に関わることができる機会をつくる。
- ・「スポーツ」実習生たちから要望の多かったフットサルを月1回開催する。（フットサルをしたい人は多いものの、実施可能な施設が限られており、近隣ではほとんどないとのこと）

・「食」食に関するイベントを年に数回行う。食については、実習生たちだけで

なく、日本人にも興味をもってもらいやすい。実習生たちにとっては母国の味を楽しむ機会に、日本人にとっては新しい味を知る機会となる。

②土佐市の祭りやイベントに出店する

・初めから「土佐×アジアバーベキューフェス」を開催するのは難しいかもしれないが、祭りや地域のイベントであれば、自分たちでも比較的出店しやすいのではないかと。また、祭りやイベントなど、さまざまな人が集まる場にアジア料理を提供する店を出すことで、インドネシアやベトナム料理の味を広く知ってもらおう機会にもなる。

・近年、祭りの参加者やブースに出店する人が少なくなってきたという話もある。実習生をはじめとした外国人住民や、東南アジアの料理に興味がある地域住民が参加することで、地域の活性化にもつながる。

以上の考え方をもとに、ワーキンググループがまとめる「基本となる取組」の一つとし

て私たちが提案した企画「外国人との交流の場づくり」が多様性のある商店街活性化につながる取組として採用されることになりました。そして、その企画を実施していくために団体を立ち上げることとなり、発足したのが「土佐市国際交流推進実行委員会」です。

あらためて、この団体には、技能実習生や特定技能外国人を雇っている実習実施者（事業者）が構成メンバーとして関わっています。実習生たちと地域住民、双方の交流を推進しようとするとき、私たちのような第三者が企画することにももちろん意味があります。そこに、日々実習生たちと接している雇い主が加わることにどんな意味があるのでしょうか。まずは、企画の内容がより実習生たちの生活実態に即したものになっていくことが想像できますし、雇い主から実習生へと直接声かけを行うことができるため、情報も断然伝わりやすくなるのが考えられます。また、実習生たちを雇っている実施者は、業者ごとやエリアでのつながりが強いいため、そのネットワークをいかすことができれば、イベント情報などを広く拡散することもできます。これは集客だけの話ではありません。例えば今後、各地域の自主防災組織が運営する避難訓練なども連携し、防災といった身を守るために必要な情報を実習生たちに確実に伝えることもできます。そして、つながっている雇い主

が増えていけば、実習生たちが地域と関わる際に、サポートしてくれたり、「行ってこい」と背中を押してくれる場面も出てくるかもしれません。

実行委員会が描くロードマップ

ワーキンググループでは、2024年～2026年までの3年間のアクションプランを立てました。

1年目（2024年度）

- ・月1回のスポーツ交流を土佐市内にある高知リハビリテーション専門職大学（以下、高知リハ大）にて実施。大学生との交流も目指す
- ・食のイベントを年に2～4回ほど開催。コミュニティ内での異文化交流を行いつつ、並行して東南アジアの食に興味をもってもらい、将来的な祭りでのアジア料

2年目（2025年度）

- ・月1回のスポーツ活動と年数回の食のイベントを実施
- ・高知リハ大の学園祭等、地域のイベントに参加
- ・土佐市の大綱まつりと宇佐大鍋まつりへの出店を目指す

3年目（2026年度）

- ・月1回のスポーツ活動と年数回の食のイベントを実施
- ・高知リハ大の学園祭等、地域のイベントに参加
- ・土佐市の大綱まつりと宇佐大鍋まつりへの継続的な出店
- ・東南アジアの食フェス開催（商店街で単独開催）

第0回土佐市インターナショナル・スポーツクラブ

土佐市国際交流推進実行委員会の最初の取り組みとして3月に実験的なスポーツ交流会「第0回スポーツクラブ」を開催することにしました。会場となる高知リハ大では、校内のイベント等の運営を学生による自治会が担っていると聞き、年明けの1月に、私たち実行委員会メンバーは自治会の集会に参加し、3月のスポーツクラブについてのプレゼンテーションを行いました。学生さんの参加もぜひ、と伝えましたが、3月は春休みで、学生の参加は難しいようでした。

3月15日(金)に開催した「第0回スポーツクラブフットサル」には、30人を超える参加者がありました。市内で働く実習生・特定技能外国人をはじめ、市内外からALT、市役所職員、青年団メンバー、留学生などの参加があり、なかには土佐市から小一時間かかる香南市野市町から車に乗り合わせて来てくれた実習生たちもいました。参加者は男性が多く、経験者がほとんど。おもしろいことに、それまでに実施してきたソフトバレーやはんのかいといった集まりとはまた違う顔ぶれが今回のフットサルに参加していました。

かれらは、いわゆる「交流」要素の強い催しには興味をもたずとも、今回のような純粋にスポーツを楽しむ機会であれば参加する気になるのだろう、という印象を受けました。それでも、ゴールが決まる度に、実習生たちと地域の人たちがハイタッチをかわしたり、即席でつくったチームで肩を組んで写真を撮ったりと、ものすごく自然に交わる様子を見ることができました。

フットサルについては、今後も継続的に開催し、徐々に高知リハ大の学生たちにも参加してもらえようように広報していきたいと考えています。そして、そのネットワークを食のイベントやほかの企画につなげていくことを目指します。

* 1 2023年7月に設立。商店街等及び周辺事業者、商工会、行政等で構成され、商店街等振興を目的とした振興計画の策定を行った。



第0回 土佐市インターナショナル・スポーツクラブ

Chap.

5

こ
れ
か
ら
の
計
画

2年間の活動を経て、現時点での「わくせい」の計画は、以下の図のように更新されています。イントロダクションと重複するところもありますが、改めてその計画を書いてみます(図37)。

①「東南アジアマーケット」

土佐市には、多くの技能実習生たちが生活していますが、そのかれらの文化圏で食される調味料、ハーブ、インスタント食品、お菓子などを取り扱うショップです。技能実習生たちにアドバイスをもらいながら商品セレクトし、実習生たちが故郷の味を楽しめる機会と、地域の人たちが新しい食文化に触れる機会を同時につくります。

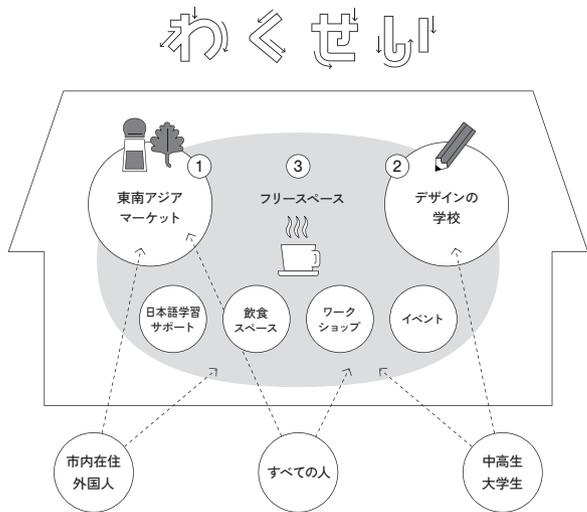


図 37

「スパイスショップ」としていた部分を「東南アジアマーケット」と更新しています。そこには「東南アジア」という実習生たちの出身地に特化する姿勢を示すことと、お店の敷居を下げるという意図があります。というのも「スパイスショップ」と説明すると、度々「マニアックなこだわりのあるオシャレな店」というイメージをもたれることがあったのですが、私たちが目指すのはもう少し雑多でラフなお店です。珍しい調味料を扱うこともある

とは思いますが、一方で手軽につくれるレトルト食品や、現地のジャンクフード的なお菓子や軽食を扱うことも考えています。そもそも「わくせい」にこのような「店」の要素を組み込んでいるのは、この場所を日常生活のなかで習慣的に立ち寄れる場所にするためです。「わくせい」が訪れる人たちの日々の経済活動の一部になることで、「交流」は非日常のイベントのなかではなく、日常のルーティーンのなかで発生します。

②「デザインの学校」

地域の中高校生、大学生を対象としたデザインを学べる私塾を開きます。デザインの基本はコミュニケーション。自分で考え、調べ、発信するという一連のプロセスを、さまざまな背景をもつ人たちが集う場所で学びながら実践します。

今年度、「デザインの学校」へむけた実験的な取り組みとして、高知学芸高校の美術部と共同で「学芸デザインミーティング（GDM）」を実施しました。月1

回のペースでデザインのワークショップを企画し、高校生たちの反応も見ながらデザインを学ぶことについて模索していきました。本書と同時に制作した別冊「GAKUJUI DESIGN MEETING REPORT 2023」にて詳細を掲載しています。

③「フリースペース」

「わくせい」は、すべての人に開かれた場所であり、目的なく訪れることもできる自由な場所です。休憩、自習、読書といったお金を必要としない日常的な利用から、定期的で開催されるイベントやワークショップへの参加まで、それぞれの心地よい距離感や方法で関わることができます。

「コミュニティスペース」としていた部分を「フリースペース」と更新しています。意味的には「コミュニティ」で申し分ないのですが、その言葉から具体的な利用の姿がイメージできないという懸念があり、「自由」、「無料」ということ

が伝わる「フリー」という単語を採用してみました。最終決定ではありませんが、この言葉がどう届くか経過を見ていきます。

2023年度開始時と比べると、それぞれで機能的な変化はほとんどありませんが、現在の仕方が調整されています。マイナーチェンジではありますが、この調整により「わくせい」のより具体的な輪郭が見えてきており、そのなかで「わくせい」と「地域」との関係性についても考えることができるようになってきました。もし、上記の3つの要素がうまく機能すれば、「わくせい」には、さまざま立場の人たちの日々の情報や困りごとといった相談が集まることになります。そのすべてを「わくせい」で解決することはできませんが、それらの人や情報を地域ですでに存在しているさまざまな団体、活動につながるができます。この2年の活動をおして、協力しあえる関係を築くことができた人たち、実習生や監理団体、実習実施者の皆さん、日本語サロンや国際交流関係の方々の方が頭に浮かびます。その人たちの間で、「わくせい」が「ハブ」となることを、もう一つ広い視野での目標として定めます。

これから始まる2024年度は、地域おこし協力隊として活動する最終年度となり、それは「わくせい」のオープンまでの準備期間が残り1年になったことを意味します。わくせいプロジェクトとして、2024年度は以下の事業を計画しています。

〔土佐市との共同事業〕

① 技能実習生、特定技能外国人と地域住民による共同防災事業

アンケート調査の結果でも顕著に現れた防災における課題へ向けた取り組みです。入れ替わりの激しい実習生たちへの防災事業として、単発ではなく、すでに存在する地域住民の活動と連動した継続的に展開できる事業を企画します。

② 小学校での出張授業

実習生たちが小学校を訪れ、自らの文化について小学生に授業をする事業です。小学生にとっての異文化体験としてだけでなく、実習生たちと地域との関係づくりにもつなげることを目論んでいます。

③ 多文化共生プランの策定

アンケート調査やシンポジウムでの議論を、具体的に市の施策につなげるために、市の多文化共生事業における「プラン」を策定します。私たちの地域おこし協力隊としての活動が終了した後も、市が独自で事業を進めるためのガイドとしての機能をもたせることを考えています。

「わくせいプロジェクト独自の事業」

④ 拠点の整備

市内で借りた拠点を、「わくせい」としてオープンするために整備します。建築家や建築を学ぶ大学生、地域の人たちと協働しながら「わくせい」の計画を実現できる空間をつくります。

⑤ 東南アジアマーケットの実験

商品のセレクト、仕入れ、販売におけるプロセスを構築します。実験的に販売し

てニーズを把握したり、実習生たちからの意見を聞いたりしながら、具体的な運営・経営計画をつくります。

以上5つの事業を軸にプロジェクトを展開します。まだまだ「わくせい」実現までの道りは長く、課題も山積みではありますが、活動のなかでの経験や気づきを計画にフィードバックしていきつつ、前へ進んで行きたいと考えています。

ここで2023年度のレポートを終えたいと思います。今回も昨年度のレポートと同様に「中間報告」です。今回のレポートを読んでいただき、少しでも興味を持っていただけましたら、わくせいプロジェクトの今後を気にしていただけたらうれしいです。なお、活動の告知や実施の様子は、随時SNSにて発信していきますので、そちらもぜひ。最後に、この1年間、活動にご協力いただきました方々、時間をとって話をお聞かせいただいた方々、声がけにいつも快く応えてくれる外国から来た友人たちに深く感謝いたします。ありがとうございました。引き続きよろしくお願ひします。

登壇者・インタビュー話者 プロフィール

(敬称略)

大谷悠

まちづくり活動家・福山市立大学専任講師。2010年に単身渡独、2011年ライブツィヒの空き家にて仲間とともにNPO「日本の家」を立ち上げ、以来日独で数々のまちづくり・アートプロジェクトに携わる。2019年秋から尾道に在住。築100年の空き家を「迷宮堂」と名づけ、住みながら改修し、国籍も文化も世代も超えた人々の関わり合いの場にしようと活動中。2022年より現職。単著に「都市の〈隙間〉からまちをつくらうードイツ・ライブツィヒに学ぶ空き家と空き地のつかいかた」(学芸出版)がある。

岡内大三

編集者・ライター。2011年に出版社を退社し、フリーランスのライター・編集者にて。主にルポルタージュを執筆している。単著に『香川にモスクができるまで』(晶文社)。kotoba(集英社)、うかたま(農文協)でもモスクについてのエッセイを寄稿。ストーリーテリングの手法を模索し、映像作品や舞台もつくる。瀬戸内国際芸術祭 2019で「豊島産廃不法投棄事件」を題材に、音楽と花活けと語りを融合させた舞台を制作。

阿部航太

ロンドン芸術大学卒業後、廣村デザイン事務所を経て、2018年よりフリーランスとしてデザイン・文化人類学を指針に活動を開始。2018～19年、ブラジル・サンパウロにて、現地のストリートカルチャーに関する映画「街は誰のもの？」を制作。2022年4月に地域おこし協力隊として土佐市に移住し、「わくせいプロジェクト」を展開中。

児玉美香

アメリカ・ミズーリ州にあるリンデンウッド大学を卒業後、現代芸術祭「あいちトリエンナーレ 2010」のスタッフとして働く。2014～2022年、名古屋市港区にある港まちづくり協議会に勤務し、アートプロジェクトやさまざまなまちづくり事業を担当。2022年4月に地域おこし協力隊として土佐市に移住し、「わくせいプロジェクト」を展開中。

岩佐和幸

高知大学人文社会科学部教授。専門は農業・食料経済論、アジア経済論、地域経済論。主な著作に『マレーシアにおける農業開発とアグリビジネスー輸出指向型開発の光と影ー』(単著/法律文化社 2005年)、『アグリビジネスと現代社会』(共編著/筑波書房 2021年)がある。2023年度の土佐市による技能実習生たちへの調査においてアドバイザーを務める。

阿部一郎

(一財)自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー。(公財)箕面市国際交流協会事務局次長を経て、(特活)多文化共生センター理事長、東京外国語大学多言語多文化教育研究センター研究員、全国各地の国際交流協会のアドバイザー等を歴任して現在に至る。大学で教鞭をとる傍ら、バンコクのスラムで暮らす子どもたちへの教育支援活動や国内の子育て支援のNPO活動に参加している。

キエル イェヘスキエル

高知ファイティングドッグス(株)グローバルコネクションスタッフ。インドネシア・ジャワ州バンドン出身。2019年に留学生として来高し、龍馬デザイン・ビューティ専門学校日本語学科にて学ぶ。現在は高知ファイティングドッグスにてスポーツをとした国際交流事業に従事。外国人と日本人が共生する社会をめざし、多文化共生をテーマにしたトークイベントにもゲストとして登壇している。

ハイル ウマム

在高知インドネシア人会委員。インドネシア・ジャカルタ出身。2014年にインドネシアの農業大学を卒業。在学中からドラゴンフルーツをはじめとした農作物の栽培に従事。2020年に来高し、2024年3月まで高知市春野町にあるトマト農家に勤務。高知のインドネシア人コミュニティの一員として地域社会との共生を模索している。

わくせいPROJECT in 土佐市 レポート2023

土佐市地域おこし協力隊 2023年度報告書

執筆・製作 | 阿部航太、児玉(阿部)美香 [土佐市地域おこし協力隊]

校正・編集協力 | 笹田理恵

表紙アートワーク | 山口洋佑

デザイン | 阿部航太

印刷・製本 | イニユニック

発行日 | 2024年7月29日

発行 | 土佐市

問合せ | 土佐市地域おこし協力隊 (阿部)

〒781-1192 高知県土佐市高岡町甲2017-1 (土佐市役所)

e-mail kyoryoku.tosa.info@gmail.com

web wakusei-tosa.com

SNS、取材記事、最新情報はこちら



https://linktr.ee/wakusei_tosa

土佐市地域おこし協力隊
2023年度報告書

ミッション | 国際交流

外国からの技能実習生と地域住民との交流づくり